三重県埋蔵文化財調査報告 100－3

糀屋垣内遺跡

１９９４．３

三重県埋蔵文化財センター

亀山市教育委員会

例　　言

1，本書は、平成元年度から平成３年度に亀山市教育委員会が建設省中部地方建設局から委託を受けて実施した、一般国道１号亀山バイパス建設予定地内にかかる糀屋垣内遺跡埋蔵文化財発掘調査（整理・報告書作成業務）の発掘調査報告書である。

2，当該調査業務にかかる費用は、建設省中部地方建設局の全額負担による。

3，発掘調査及び遺物整理にあたっては、三重県教育委員会文化振興課・三重県埋蔵文化財センター並びに下記の方々のご指導・助言を賜った。記して謝意を表する。（順不同、敬称略）

中井信之（名古屋大学理学部地球科学科教授、名古屋大学年代測定資料研究センター長）
伊藤秋男（南山大学文学部教授）
西山要一（奈良大学文学部文化財学科助教授）
生駒　勝（亀山市文化財専門委員）
安川富春（三重県文化財パトロール員、亀山市文化財専門委員）
三重県農業技術センター

4，糀屋垣内遺跡については、既に刊行している『亀山市文化財調査速報第８号』（亀山市教育委員会・1990.12）、『一般国道１号亀山バイパス埋蔵文化財調査概要Ⅵ』（三重県教育委員会・1990.3）、『一般国道１号亀山バイパス埋蔵文化財調査概要Ⅶ』（三重県教育委員会・1991.3）にその調査概要を公表しているが、本書をもって最終的な報告書とする。

5，本書に収録した調査の記録類、出土遺物は亀山市教育委員会で保管している。

6，本書に使用した遺構表示略記号は下記のとおりである。また、遺構実測図作成にあたっては国土調査法による第Ⅳ座標軸系を基準とし、図面上の方位は座標北を用いた。

ＳＢ　掘立柱建物　　ＳＥ　井戸　　ＳＤ　溝　　ＳＫ　土坑　　ＳＸ　土壙墓　　ＳＨ　竪穴住居

7，現地調査及び遺物整理は下記が行い、全体を亀山隆が総括した。

平成元年度　社会教育課主事　亀山　隆
同　調　査　員　大川勝宏（現：三重県教育委員会）
同　調査補助員　笠井賢二（奈良大学学生）・草川貴紀（皇学館大学学生）
小林礼二（早稲田大学学生）
（室内整理）　明石秋矩・山尾静子・伊藤教子・坂みゆき

平成２年度　社会教育課主事　亀山　隆
同　調　査　員　森　崇史（現：愛知県南知多町教育委員会）
同　調査補助員　笠井賢二（奈良大学学生）・草川貴紀（皇学館大学学生）
小林礼二（早稲田大学学生）
（室内整理）　明石秋矩・山尾静子・伊藤教子・坂みゆき

平成３年度　社会教育課主事　亀山　隆
同　調　査　員　山口昌直
同　調査補助員　笠井賢二（奈良大学学生）・草川貴紀（皇学館大学学生）
小林礼二（早稲田大学学生）・佐藤慎哉
（室内整理）　明石秋矩・山尾静子・伊藤教子・坂みゆき

遺物実測・トレースは、亀山隆、大川勝宏、森崇史、山口昌直、山尾静子、伊藤教子、坂みゆきが行った。遺物写真は山口昌直が行った。執筆及び編集は、森崇史の作成したデータを基に亀山隆が担当した。

8. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

目　　次

例　言
目　次
図版目次
挿図目次
表目次
Ⅰ，前　言 …… 1
Ⅱ，位置と周辺の歴史的環境 …… 4
Ⅲ，遺　構 …… 6
Ⅳ，遺　物 …… 33

図版目次

PL１　調査区全景 …… 47
PL２　調査区東から …… 48
　　調査区西から …… 48
PL３　SH１ …… 49
　　SH２ …… 49
PL４　SB11 …… 50
　　SB40 …… 50
PL５　SB18 …… 51
　　SB46 …… 51
PL６　SB37 …… 52
　　SB62 …… 52
PL７　SB66 …… 53
　　SB81 …… 53
PL８　SB72 …… 54
　　SB80 …… 54
PL９　SB75 …… 55
　　鍛鉄関連遺構群全景 …… 55
PL10　SX１ …… 56
　　SX２ …… 56
PL11　SE１ …… 57
　　SE１遺物出土状況 …… 57
PL12　SE２ …… 58
　　SE２遺物出土状況 …… 58
PL13　SE４ …… 59
　　SE４遺物出土状況 …… 59
PL14　SE３ …… 60
　　SE５ …… 60
PL15　SK72 …… 61
　　SK43・44 …… 61
PL16　出土遺物（１） …… 62
PL17　出土遺物（２） …… 63
PL18　出土遺物（３） …… 64
PL19　出土遺物（４） …… 65
PL20　出土遺物（５） …… 66

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　遺跡地形図 …… 3
第３図　古絵図の羽若村（部分） …… 5
第４図　遺構平面図 …… 7～8
第５図　SK35・72，SH１実測図 …… 9
第６図　SB29実測図 …… 10
第７図　SB７実測図 …… 11
第８図　SB５・35実測図 …… 12
第９図　SB16・25実測図 …… 13
第10図　SB40実測図 …… 14

第11図　ＳＢ10・17実測図 …… 17
第12図　ＳＥ１・２・３，ＳＫ38実測図 …… 18
第13図　ＳＢ11・26実測図 …… 19
第14図　ＳＢ28・30実測図 …… 20
第15図　ＳＢ46・61実測図 …… 21
第16図　ＳＢ62実測図 …… 22
第17図　ＳＢ70・75実測図 …… 23
第18図　ＳＢ72・78実測図 …… 24
第19図　ＳＢ80・81実測図 …… 25
第20図　ＳＢ62・66実測図 …… 26
第21図　ＳＢ68・76実測図 …… 27
第22図　ＳＥ４・５実測図 …… 28
第23図　ＳＸ１・２，ＳＫ４・11・40・43・44，
P393・1056実測図 …… 29
第24図　鍛鉄関連遺構群 …… 30
第25図　出土遺物実測図（１） …… 35
第26図　出土遺物実測図（２） …… 36
第27図　出土遺物実測図（３） …… 37
第28図　出土遺物実測図（４） …… 38
第29図　出土遺物実測図（５） …… 39
第30図　出土遺物実測図（６） …… 40

表　目　次

第１－１表　掘立柱建物一覧表 …… 31
第１－２表　掘立柱建物一覧表 …… 32
第２－１表　出土遺物観察表 …… 41
第２－２表　出土遺物観察表 …… 42
第２－３表　出土遺物観察表 …… 43
第２－４表　出土遺物観察表 …… 44
第２－５表　出土遺物観察表 …… 45

Ⅰ　前　　言

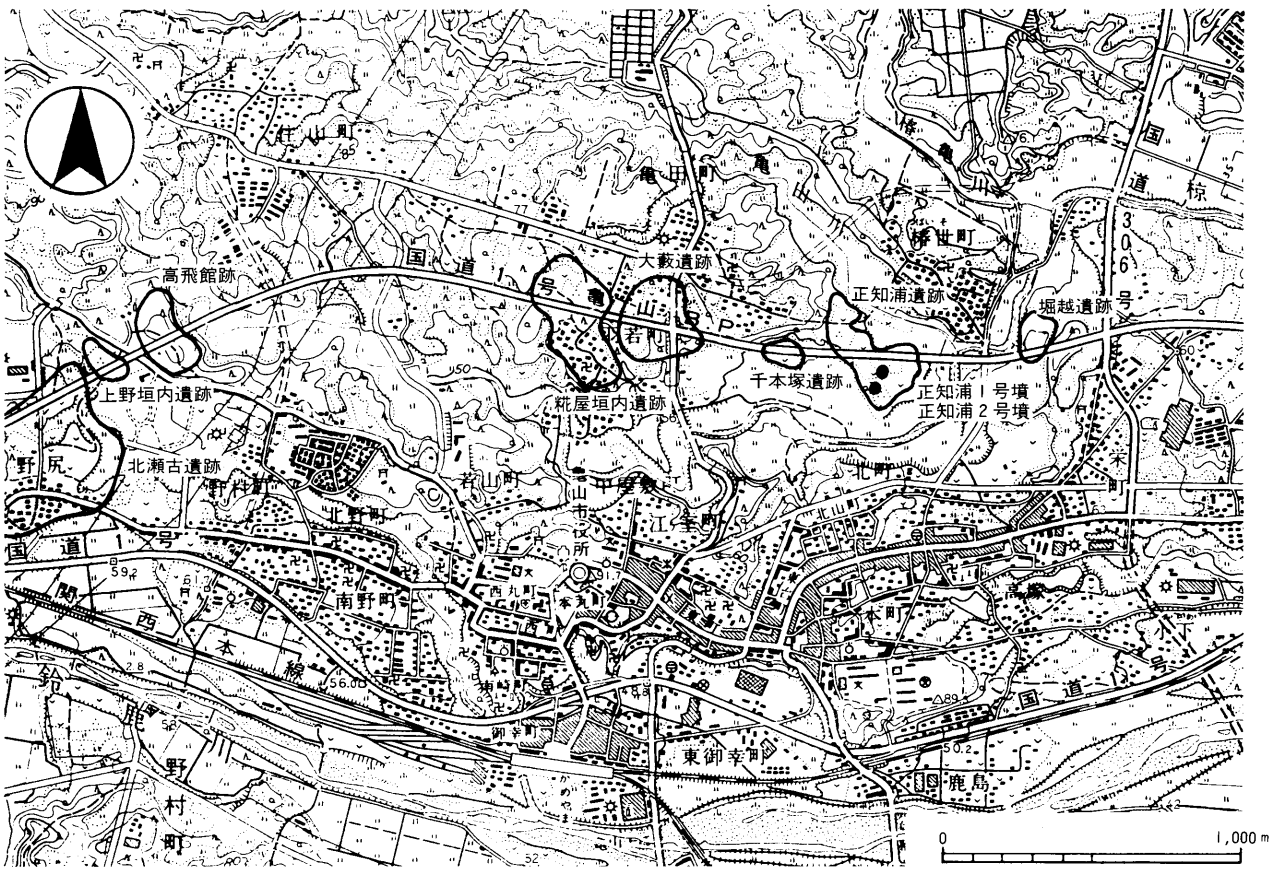
1．調査に至る経過

糀屋垣内遺跡は行政区画上は亀山市羽若町字糀屋屋垣内に所在する。昭和63年２月に、一般国道１号亀山バイパス建設に伴う三重県教育委員会による分布調査で確認された遺跡であるが、これより先の昭和49年の分布調査の際には、同じ羽若町内で糀屋垣内の北側に位置する字松本に所在する、松本遺跡の一部として報告されている。また、字糀屋垣内と市道を挟んだ東側に位置する字大藪も遺跡が確認されており（大藪遺跡）、実質的な遺跡の範囲は羽若町北部と亀田町西側にまたがる台地上のほぼ全域に及ぶが便宜上、３つの字ごとに遺跡を分けて取り扱うこととした。

発掘調査に先立ち、昭和63年三重県教育委員会により範囲確認調査が行われ、29箇所の試掘坑のうち23箇所から遺構、遺物が確認され、建設地内の小規模な谷を挟んだ台地上のほぼ全域に遺跡が広がることが確認され、その面積は9,500㎡にも及んだ。

この時期、地元である亀山市は糀屋垣内遺跡の北側の亀田町地内に、亀山市医療センターの建設計画を進めていたこともあり、亀山バイパスの川合～亀田間の早期部分完成を建設省に強く希望し、そのために工事に際しての全面的協力を行う意志を表していた。このため、本来であれば三重県教育委員会が実施することとしていた国道にかかる埋蔵文化財保護事業の一部のうち、特に部分開通の為に必要な糀屋垣遺跡の調査について、建設省、三重県教育委員会、亀山市教育委員会の三者において協議を行った結果、糀屋垣内遺跡について、現地調査を平成元年度から平成２年度の２カ年にかけて、平成３年度に出土品整理及び報告書作成を亀山市教育委員会が行うことで合意した。

この協議に基づき、平成２年２月１日付で建設省中部地方建設局長と亀山市長の間で、「一般国道１号亀山バイパス建設地内に存する埋蔵文化財の適正な保護の措置を講じるための事前発掘調査についての協定書と協議書、一般国道１号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書の締結を行った。なお、協定書、協議書については、平成元年から２年度までの２ケ年で締結を行い、平成３年３月30日付



第１図　遺跡位置図（１：25,000）　　（国土地理院・亀山）

けで変更協定書の締結を行った。また、契約書については、各年度毎に締結した。

調査費用については、以下の通りである。

平成元年度　　1,691,319円（消費税含）
平成２年度　　21,893,984円（消費税含）
平成３年度　　13,254,240円（消費税含）
合　計　　36,839,543円（消費税含）

なお、この経費は、調査に係る直接的費用のみの金額であり、調査に伴う発掘作業については、建設省中部地方建設局、亀山市、社団法人中部建設協会との三者協議により、発掘作業は亀山市係員の指示により中部建設協会が実施し、その費用は建設省が負担することで、平成２年２月１日に協定書を締結している。

２，調査の方法

今回の調査は、全面積9,500㎡のうち初年度調査分として、3,000㎡を平成２年２月２日から３月19日まで現地調査を実施し、次年度調査分6,500㎡を平成２年４月26日から10月29日まで行った。調査方法として、調査区域を建設地内の中央杭に基づいて４m毎に木杭を設置し、これに南北方向に数字を、東西方向にアルファベットを付してこのグリッド単位で遺物の取上を行った。調査は三重県教育委員会の指導のもとで、以下の体制で実施し、全体の総括を亀山市教育委員会社会教育課主事亀山隆が行った。

平成元年度
（現地調査）
社会教育課主事　亀　山　隆
調　査　員　大川勝宏
調査補助員　笠井賢二（奈良大学生）
草川貴紀（皇学館大学生）
小林礼二（早稲田大学生）
（室内整理）
調査補助員　明石秋矩　山尾静子
伊藤教子

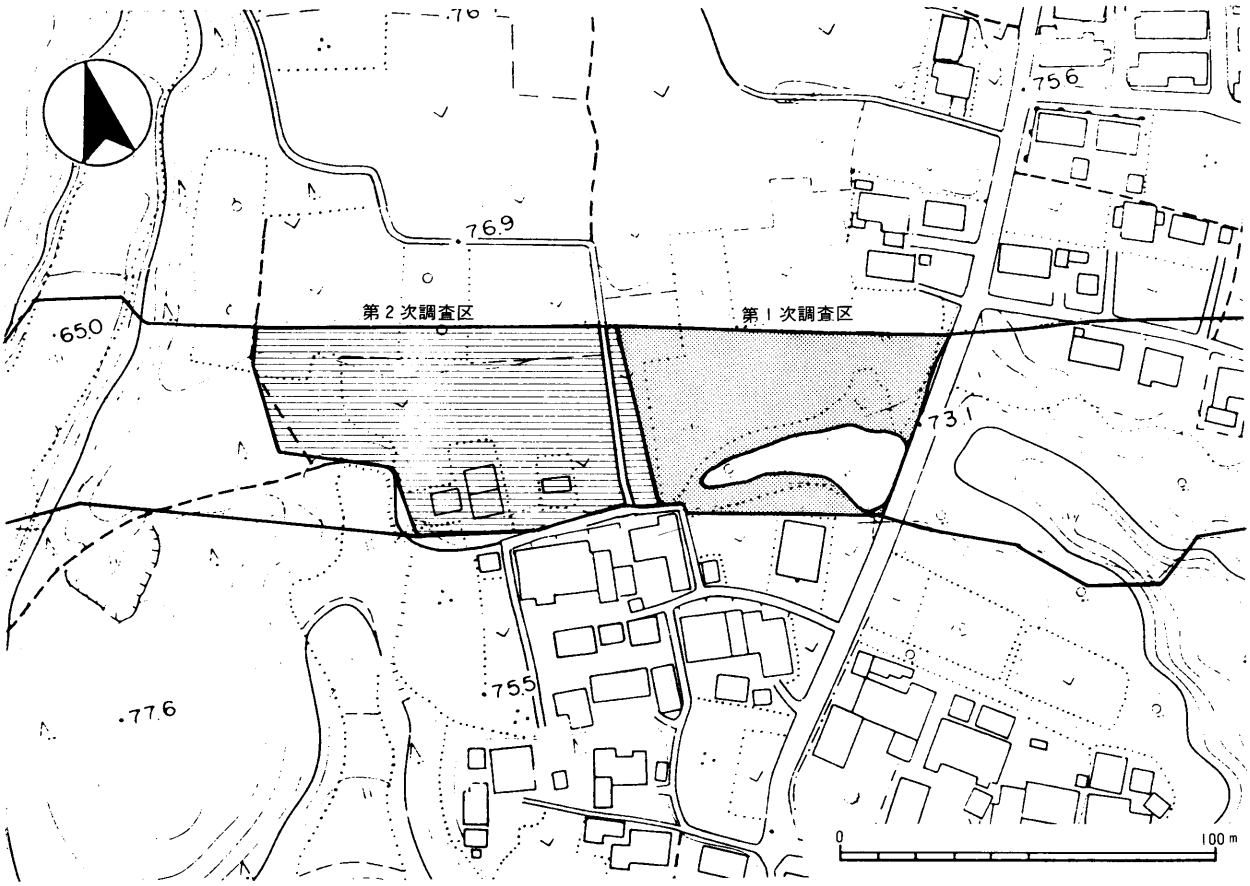
平成２年度
（現地調査）
社会教育課主事　亀　山　隆
調　査　員　森　崇　史
調査補助員　笠井賢二（奈良大学生）
草川貴紀（皇学館大学生）
小林礼二（早稲田大学生）
（室内整理）
調査補助員　明石秋矩　山尾静子
伊藤教子　坂みゆき

平成３年度
（室内整理）
社会教育課主事　亀　山　隆
調　査　員　山口昌直
調査補助員　笠井賢二（奈良大学生）
草川貴紀（皇学館大学生）
小林礼二（早稲田大学生）
明石秋矩　山尾静子
伊藤教子　坂みゆき
佐藤慎哉

４，調査日誌抄

平成３年
２月２日（金）晴
第１次調査開始。調査区域伐採。
２月５日（月）晴
表土機械掘削。基準杭設置。
２月８日（木）晴
発掘区域の内、谷の北側をＡ区、南側をＢ区とする。
２月16日（金）晴
Ｂ区の表土・包含層除去終了。
３月５日（月）晴
Ａ区の東端より遺構検出開始。幅員４ｍの道路を挟んで東側は大藪遺跡。
３月９日（金）晴
Ａ区東端から、竪穴住居を２棟検出。いずれも市道に切られている。
３月13日（火）晴
掘立柱建物検出。井戸１、２の遺物取り上げ。
３月20日（火）
第１次調査終了。全体写真、個々の遺構写真は第２次調査時に一括して行うこととする。
４月26日（木）曇
第２次調査開始。調査区域の伐採。
５月７日（月）曇のち雨
ベルトコンベアー設置後、掘削開始。
５月17日（木）晴
井戸１の遺物出土状況撮影。
５月23日（水）晴
井戸１の掘削終了。
５月25日（金）晴
ｂ20付近から、常滑甕の破片や河原石が多数出土。中世墓の存在も有り得る。

6月7日（木）晴
　中世墓1の写真撮影及び遺物出土状況実測。
6月12日（火）曇
　C・D区の遺構検出終了。
6月18日（月）晴
　井戸5掘削開始。
6月29日（金）曇
　井戸5掘削完了。井戸底から漆器椀、曲物底、木片、昆虫遺体（タマムシ羽根）、ウリ科種子出土。
7月10日（火）曇のち晴
午前中、亀山西小学校体験発掘。
8月2日（木）晴
C区遺物取り上げ完了。
8月11日（土）から8月20日（月）までお盆休み。
9月5日（水）晴
　掘立柱建物写真撮影開始。
9月13日（木）曇時々晴
　竪穴住居1の写真撮影及び遺物取り上げ。
9月28日（金）曇
　井戸2より「犬」の墨書土器（山茶碗」出土。
10月24日（水）晴
　空中写真測量
10月29日（月）晴
　現地調査作業終了
12月1日（土）
　現地説明会。
12月1日（土）から12月14日（金）まで「亀山バイパスと文化財展」開催。（主催：建設省中部地方建設局・三重県埋蔵文化財センター・亀山市教育委員会、共催：社団法人中部建設協会）
12月3日（月）
　全現地調査終了。



第2図　遺跡地形図（1：2,000）

II　位置と周辺の歴史的環境

糀屋垣内遺跡の所在する椋川左岸は、開折谷が発達し、標高70m前後の台地に谷入り組んだ地形を呈している。これらの谷は、いずれも涌水の侵食により形成されたもので、これらの谷を利用して水田が開かれ、台地上は畑と集落が所在している。

この周辺を含め、椋川流域は、チャート・砂岩礫と花崗岩風化土を主体とした、新生代第四紀高位段丘堆積層から形成されている。また、これらの上流域にあたる亀山市西部は亀山層と呼ばれる、新生代第三紀の地層が広がっており、この層内より、ステゴドンエレファトイデス（シンシュウゾウ）の切歯、下顎化石が発見されている。

糀屋垣内遺跡の所在する羽若町が文献上に登場するのは、吾妻鏡文治３年（1187）４月の条で、

「廿九日庚子。三月公卿勅使駅家雑事。伊勢国地頭後家人等多以対捍之間。召在庁等注進状被下之。仍今日二品覧彼目録。仰不法之輩可被誡向後懈緩之由。及厳密御沙汰云々。件目録云。」

とあり、この目録のうち駅家雑事に勤仕していない荘園として、「葉若村」の名が見え、この時は、後白河院の領となっている。「葉若村」が後白河院領になったのは、保元元年（1156）保元の乱により没官された、葉若、井後（現在の亀山市井尻町付近）、安楽（現在の亀山市安坂山町付近）などの平忠貞領が、後高倉院領となったものと思われる。

この後、後白河院を経て後鳥羽院に継承され、承久３年（1221）に承久の乱により幕府に没収された。

しかし、吾妻鏡承久３年８月７日条に、

「七日戊申。世上属無為。是符号二品禅尼夢想。仍奉寄所於二所太神宮。所謂内宮御祈。御院領伊勢国安楽村。井後村。外宮御分。同国領葉若西園両村也。（以下略）」

とあり、これらの所領は北条政子により、安楽、井後が伊勢神宮内宮へ、葉若が外宮へ寄進されている。少なくとも、この時期までに荘園としての葉若荘が存在していたことが知られるが、以後の動向は、井後、安楽と同時に見られることもあって、当初はこれらの荘園と同一の領主であった可能性もある。

外宮寄進後は、御厨として度々その名を見ることが出来る。14世紀中頃に成立した『神鳳抄』には、鈴鹿郡内の御厨として、

「内時御神領内　葉若御厨　二斗五升　九月」

と記されている。この後、一旦外宮の所有から離れたものと思われ、応永24年（1417）に将軍足利義持から返還されている。

享徳３年（1454）10月20日の氏経雑掌光貞申状に、関安芸入道（盛雅）の預所となって以来、安楽、井後、葉若御厨からの神税が横領されていたが、この度関盛元がこの領を回復したので、以前のように神税が徴収されるように庁宣の発給を申請している。

この背景には、正長元年（1428）７月、皇位継承にかかる対立から、小倉宮が伊勢国司北畠満雅とともに挙兵に、関氏もこれに呼応して幕府軍と戦ったが、翌年の３月に山下の戦い（現在の亀山市山下町付近：昭和62年・平成元年の発掘調査により城館跡と思われる遺構を確認している。）で敗れ、すべての所領を没収されたことによるものである。その後、長野氏の支配地となり、長野氏若しくは守護代の被官江戸氏による押領もあったが、関弥次郎（盛元）に返還されている。この点からも、14世紀には、葉若が関氏の勢力下にあったこととが伺える。

これより、江戸初頭までは葉若に関して記載の見られる文書は無いが、関氏の与力として葉若氏の名が登場する。寛永頃に成立した、『勢州軍記』上巻に、元亀４年（1573）春に、関盛信が織田信長によって近江日野へ追放されたとき、主な与力衆が牢人もしくは織田（神戸）信孝麾下に入って行く中で、葉若九郎左衛門のみは関盛信と共に日野へ赴き、身の回りの世話をしたことが記されている。また、『勢州軍記』とほぼ同時期に編纂された、『亀山録』には、天正11年（1583）に起きた関氏家督争いの際に、関氏の重臣として葉若九郎左衛門の名がみえる。

この他に、鈴鹿郡関町瑞光寺文書に『関長門守様御家中侍并惣知行高』には、葉若彦太夫（30石）、葉若八兵衛（40石）、葉若喜蔵（150石）、葉若勘左衛門（150石）、の名が見え、この文書が成立したと思われる慶長15年（1610）頃には、関一政家中としての葉若氏が存在していたことは間違いない。もっとも、これら葉若氏が「葉若村」の出自であるか否かを知る由も無いが、関氏が国人から近世大名へ変化したことを考えると、関氏家中は本来在地性の強いものであると考える方が妥当と思われる。

なお、亀山の伝説の１つに、「羽若の夜泣松」の話があり、この松の幹皮をとって火を灯して子供に見せればたちまち夜泣きが止むと言う。この夜泣松があるのが葉若九郎左衛門の屋敷跡とされている。

近世に入ると、「葉若」の標記も「羽若」へと変わっている。関一政（３万石）、松平忠明（５万石）が亀山城主の時は亀山領であったが、元和元年（1615）からは津領となった。この後、寛永13年（1636）本多氏が亀山城主（５万石）となってからは、再度亀山領に戻り、明治を迎えることとなる。

また、延享元年（1744）以後に亀山城主となった石川氏（６万石）時代の末期には、糀屋垣内遺跡から北側の字松本にかけての一帯（羽若野）が、亀山藩兵の軍事訓練場として利用され、これらに関する絵図も残されている。

元禄15年（1702）に編集された、亀山藩大庄屋記録である『九九五集巻六中　古新高・所務部』に記された、江戸前半の羽若村は以下のとおりである。

「高四百三拾壱石弐斗八升　　鈴鹿郡
一高五百弐拾壱石六升亀山制札場ヘ八町羽若村
　　同所出馬拾疋
此訳　永荒高八石九斗四升五合　此反七反一畝三歩
内
　七石二升四合田方、壱石九斗弐升一合畑方
高三百六拾七石六斗五升五合
　田弐拾五町三反拾五歩　寛永拾四丁丑検地帳面
内拾五町三反九歩　ひくち大藪谷より大野迄
　八町六反五畝九歩　かうたより松本迄
　壱町三反四畝廿七歩　村より北ふか田谷
高百四拾四石四斗五升七合
　畑拾弐町六反八畝廿壱歩　寛永拾四右断
但上畑九畝拾三歩　此高壱石壱斗弐升八合　庄屋屋敷
　内
高九石九斗六升八合　当御代ニ開発　新畑
代物　拾三貫九百五文　　茶桑銭
同八百弐文　内内竹四束但壱束ニ付六十二文
　　小柄竹六束壱束ニ付八十七文　竹銭
社四ケ所　八幡　宮地長壱町三拾間　横五十間
（朱書）「高五石関殿御証文于今有」
　　「関氏御代々御崇敬也」
　三宅大膳正殿御代ニ東町江勧請也、
　御鎮守三社ノ内也、
八王子　宮地長弐拾間　　横拾六間
神明　宮地長弐拾弐間　横拾八間
富士山　宮地長壱四拾五間　横四拾五間
無社
寺壱ケ所　亀山遍照寺末寺　本尊行基ノ作
天台律宗西光寺　寺地東西拾三間　南北拾四間
（朱書）「東町福泉寺古昔下寺ノ跡、二畝ホト地于今除土地也」
御立山二ケ所　壱ケ所東西拾弐町弐拾間　南北四町
　　内　羽若村・亀田村両郷立合、
　　壱ケ所東西拾四町七間　南北四町四拾間
村之内　東西壱町三拾間　南北弐町拾六間
家数　三拾弐間
人数　百八拾壱人　内九拾壱人男九拾人女
牛馬数廿疋　内九疋馬　拾壱疋牛
米三百拾五石三升壱合亥ヨリ申迄先御代拾ケ年平均
米弐百八拾七石三斗七合九勺酉ヨリ卯マテ当御代拾九年平均
卯米三百弐拾九石六斗七升三合　先御代ノ内高納
丑米三百拾八石三斗壱升壱合　当御代ノ内高納」

ここに見られる、西光寺の本尊阿弥陀如来坐像は、像高41.6cmの寄木造で、内刳に
「應永廿九年（1422）八月廿二日
　作者　同阿弥
　願主　慶嶷」
と墨書されている。また、堂内には本尊と同時期と推定される聖観音立像も安置されている。

なお、糀屋垣内遺跡の周辺遺跡については、国道１号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書において、詳細が記されているので、本書では割愛したい。

第３図　古絵図の羽若村（部分）

III　遺　　構

全般に遺構密度が高く重複の度合いが著しい上に、包含層の厚さが少ないため（平均で50㎝程度）、遺物の混入が多く、厳密な判断が極めて困難であった。従って、遺構の時期決定は、出土遺物と他の遺構との位置や方位から相対的に判断している。

1，奈良時代の遺構

竪穴住居

ＳＨ１　調査区域の東端で検出されたため、一部を市道によって切られている。現状では東西4.7m、南北4.7mの方形を呈し、方位はＮ27°Ｅである。周囲に深さ20㎝程度の溝を巡らす。溝の内部には焼土と炭化物が充塡していたが、床面には顕著な焼土面は確認されなかった。また明確に検出できなかったが、下層にもう１棟ある可能性がある。床面直上より土師器甕（155）、土師器甑（156）、土師器壺（154）、須恵器坏蓋（175）が出土している。

ＳＨ２　ＳＨ１の南側に位置し、市道と開墾による削平により北西端の一部を検出したに留まる。現状では東西1.6m、南北2.1mの方形を呈し、方位はＮ27°Ｅである。検出面から約８㎝の深さである。

2，平安時代末期の遺構

掘立柱建物

少なくとも、20棟を確認している。詳細は表１のとおりであるが、全般に２種類に大別できる。

まず、大型で総柱建物と、やや小型で平面形が正方形を呈するものである。両者とも、方位はほぼ真北を指している。前者は、調査区域の東側に集中し、隣接する大藪遺跡Ａ区から検出された掘立柱建物の様相と類似する。また、特にＳＢ29は、東西６間、南北５間の総柱建物で、北、西、東の３方をＳＤ15・21・32とＳＡ１・２で取り囲み、谷に臨んだ南面に空間を持つ。柱穴の中には根石を有するものも見られる。また、ＳＢ29と比べてやや規模は落ちるものの、同様に溝などで区画割をしたＳＢ25と隣接する。その規模形状とも、糀屋垣内・大藪遺跡から検出された、他の建物とは際立った存在となっており、集落内における中核的部分であった可能性が高い。

後者は、調査区域の中央部北側に集中し、２間×３間程度の規模のものが大多数を占める。中には、ＳＢ46のように、倉庫と思われる建物も見られ、これらの一群が、先述した総柱建物群の倉庫であった可能性が考えられる。

これらの中核的建物と隣接して、居住色の強い建物が見られる。ＳＢ35・70のように総柱ではなく、部屋や梁構造を有するものである。いずれも、ＳＢ29などの西側に位置し、倉庫群と区域を同じにしている。

溝

建物に付随するものを除けば、出土遺物からＳＤ26・27などが挙げられる。いずれも他の遺構との切り合いが著しく、厳密に言えば確証できるものではない。いずれも、調査区域北側から南側の谷に向かって、微地形の凹凸を利用して設けられたものである。

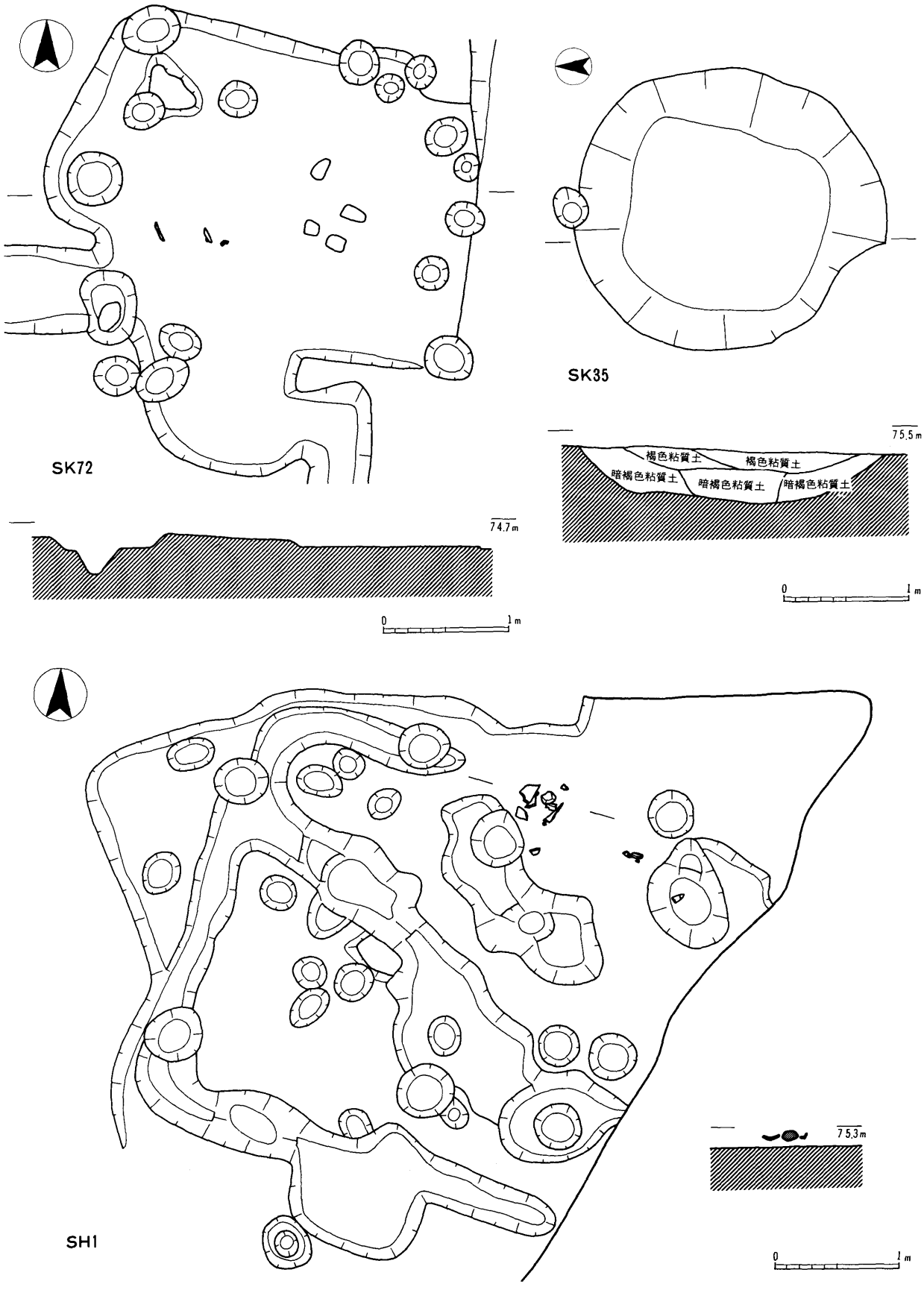
したがって、これらの溝と現在の地表面に設けられた、水路や畑の境界などとも重複している。このために、南北方向の溝は水利目的の度合いが強く、東西方向の溝は境界設定を主目的としたものと考えられる。

3，鎌倉時代前半の遺構

掘立柱建物

調査地域のほぼ全域から17棟が確認されているが、平安時代末期と比較して重複が著しく、集落の範囲は広がるものの、それぞれの建物の機能が固定化されたことを伺わせる。同時に建物の規模形状も多様化の兆候を見せ始めている。ＳＢ７は東西７間、南北４間の総柱建物で、これに重複する形でＳＢ５（１間×３間）、ＳＢ11（４間×４間）、ＳＢ28（５間×３間）が存在している。この建物群は、方位を同一にとり、ＳＤ117・62によって区画され、３棟が並列している。主屋であるＳＢ11とその対屋であるＳＢ28、これらの脇屋がＳＢ５と考えられる。特にＳＢ５は小型の建物で、ＳＤ117をまたぐ形でＳＢ11の東正面に位置しており、ＳＤ117を利用した「厠」の可能性もありうる。また、ＳＢ７と・ＳＢ５・11・28の建物群は、一時期前ＳＢ29とほぼ同じ位置を占めており、12世紀後半から13世紀前半にかけては継続して、この区画が集落における中核的位置を占めていたものと思われる。

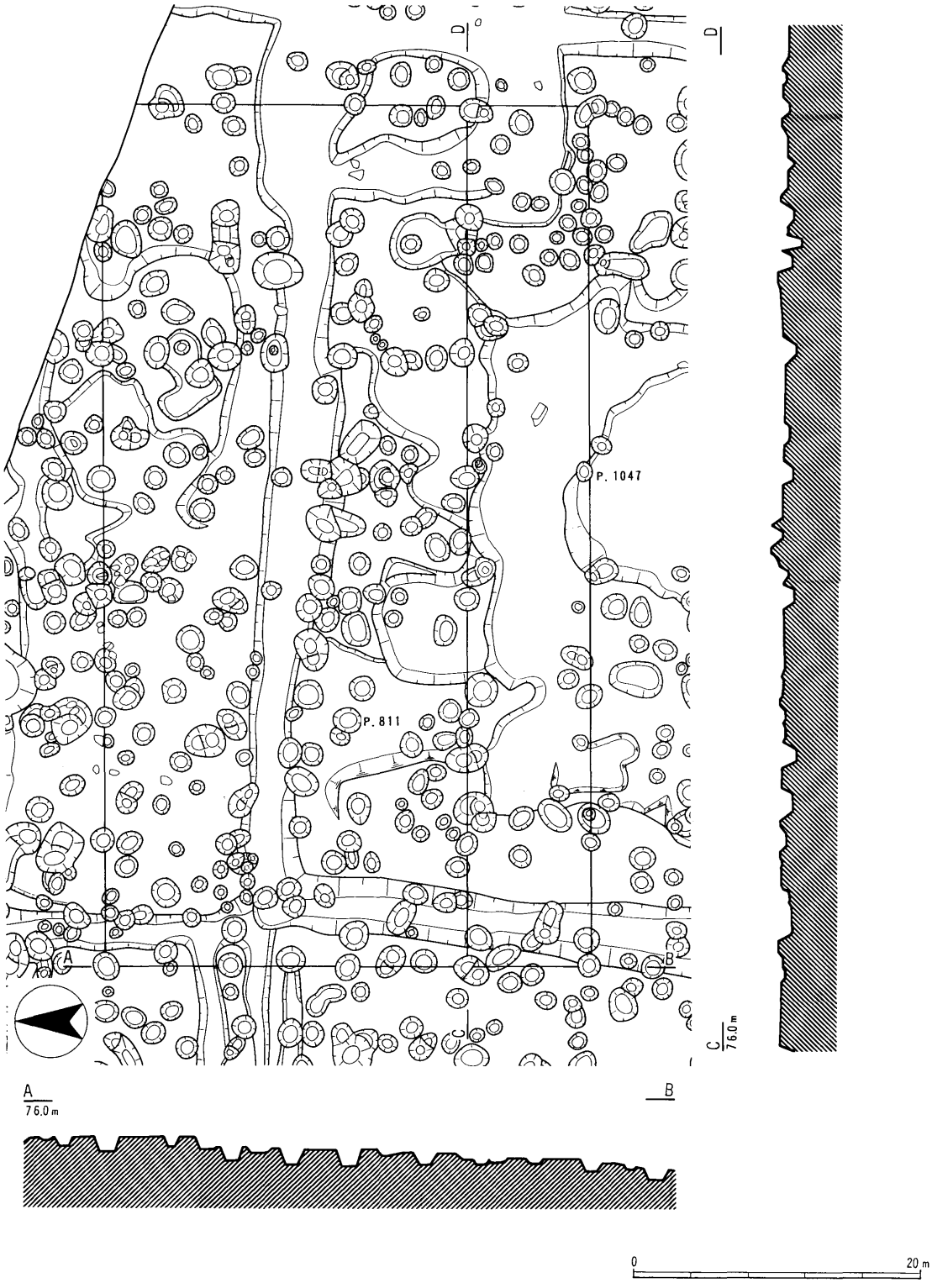
第4図　糀屋垣内遺跡遺構平面図



第5図　ＳＫ35・72，ＳＨ１実測図

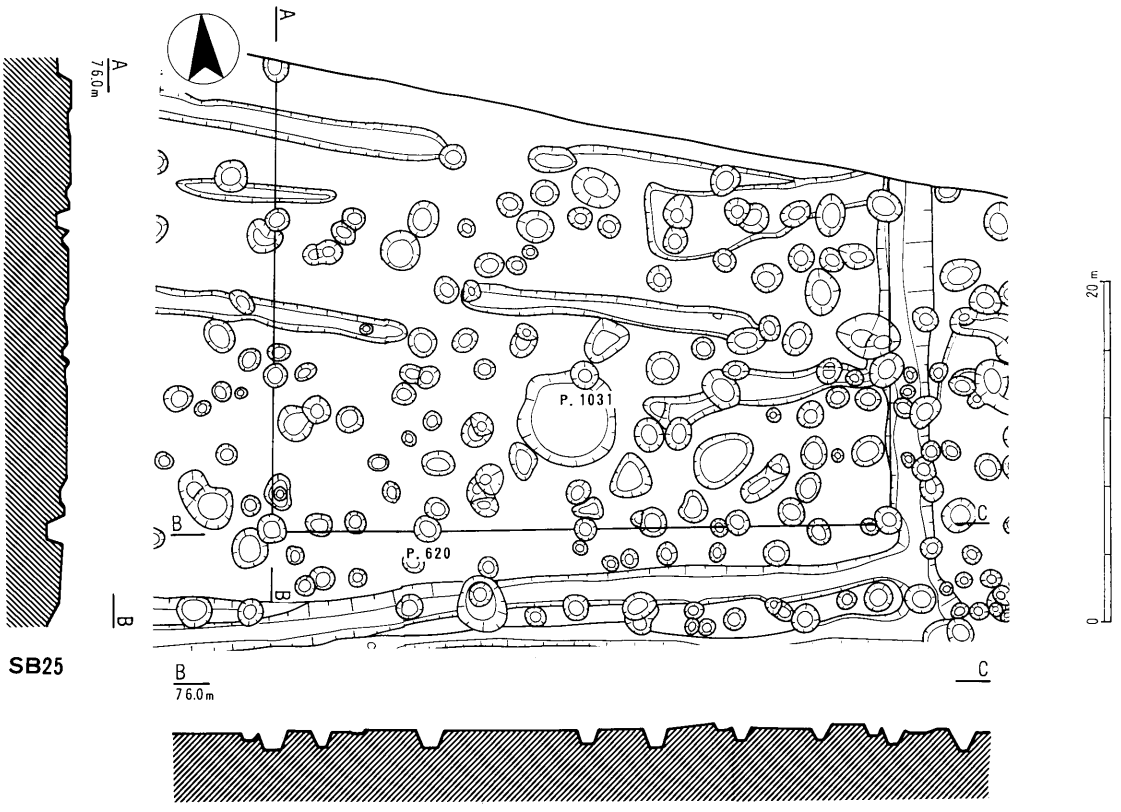
P. 960
P. 650
P. 596
P. 1841
P. 563
P. 622
P. 588
P. 393
P. 3795
P. 621
P. 1014
A
B
C
76.0 m
0
20 m

第6図　ＳＢ29実測図

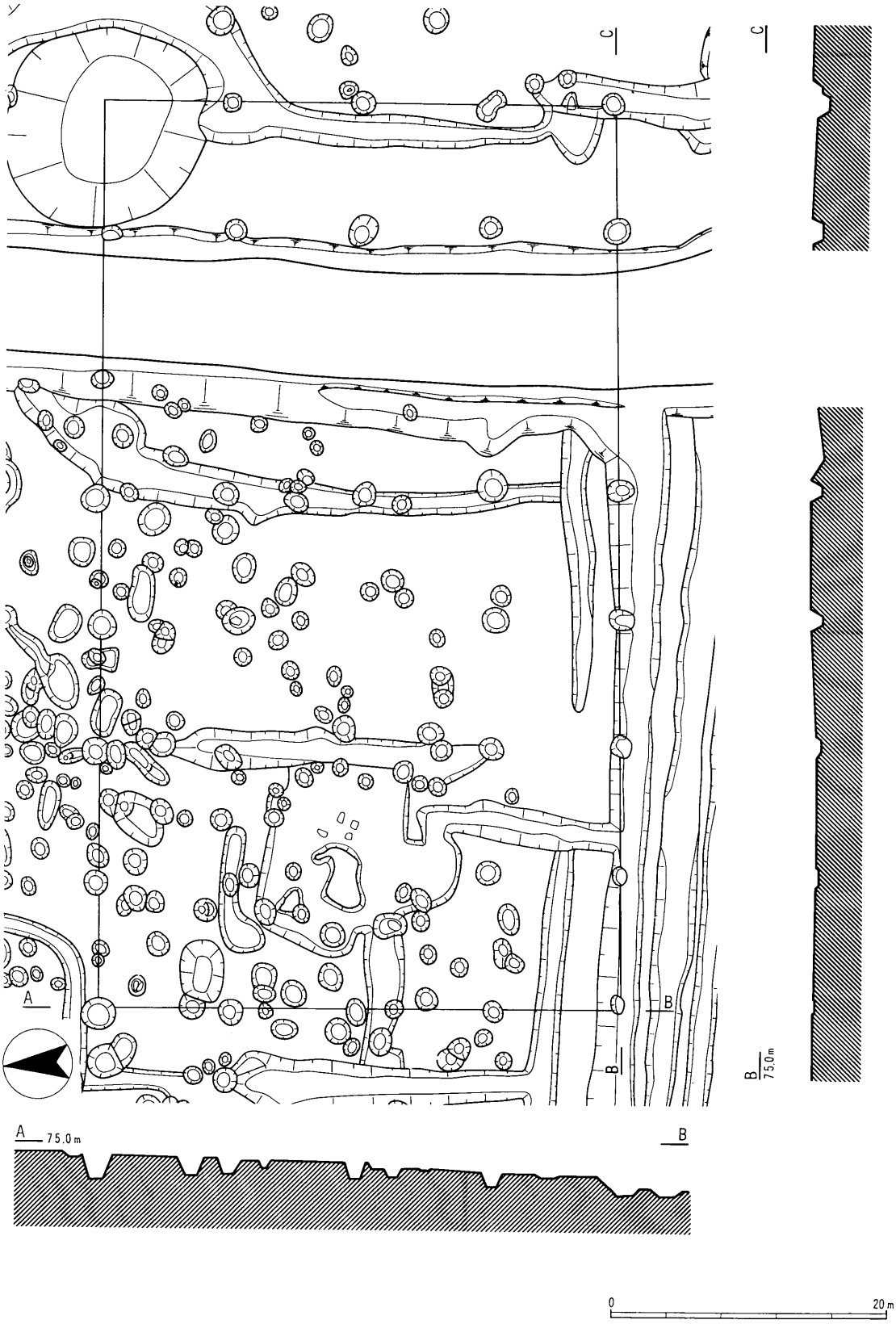


第7図　ＳＢ７実測図

第８図　ＳＢ５・35実測図



第9図　ＳＢ16・25実測図



第10図　ＳＢ40実測図

また、これらの建物群に若干時期が下がって、より居住色の強い建物群が見られる。これらの中でＳＢ40は東西７間南北４間の建物と推定され、部屋、梁構造を有する。また、ＳＢ16は総柱建物であるが、建物の東南隅に土坑（ＳＫ70）を持つ。この東南隅土坑について、東方向へ排水溝がみられることなどもあり、現時点では厩的な性格を持つものと考えているが、この建物の場合、この土坑の床面が焼けており、埋土内にも炭化物が混入していたこともあり、厩とは違う性格の土坑であることを否定できない。ただ、この建物自体が焼失家屋である可能性も考えられる。なお、これらの建物はいずれも土坑墓（ＳＸ１）と同時期のものである。

土坑墓

ＳＸ１　140cm×170cmのやや崩れた方形を検出面より10cm程掘り、その中央に130cm×80cm、深さ20cmの主体部を作る。方位はＮ－17°－Ｅである。頭位に山茶碗（180）、山皿（177・178・179・192）を置き、胸位には鉄製小刀（193）が切先を頭に向けて置かれている。

ＳＸ２　165cm×175cm、深さ50cmの方形を呈する。方位は、Ｎ－86°－Ｗで、頭位と思われる西側に人頭大の石が落ち込んでいる。東側には鉢（194）が壁に張り付く形で置かれている。

井戸

ＳＥ１　直径120cm、検出面からの深さ90cmの素掘り井戸である。壁面はほぼ垂直で底は平坦である。湧水量が少なく、水溜である可能性も捨て切れない。床面直上から、山茶碗（240・241・242・254）、山皿（255・256・257・258）、土師器皿（270・271・272・275）白磁碗（276）が出土している。

ＳＥ３　短径170cm、長径280cmの楕円形を呈し、深さ110cmのすり鉢形素掘り井戸である。東側の法面に人頭大の石が流れ込んでおり、石の周囲と底から、山茶碗（250・251・267．269・283）、山皿（281・282）、土師器皿（350）、伊勢型鍋（345）が出土している。丁度谷の最深部に位置しており、比較的浅い位置からの湧水が見られるが、その量は少なく、ＳＤ13・14・15からの流入水を溜めておくことを目的としたものと思われる。

道路遺構

ＳＤ25・47・113・116・119・121　これらの溝は、調査区域の北側から谷に向けて伸び、谷の手前でほぼ直角に西に折れ、谷の北辺を西に向かって伸びており、２本の溝が一定間隔に幅を持って並列している。このことから、これらの溝は、道路の側溝であった可能性が高い。このうち南北方向に伸びるＳＤ47・113・116は、ほぼ真北に向けて伸びているのに対し、ＳＤ24・119・121は自然地形である谷にそって設けられている。単に水利施設しての溝であるならば、谷に向かって切ればよいはずであるので、この溝は一定の区画を設定することを目的としたものと考えられる。状況からの判断ではあるが、南北に伸びるＳＤ47・116・113によって想定される「道」は、条里制などの人為的に設定された大きな区画から集落内に派生した道と考えられ、自然地形にそったＳＤ119・25・121は、さらに分岐した最末端の道と考えられる。

４，鎌倉時代後半の遺構

掘立柱建物

13棟を確認しているが、位置によって３つの群に分類される。第１群は、ＳＢ10・17・26・30から構成され、この群によって成立する空間内にＳＥ２が存在する。ただ、ＳＢ17のみは他の３棟よりも先行する。また、ＳＢ10はこの一群の中核を占めるものと思われるが、集落内において特別な位置を持つものではないと思われる。

第２群は、調査区域の西側に位置し、比較的大型の建物であるＳＢ61・65・72・80から構成される。中心となるＳＢ65は、桁行５間梁行４間で、１間×２間の張り出し部を３カ所持つ。

第２群の廃絶後に成立した第３群は、ＳＢ37・38・52・57・60から構成され、主屋と思われる総柱建物のＳＢ37とＳＢ38・51・57がＳＥ４を囲む形で１つの区画を設定している。ここで注目される点として、ＳＢ52の大部分の面積を占める、ＳＫ71とそこから派生してＳＢ57の中を湾曲しながら、谷へ抜ける溝（ＳＤ68）へ連結するＳＤ76の存在である。ＳＫ71は床面に焼土が見られ、埋土には炭化物や焼土ブロックが多量に混入していた。また、ＳＤ76の埋土にも炭化物が多量に混入しており、これらの遺構が火を使用するものであったことを示している。この南側に位置するＳＫ72も同様に、床面に焼土が見られ、埋土には多量の炭化物が混入し、少量ではあるが鉄滓と思われる酸化鉄も床面に見られた。これらの遺構群の中核を占めるＳＥ４は、特に重要な意味を持っ

ていたものとかんがえられ、主屋と目されるＳＢ37を中心に位置する土坑（ＳＫ37）から派生した溝（ＳＤ67）は、この井戸を迂回している。これらの状況から判断して、これら一連の遺構群は鍛鉄に関係する可能性が高く、集落内における鍛冶工房が存在していたことを伺わせる。

井戸

ＳＥ４　掘立柱建物第２群に付属するもので、直径340cm、検出面からの深さ70cmのすり鉢形を呈する素堀り井戸である。内部に人頭大の石が多数落ち込んでいた。遺物は、山茶碗、山皿、土師器、土師器甕、青磁が出土しているがいずれも細片である。ただ底面上の灰色粘土中より竹篦（第30図）が出土している。遺物から判断する限り、14世紀前半まで存続していたものと思われる。

溝

ＳＤ68　鍛鉄遺構群に付随するもので、排水と区画設定の両方の性格を持っていたものと思われる。遺物は、山茶碗（342・343・344）、山皿（204・205）、青磁碗（234・233）、常滑甕（244・236）の他に瓦片が出土している。

5，室町時代前期の遺構

掘立柱建物

７棟（ＳＢ62・66・68・75・76・78・81）を確認している。ＳＢ75を除いては、先述のＳＢ37・38・52・57・60と存在時期が一時重複するものと思われる。これらの建物群の特徴として、溝（ＳＤ65・70・74・100・128）などによって区画が設定され、その中に１棟もしくは２棟の建物が存在する。特にＳＤ65・74・100によって構成される区画には、ＳＢ62・66・68とこの３棟によって設定された空間に井戸（ＳＥ５）を持っている。この区画は14世紀中頃における集落内における中間層とも農民の住居と思われる。また、この区画の中心となるＳＢ66は、東南隅に土坑（ＳＫ38）がみられ、そこからＳＤ63へ排水溝（ＳＤ123）が派生している。なお、この区画へは、13世紀前半に成立したと思われる谷に沿った「道」からの進入が考えられ、集落内の基本的な構成が極端な変化を遂げていないことがわかる。

ＳＢ75は、若干時期が遅れるものと思われ、方位が少し変化している。ＳＤ74に面した建物で、西と北に柵列（ＳＡ３）を持つ。

井戸

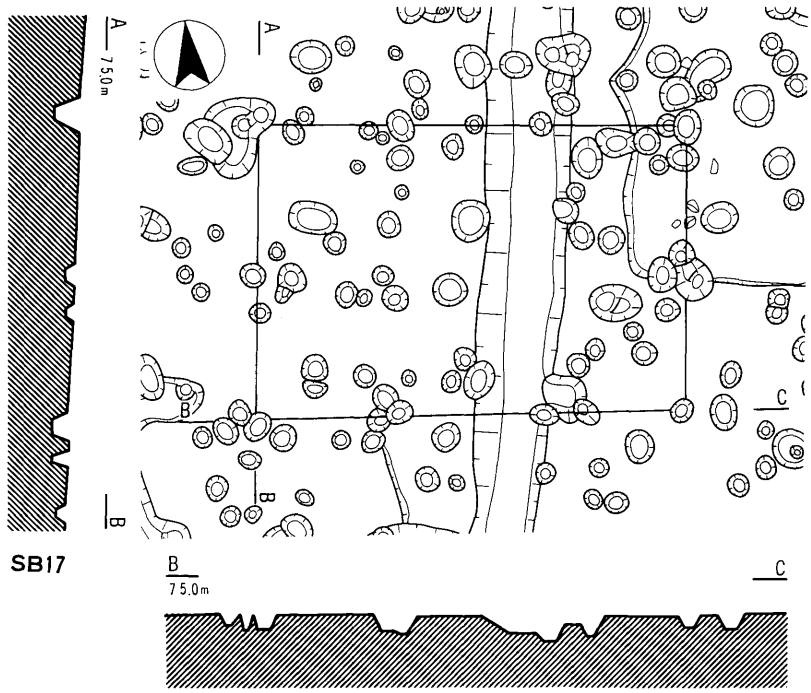
ＳＥ２　やや不定形ながら直径220cm、検出面からの深さ130cmのすり鉢形を呈する素掘り井戸である。埋土内より、山茶碗（243・244・245・246・247・248・249・259・260・261・262・263・264・273・274・277）、土師器皿（278）、土師器坏（279）、伊勢型鍋（265・266・280）が出土している。また底面直上からは木片が数点出土している。ＳＥ２は14世紀前半に廃絶された井戸であると考えられる。

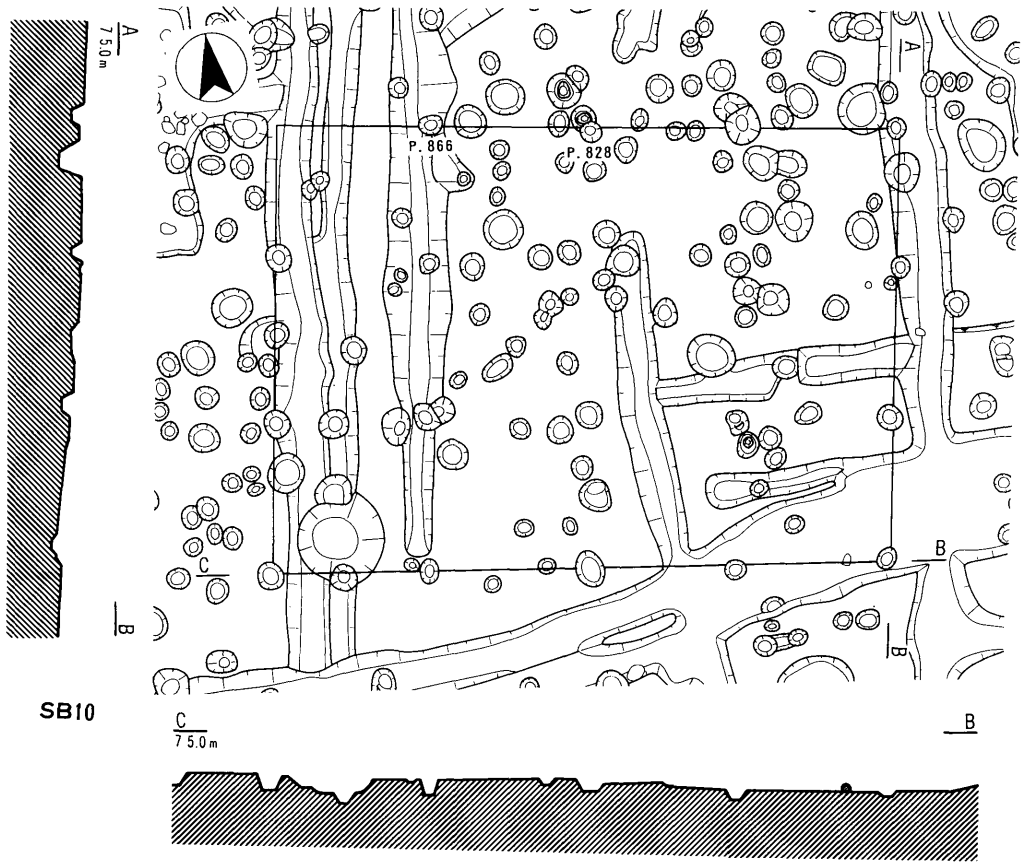
ＳＥ５　溝によって区画された建物群（ＳＢ62・66・68）に伴う井戸で、掘り方上部は直径320cm、井戸本体は直径135cmの素掘り井戸で、検出面からの深さは５ｍにおよぶ。湧水量も多く、調査段階でも常に水が湧出し、涸れることはなかった。検出面から180cm程下がった位置からは、青灰色粘土が充填しており、この層内より、山茶碗（346・348・352・358）、常滑甕（357）、鉄釘（353）、漆器椀（347）、曲物底板（359）、不明木製品（249・360）昆虫遺体（タマムシ羽根）、ウリ科種子、スイセン球根が出土した。

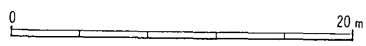
6，室町時代以降の遺構

近世後期から20世紀代までの遺構が検出されているが、先述したとおり主要な溝は微地形を利用して作られているため、12世紀代のものと重複している。また、遺構の大半は耕作に関係するものと思われ、近世後期から調査直前までの景観がほとんど変化していないことを示している。ただ、14世紀代の溝（ＳＤ74）に重複する、近世の溝（ＳＤ75）に連結するＳＫ44は底に丸瓦を十字形に組み合わせており、近世建築物の排水施設と思われる。また、調査区谷を挟んだ南側に所在するＳＫ32は、近世後期から大正期までの遺物が多数混入しており、大正期に掘られた廃棄坑と思われる。

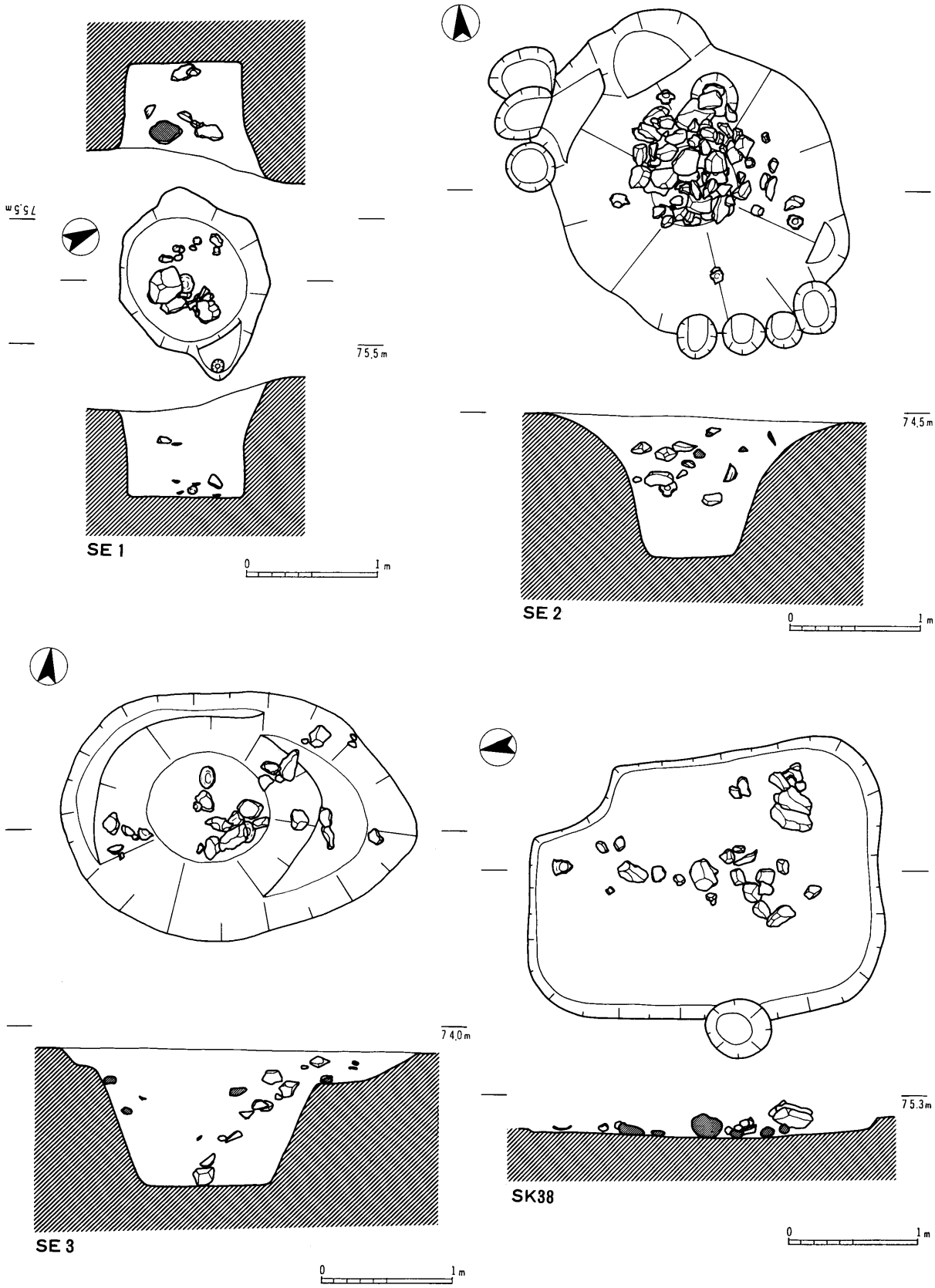
なお、これまでに述べた遺構の外に遺物などの出土により時期が明確になっている遺構が相当数ある。ただ、いずれも性格が全く不明であるか、明らかに前述の遺構に伴うものであるため、図中に示したものもふくめて記述を割愛する。



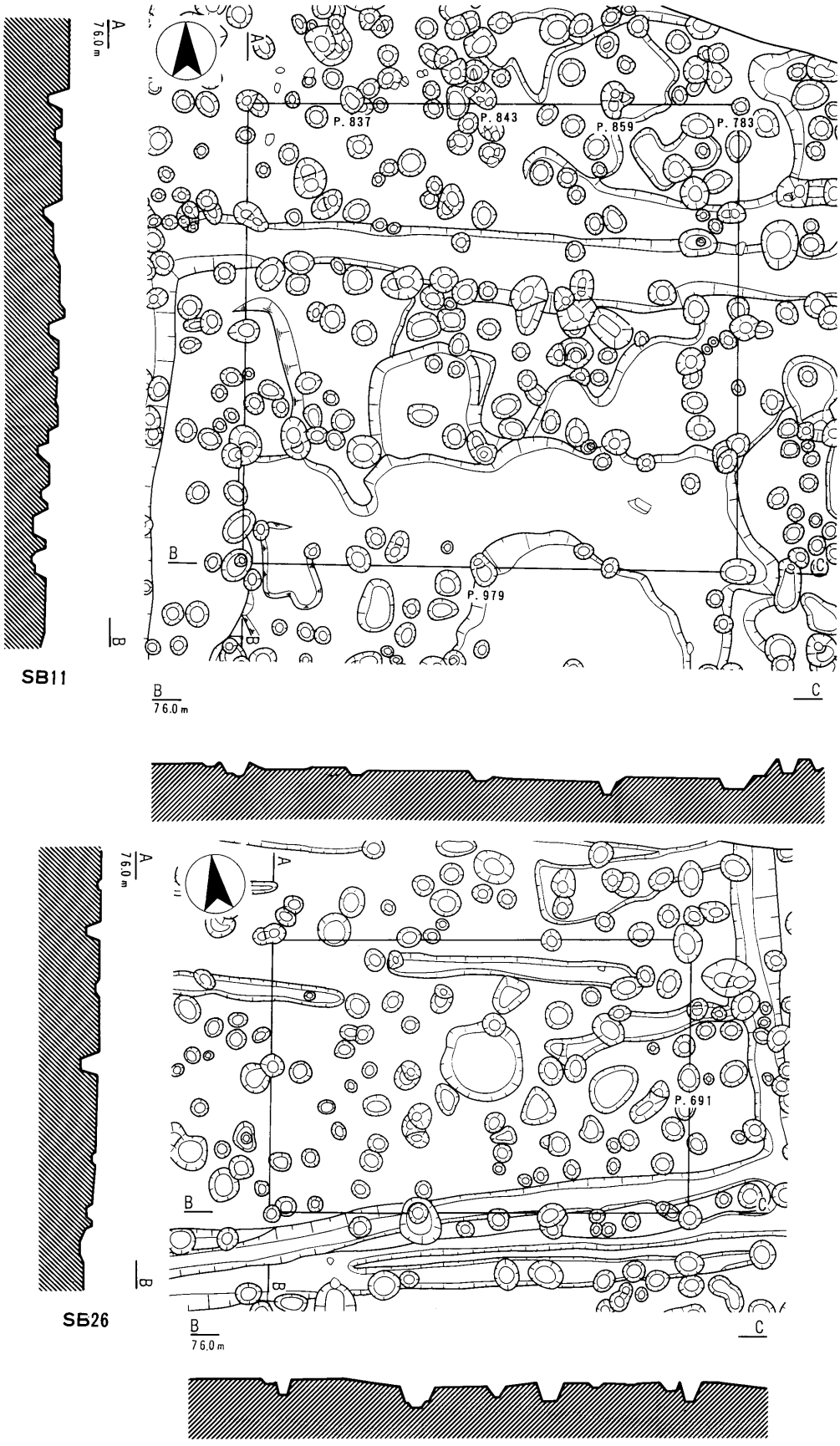




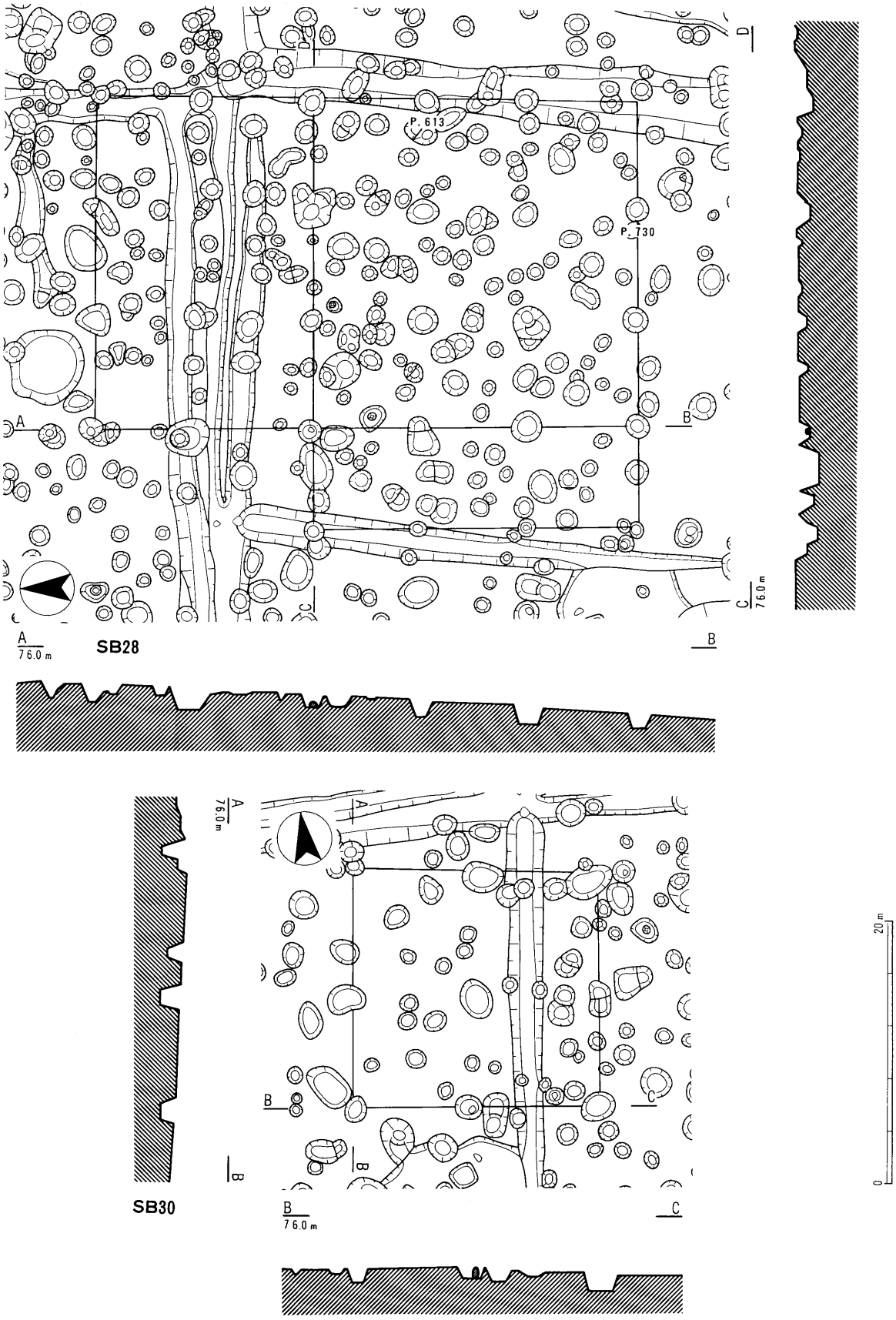
第11図　ＳＢ10・17実測図



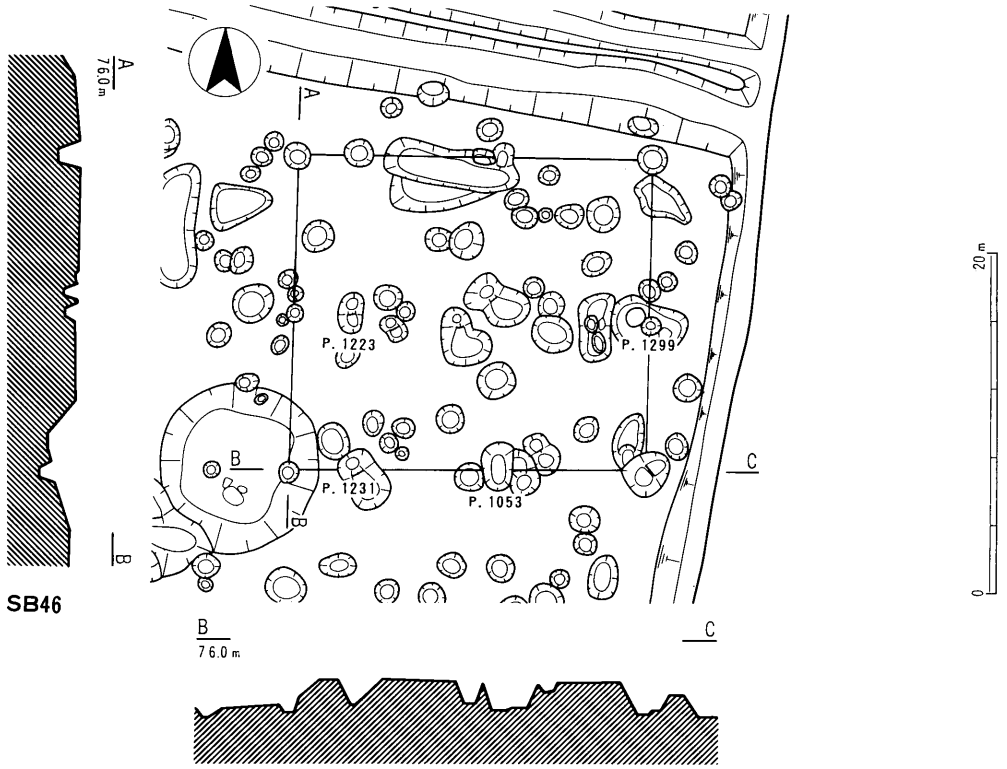
第12図　ＳＥ１・２・３，ＳＫ38実測図

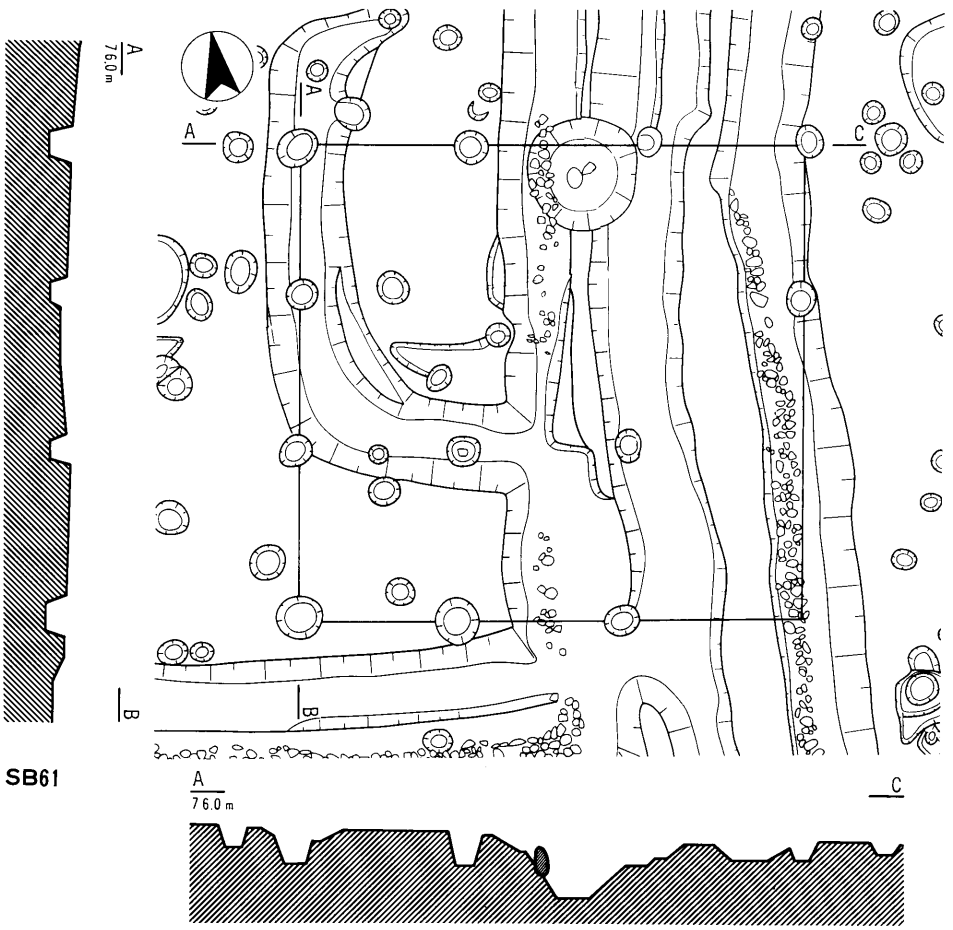


第13図　ＳＢ11・26実測図

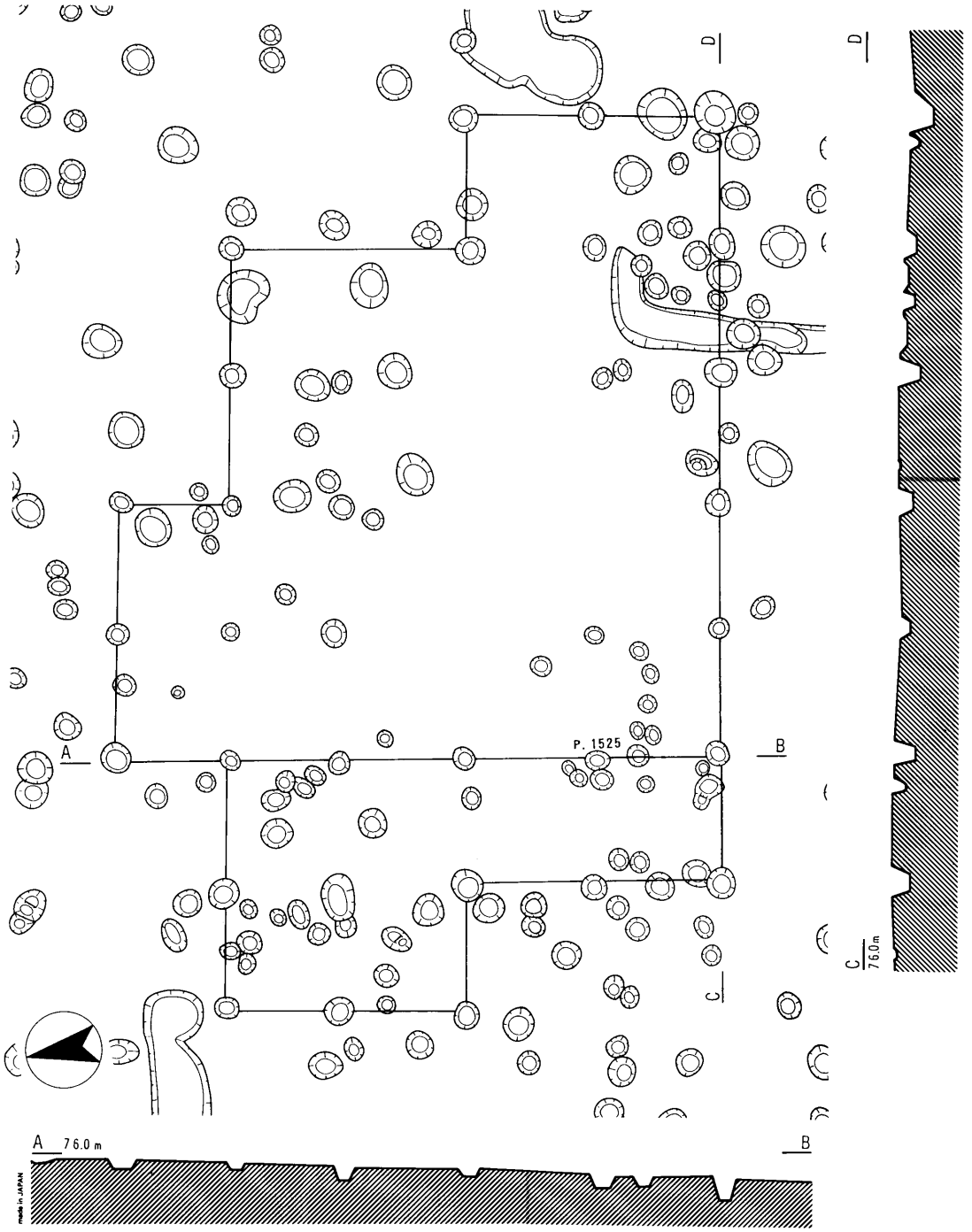


第14図　ＳＢ28・30実測図



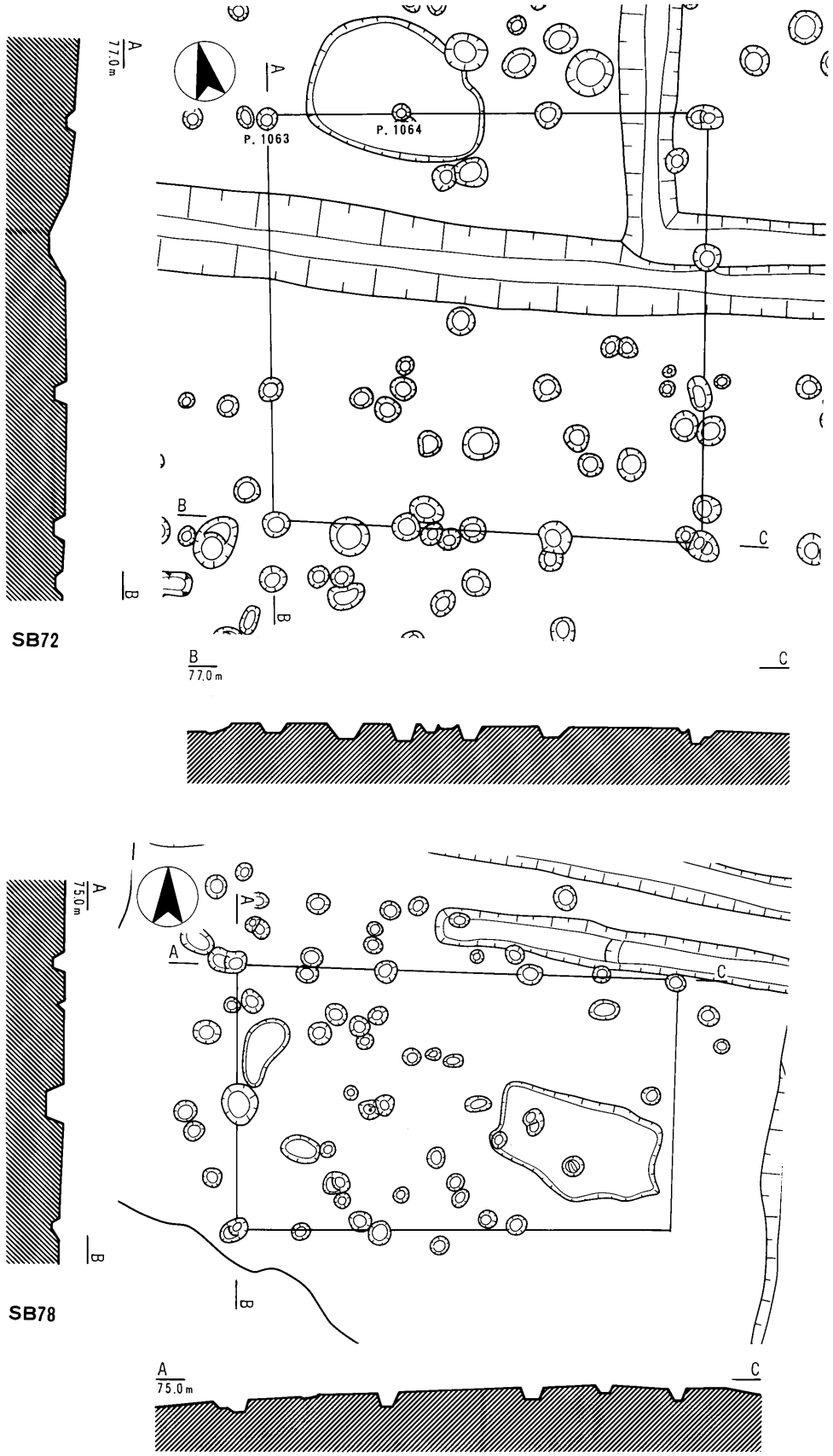


第15図　ＳＢ46・61実測図

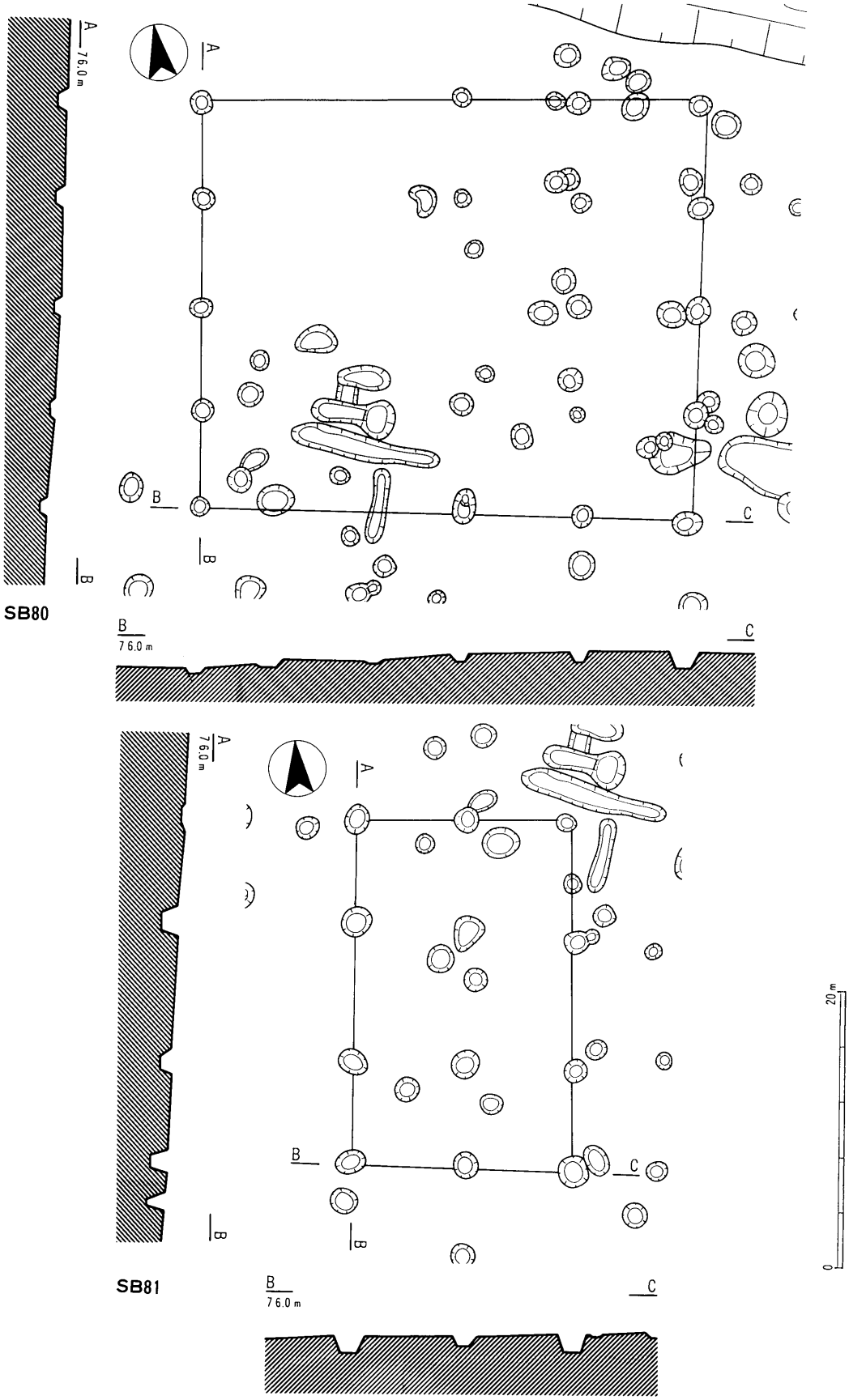


第16図　ＳＢ65実測図

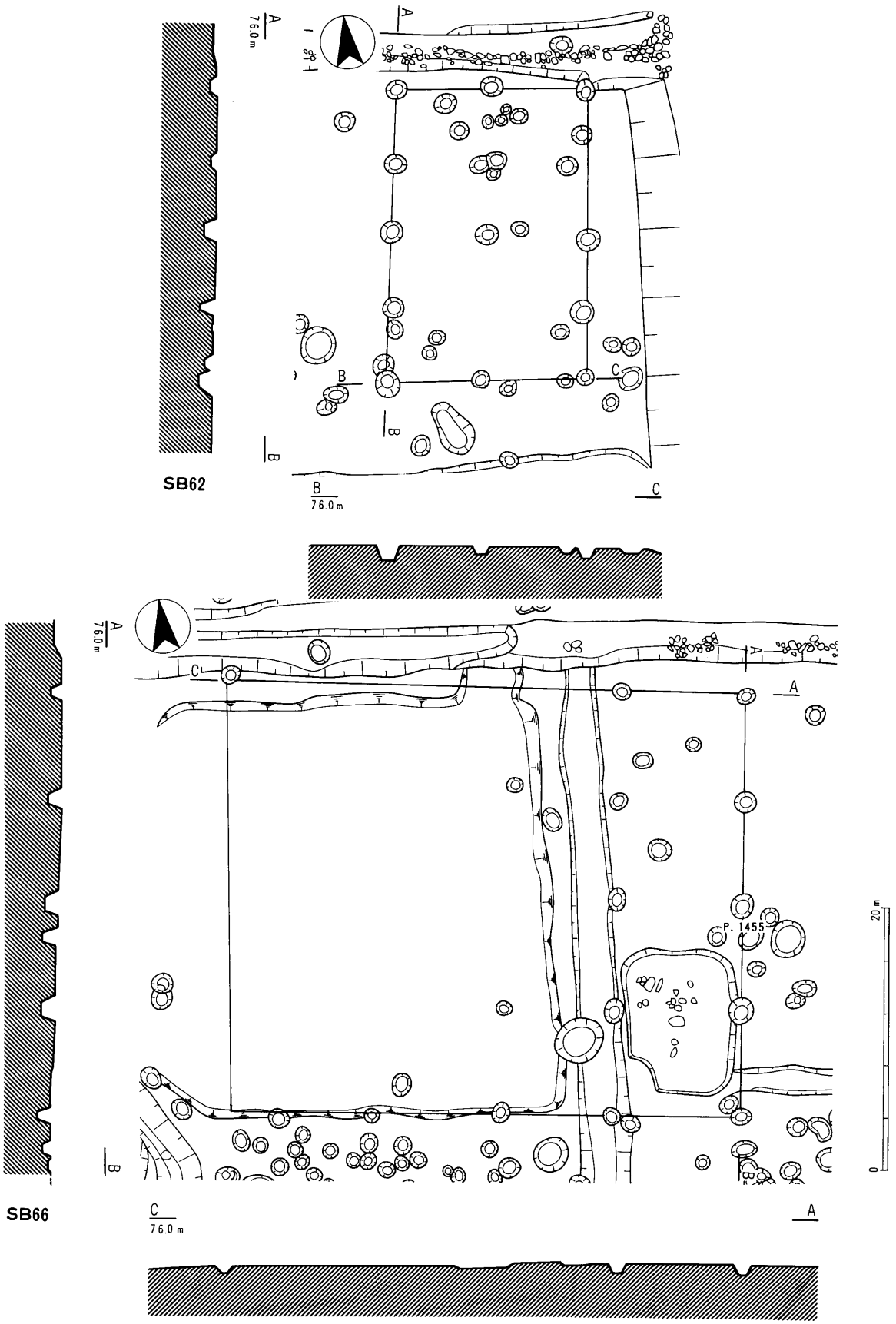
第17図　ＳＢ70・75実測図



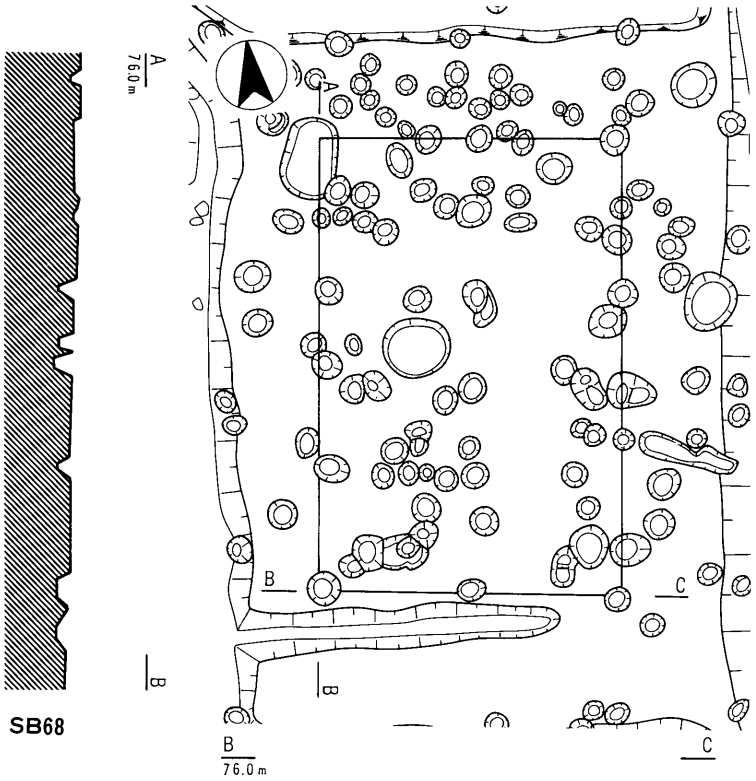
第18図　ＳＢ72・78実測図

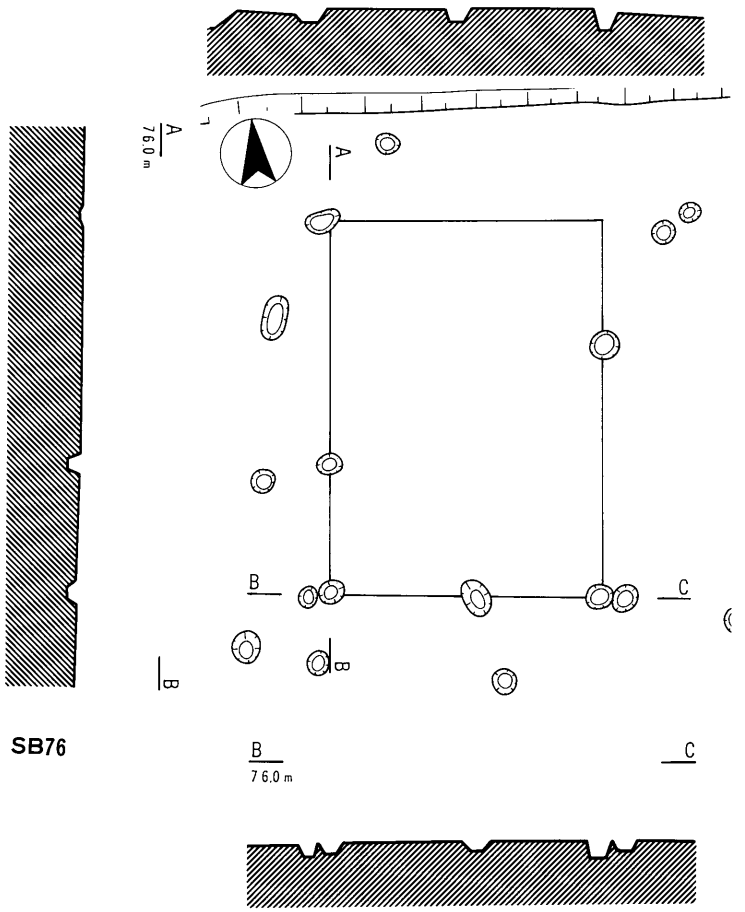


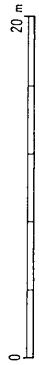
第19図　ＳＢ80・81実測図



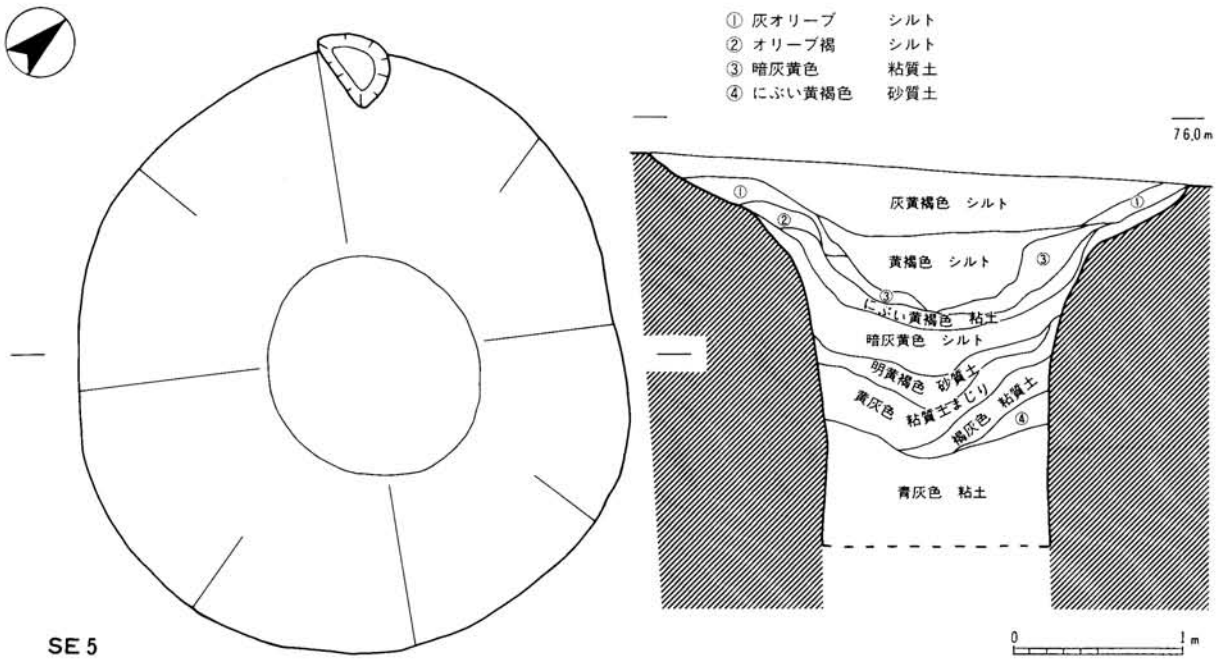
第20図　ＳＢ62・66実測図

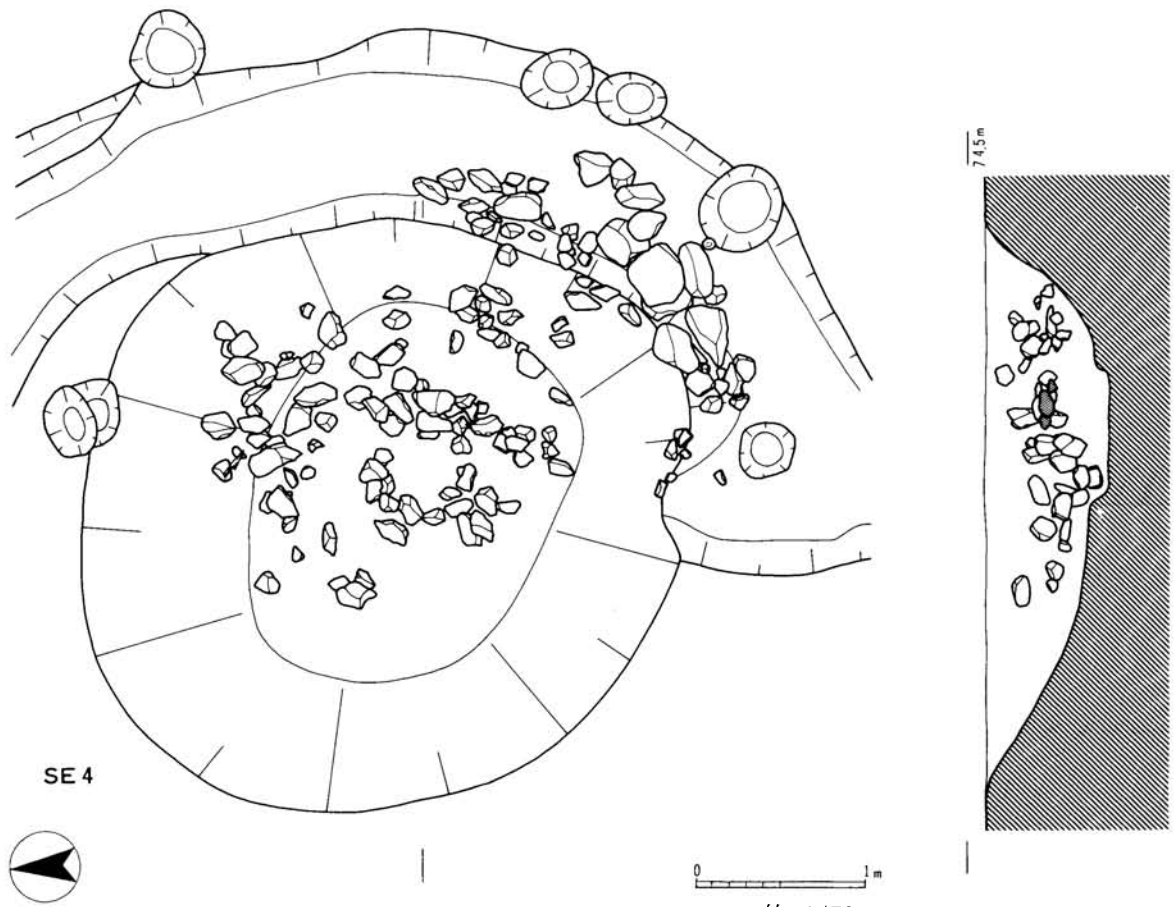






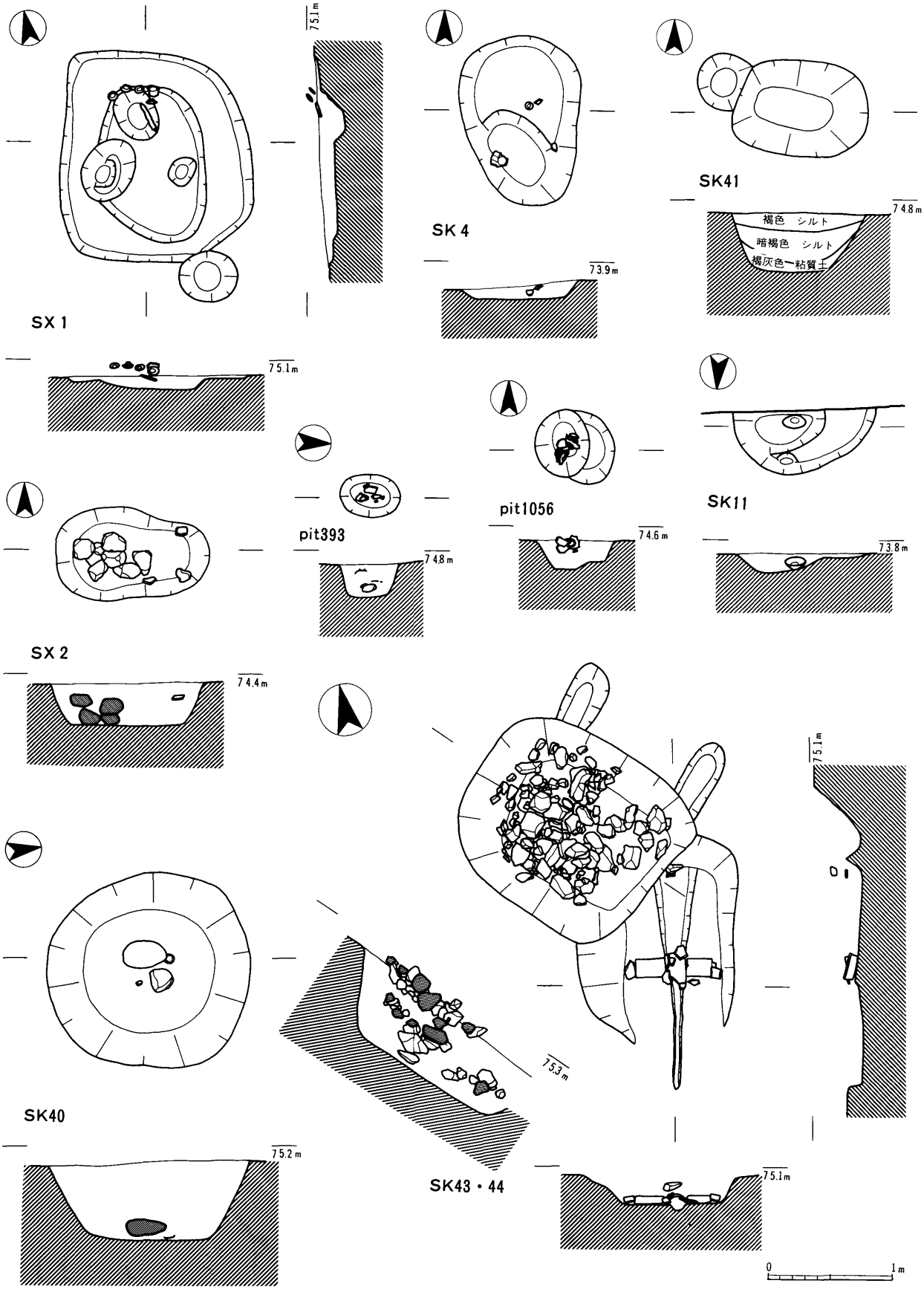
第21図　ＳＢ68・76実測図



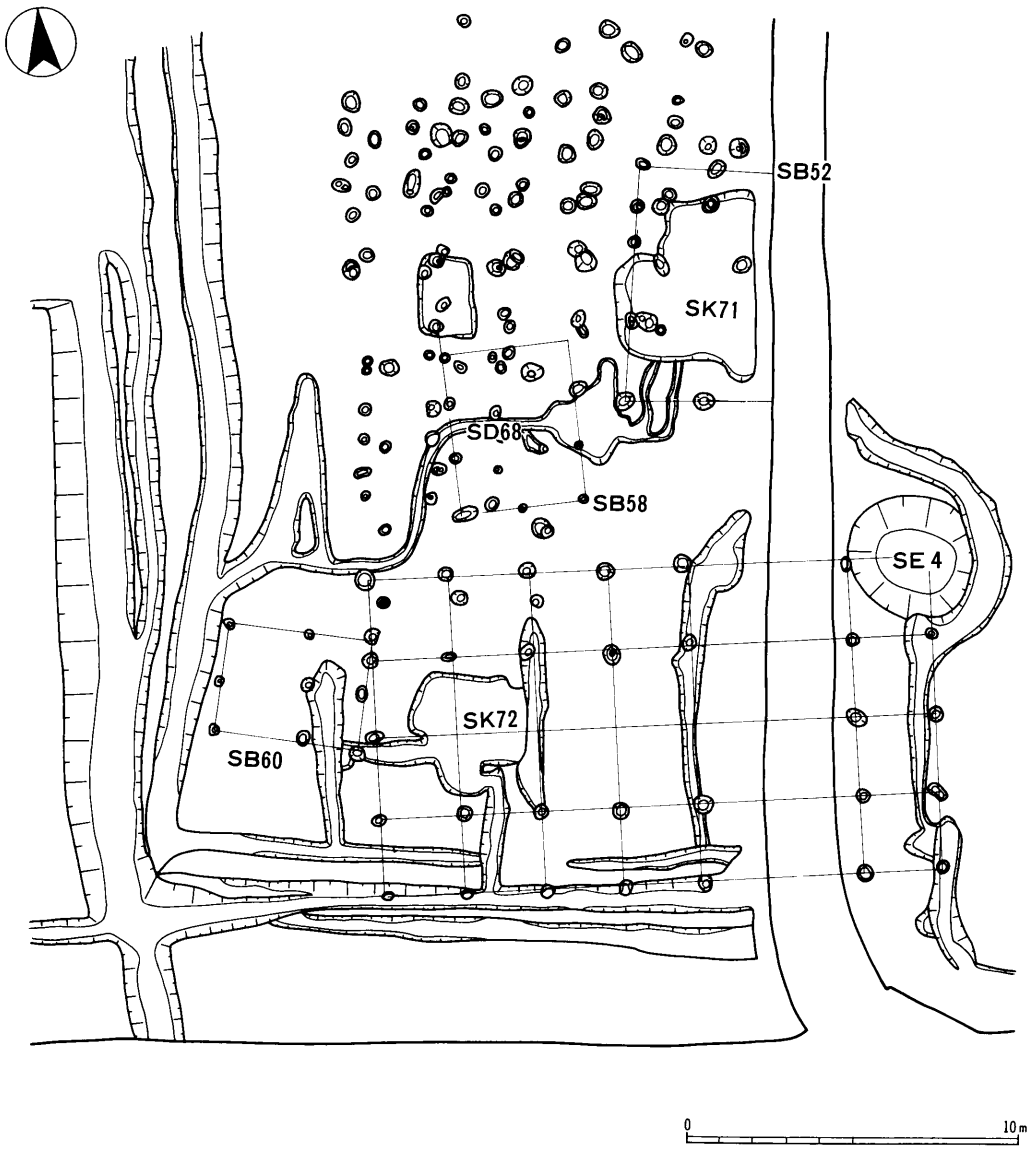


約 1/50

第22図　ＳＥ４・５実測図



第23図　ＳＲ１・２，ＳＫ４・11・40・40・43・44，Ｐ393・1056実測図



第24図　鍛鉄関連遺構群

番号	規模				棟方向	柱間(m)		時期	備考
(SB)	間数	桁行(m)	梁行(m)	面積(㎡)		桁行	梁行		
1	3×2	6.5	4.25	27.62	東西棟 N−74°−W	2.25	2.25		総柱
2	6×4	12.9	8.2	104.96	東西棟 N−75°−W	2.1	2.05		総柱・根石
3	4×3	8.1	5.7	57.51	東西棟 N−73°−W	2.1	1.9		総柱・北面庇
4	4×2	5.9	3.8	22.61	東西棟 N−80°−W	1.65	2.0	13C前	床束
5	3×1	6.0	2.0	12.0	南北棟 N−0°−W	2.0	2.0	13C前	
6	4×2	8.5	4.25	36.12	東西棟 N−90°−W	2.25	2.0	13C前	総柱
7	7×4	15.0	8.5	127.5	東西棟 N−90°−E	2.1	2.2	13C前	総柱
8	3×2	6.25	4.25	26.6	南北棟 N−5°−W	2.25	2.25		床束・根石
9	2×2	5.0	4.0	20.0	南北棟 N−79°−W	2.5	2.0	13C前	床束
10	4×3	9.25	4.65	53.38	東西棟 N−80°−W	2.25	2.1	13C後	床束
11	4×4	8.75	8.25	70.13	東西棟 N−87°−W	2.25	2.25	13C前	総柱
12	2×1	(2.0)	5.0	−	南北棟 N−90°−W	2.0	2.5	12C後	床束
13	2×1	(2.4)	4.75	−	南北棟 N−90°−W	2.4	2.5		床束
14	3×2	6.65	4.1	27.47	東西棟 N−90°−W	2.15	2.0	13C前	総柱
15	5×4	11.4	9.2	62.1	東西棟 N−8°−E	2.4	2.3	12C後	総柱
16	4×3	9.5	6.75	64.12	東西棟 N−83°−W	2.25	2.5	13C前	床束・東南隅土坑
17	3×2	6.4	4.2	26.88	東西棟 N−82°−W	2.0	2.0	13C後	床束
18	2×2	4.5	3.75	16.9	南北棟 N−5°−E	2.25	1.75	12C後	総柱
19	3×1	5.65	(1.75)	16.9	東西棟 N−84°−E	1.8	1.75		床束
20	3×2	5.55	(3.8)	−	南北棟 N−74°−W	1.9	2.1		床束
21	2×1	4.1	(1.85)	−	南北棟 N−88°−E	2.05	1.85	12C後	総柱
22	3×2	5.55	3.5	19.25	東西棟 N−83°−W	1.75	1.75		床束
23	3×1	5.25	(1.5)	−	東西棟 N−88°−W	1.8	1.5		床束
24	3×2	7.0	4.75	33.95	南北棟 N−9°−E	2.2	2.35	13C前	総柱
25	4×3	8.95	6.9	41.17	東西棟 N−87°−W	2.2	2.2	12C後	総柱
26	3×2	7.2	4.9	35.28	東西棟 N−80°−W	2.4	2.6	13C後	総柱
27	3×2	7.3	4.9	35.77	南北棟 N−2°−W	2.4	2.4		床束
28	5×3	10.35	6.6	81.04	南北棟 N−3°−E	2.1	2.2	13C前	総柱・西面庇
29	6×5	14.3	11.75	168.0	東西棟 N−84°−W	2.3	2.3	12C後	総柱・SA1・2を伴う
30	2×2	4.7	4.6	21.62	南北棟 N−8°−E	2.2	2.3	13C後	総柱
31	3×2	6.8	5.0	34.0	南北棟 N−10°−E	2.2	2.4	13C前	総柱
32	3×2	6.5	4.25	27.63	南北棟 N−0°−E	2.25	2.25	12C後	床束
33	4×2	9.45	4.55	43.00	南北棟 N−7°−E	2.1	2.35	12C後	総柱
34	3×2	6.0	4.75	28.5	東西棟 N−85°−E	1.75	2.25	12C後	総柱
35	5×4	12.5	10.2	127.5	東西棟 N−87°−E	2.4	2.4	12C後	床束
36	3×2	7.5	4.2	31.5	東西棟 N−4°−E	2.3	2.45	12C後	総柱
37	4×3	9.25	7.0	64.75	南北棟 N−11°−E	2.25	2.5	13C後	総柱
38	3×2	6.5	4.0	26.0	東西棟 N−84°−W	2.25	1.75	13C後	床束
39	3×2	7.0	4.0	28.0	東西棟 N−84°−E	2.0	2.0	13C前	総柱
40	7×4	16.45	9.6	157.92	東西棟 N−86°−W	2.35	2.3	13C前	床束・根石有り
41	2×?	−	−	−	− N−86°−E	2.0	−	12C後	
42	3×2	5.75	3.7	21.3	東西棟 N−5°−W	2.05	1.7	12C後	床束
43	3×2	5.6	3.95	22.78	南北棟 N−4°−W	1.85	1.95	12C後	床束
44	3×2	6.0	3.75	21.3	南北棟 N−9°−W	1.85	1.95	12C後	床束
45	4×2	9.8	4.75	46.31	南北棟 N−15°−W	2.4	2.3		総柱
46	2×2	4.75	4.0	24.94	東西棟 N−0°−W	2.25	2.0	12C後	総柱・西面庇
47	4×3	4.5	3.3	14.85	南北棟 N−15°−W	1.55	1.75	12C後	床束

第1—1表　掘立柱建物一覧表

番号	規模				棟方向	柱間(m)		時期	備考
(SB)	間数	桁行(m)	梁行(m)	面積(㎡)		桁行	梁行		
48	2×2	4.7	4.6	21.62	南北棟 N−15°−E	2.3	2.3		床束
49	5×3	8.75	6.2	54.25	南北棟 N−9°−E	1.7	2.2		総柱
50	3×2	4.8	4.1	19.68	南北棟 N−6°−E	1.7	2.1	13C前	床束・根石有り
51	5×2	11.0	3.5	37.63	東西棟 N−80°−W	2.5	1.75		総柱・根石有り
52	3×1	7.0	(2.3)	−	南北棟 N−10°−E	2.35	2.3	13C後	床束・根石有り
53	3×3	6.5	6.2	40.3	東西棟 N−79°−W	2.4	2.0		総柱
54	3×2	5.0	4.25	21.25	南北棟 N−6°−E	1.75	2.25	13C前	総柱・根石有り
55	2×1	4.2	1.7	7.14	東西棟 N−81°−W	2.1	1.75		総柱・根石有り
56	3×2	4.75	3.6	17.6	南北棟 N−2°−E	1.7	2.2	13C前	床束
57	3×2	7.0	4.5	30.0	南北棟 N−8°−E	2.2	2.2	13C後	床束
58	2×2	4.0	3.8	15.2	東西棟 N−81°−W	1.8	2.0		総柱
59	2×2	4.1	3.8	15.58	東西棟 N−8°−E	1.9	1.9		総柱
60	2×2	4.3	3.4	13.98	東西棟 N−75°−W	1.65	1.7		総柱
61	3×3	7.6	7.1	53.96	東西棟 N−79°−W	2.7	2.5	13C後	床束
62	4×2	5.75	3.75	21.56	南北棟 N−11°−E	1.25	2.0	14C中	床束
63	2×2	3.5	3.35	12.1	南北棟 N−8°−E	1.75	1.65		総柱
64	2×2	4.5	3.3	14.9	南北棟 N−9°−E	2.2	1.5	13C前	床束
65	5×4	10.7	8.2	113.17	東西棟 N−78°−W	2.15	2.05	13C後	床束・西、東、北面庇
66	4×4	9.85	8.15	80.3	東西棟 N−80°−W	2.5	2.05	14C中	総柱？・東南隅土坑
67	2×2	4.7	4.1	19.3	南北棟 N−11°−E	2.8	2.2		総柱
68	3×2	6.75	4.25	28.69	南北棟 N−8°−E	2.3	2.3	14C中	総柱
69	2×3	5.8	3.9	19.5	南北棟 N−8°−W	2.0	1.9.	12C後	床束
70	4×2	8.0	4.3	34.4	南北棟 N−10°−E	1.95	2.1	12C後	床束
71	2×2	4.25	3.5	16.6	南北棟 N−10°−E	2.25	1.85	12C後	床束
72	3×3	7.6	7.35	55.9	東西棟 N−78°−W	2.5	2.5	13C後	総柱・柱根残
73	3×2	5.75	3.55	14.3	東西棟 N−81°−E	1.8	1.75	13C前	床束
74	2×2	4.75	4.0	17.6	南北棟 N−10°−E	2.35	1.9		総柱
75	3×2	6.4	3.5	22.4	東西棟 N−74°−W	2.1	1.8	14C中	総柱・ＳＡ３を伴う
76	3×2	5.5	4.0	22.0	南北棟 N−6°−E	2.0	1.75	14C中	床束
77	2×2	4.2	3.5	14.7	東西棟 N−40°−W	2.0	1.8		床束・根石有り
78	3×2	7.5	4.5	33.75	東西棟 N−90°−W	2.5	2.0	14C中	総柱・東南隅土坑
79	2×2	3.2	3.0	9.6	南北棟 N−9°−W	1.7	1.55		床束
80	4×3	9.1	6.9	62.76	東西棟 N−10°−E	1.8	2.2	13C後	床束
81	3×2	6.3	4.0	25.2	南北棟 N−5°−E	1.8	2.0	14C前	総柱
82	3×3	7.0	6.5	45.5	南北棟 N−20°−E	2.0	2.25		床束
83	3×3	7.25	6.0	45.5	南北棟 N−24°−E	2.25	2.0		総柱
84	3×2	7.25	4.5	32.63	南北棟 N−22°−E	2.5	2.25		床柱

第１－２表　掘立柱建物一覧表

Ⅳ　遺　　物

1．奈良時代の遺物

竪穴住居、包含層から出土している。出土地点は調査区域の東端に限定され、隣接する大藪遺跡出土遺物と同様のものである。個々の詳細は、表２のとおりである。

2．平安時代の遺物

遺構に伴うものは12世紀後半に限定されるが、包含層からの遺物には、11世紀代のものも含まれている。大半が灰釉陶器であるが、特徴的なものとして黒色土器が見られ、内面及び外面口縁部に細かなミガキと炭素付着が見られる。個々の詳細は、表２のとおりである。

3．鎌倉時代の遺物

全体量としては、出土遺物のうち最も高い割合を占める。山茶碗が圧倒的に多いが、輸入陶磁器をはじめ平安期と比較してバリエーションに富んでいる。

特徴的な遺物として墨書土器が挙げられる。これらはＳＫ２・ＳＥ２から出土したもので、「犬」「上」「首」の３種類があり、「上」以外は外面底部に墨書されたものである。個々の詳細は、表２のとおりである。

4．室町時代の遺物

内容的には、多種に及ぶが遺物の下限が14世紀中頃であることから、糀屋垣内遺跡の集落がこの時期に廃絶したことを示している。特徴的なものとして、ＳＥ５からの出土遺物が挙げられる。これらは井戸埋土の下層から出土したもので、漆器椀、曲物底、植物・動物遺体が見られる。漆器椀は、全体を黒漆で塗り、内面に赤で同心円の文様を描く。この文様の意味するものは不明であるが、現時点で亀山市域では初めての出土である。

植物遺体は、落葉広葉樹の葉、未成熟なウリ科種子、スイセンの球根が出土した。スイセン球根は、子実部がまだ白さを保っていたこともあり、三重県農業技術センター園芸部に依頼し、鑑定と発芽実験を依頼した。この結果、球根は平成３年２月に発芽し、翌年には白色の花をつけた。井戸の埋土は粒子が細かく機密性が高く、伴出した木の葉は出土直後にはまだ緑色を保っていたほどであったので、球根が600年以上をたってなお、命脈を保っていたことは十分考えられる。ただ、この球根は埋土の洗浄により検出されたものであり、厳密に出土地点を確認していない。球根類は長い年月の間に蛋白質が土中に解け出すため、通常20～30年が生存の限度と考えられること、日本原生種なのか渡来種であるのかが不明なうえ、この種のは、環境の変化に応じて土中に潜ることもあることから、必ずしも14世紀代のものとは断定できない。また、スイセン自然種の分布は、東アジア全域にわたるものの、日本のものは原生なのか渡来したものなのかも不明である。従って、14世紀代のスイセンであることが断定できれば、自然史上でも重大な発見となるが、先に述べた不確定要素が有るため、報告はその可能性があるに留めたい。

動物遺体は、タマムシと甲虫（種類の特定不能）の左外羽である。なお、個々の詳細は表２のとおりである。

5，近世以降の遺物

14世紀中頃から19世紀後半までの遺物は見られないが、その後は現代までの遺物が継続的に続く。大多数は、ＳＫ１からの出土であるが、いずれも遺跡の性格を特定し得るものではない。なお、個々の詳細は表２のとおりである。

V　結　　語

糀屋垣内遺跡は、奈良時代後期（８世紀後半）から、室町時代前半（14世紀中頃）までほぼ継続的に営まれた集落である。

遺構の項でも述べたとおり、現地表からの堆積が少なく、層序で遺構の時期決定を行うことができなかった。遺物や方位から判断する限り、それぞれの時代の遺構は調査区域内において特徴的な分布を示している。

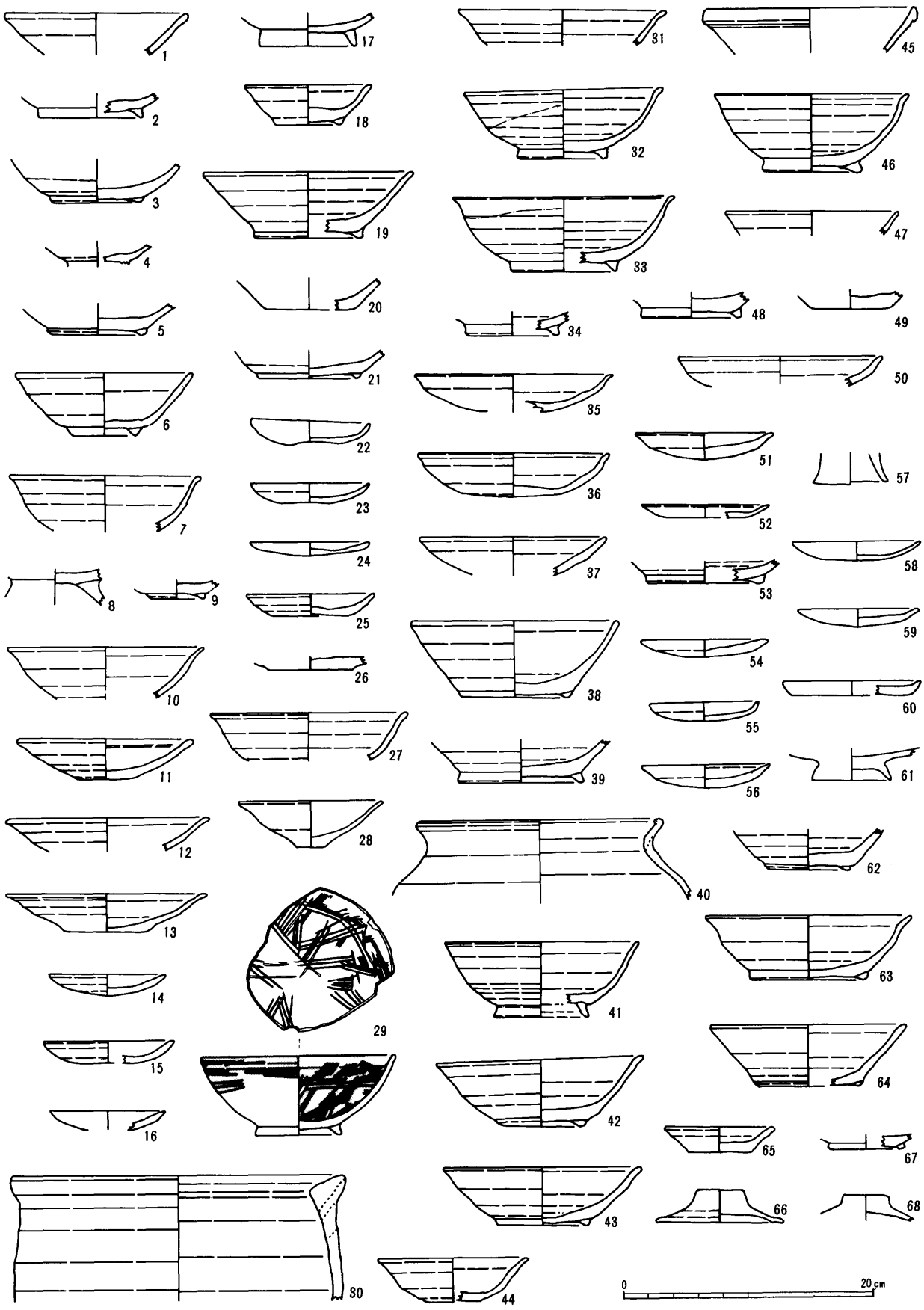
奈良時代の遺構は、調査区域の東端に限定され、隣接する大藪遺跡の建物群と同一のものと考えられる。また、大藪遺跡からは11世紀代の遺構群が発見されており、平安時代後半までは、大藪遺跡が集落の中心部分であり、範囲も大藪遺跡の範囲内に留まっているものと考えられる。しかし、平安時代末には糀屋垣内遺跡にも大型建物を核とする建物群が見られ、その範囲が西に急速に広がったことを伺わせる。

鎌倉時代になると、大藪遺跡の遺構は極度に減少し、集落の主要部分が糀屋垣内遺跡に移行している。この理由は明らかではないが、この時期の遺構がＳＤ25・47などから構成される道と密接な関係をもっていると思われることから、糀屋垣内遺跡内の道の基幹となっていたであろう主要道路の存在が大きな鍵を握っているものと考えられる。また、鎌倉時代後半に成立したと思われる、村落内の鍛冶跡遺構群は、単に一つの産業遺構であるに留まらず、この時期の村落において、職種の分離が始まっていたことを示している。同時に、村落での余剰収穫が非農生産階層の村落受け入れを可能にしたことを表しており、この時期に農業技術の進展や農耕地の増加があったことを伺わせる。また、これらの遺構群に先行し、12世紀末から見られる大型建物を核とした一群は、律令体勢下における流動的な村落から、荘園村落として変革し、13世紀に至り生活共同体としての村落が固定化したことを意味する。

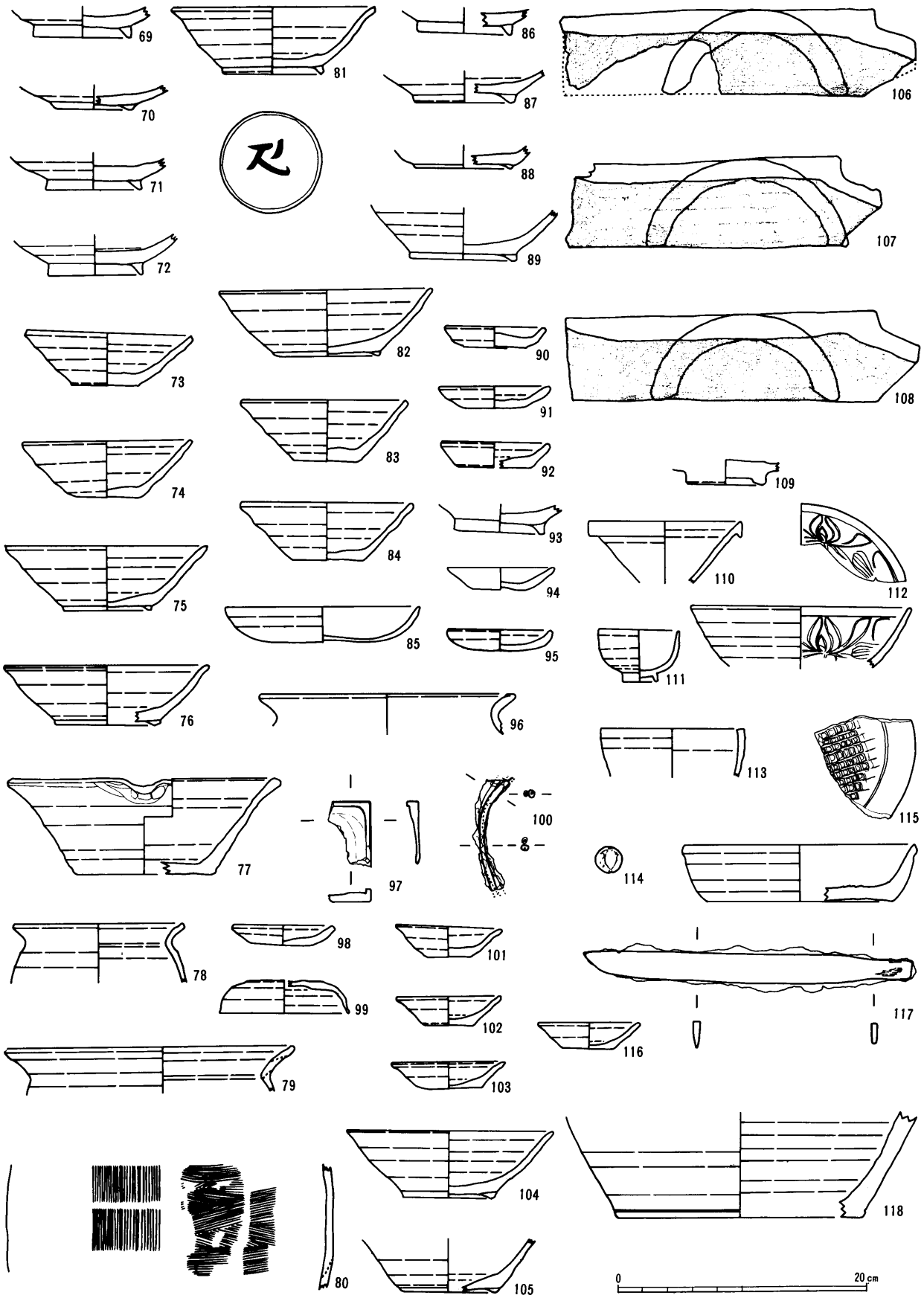
また、今回の調査が広範囲であったことと、奈良時代から室町時代前半まで、ほぼ継続的に遺構を確認し得たことで、それぞれの時代の集落全体の状況を把握できるばかりか、溝や道による村落内での区画設定が明瞭に確認できた。しかも、区画を設定している比較的大型の溝は、長期にわたり存続し、各時代の村落構成が基本的には前時代のスタイルを踏襲し、それを発展させた形態を示していることは興味深い。さらに、村落内での大区画を設定する大型溝は自然地形を利用したもので、村落の発生が、条里制などの人為的な区画設定に先行する可能性を想定させる。逆にそれぞれの時代に特徴的に見られる方位性は、条里制などの影響を多分に受けているものと推測され、古代から中世にかけての村落がどのような意識で構造されていたかが分析し得る。また、大区画から派生する小区画は、村落内での「イエ」の単位や空間が、時代ごとに大きく変化しており、これらについての意識変化も伺える。

今回検出された掘立柱建物個々については、特記すべきものはないが、ＳＢ62・66・68とＳＥ５から構成される建物群のように、周囲を溝で明確に区画し、敷地内に鉤の手に建物を配置することで設定された空間を南面に配する形態は、近世の農家建築の前段階を提示している。想像をたくましくすれば、14世紀中頃には地名のとおり垣根に囲まれた家々が並ぶ、中世村落の姿が復元できる。しかし、糀屋垣内遺跡は、この時期を最後に集落としての姿を失って行く。葉若荘の地名はなおも存続しており、集落そのものが廃絶したとは考えられないが、平安時代以降、大藪遺跡から糀屋垣内遺跡へ集落が移行したように、近世における羽若村から現在の羽若町へと継続する集落への移行があったものと考えられる。この理由は、今回の調査からうかがい知ることはできないが、少なくとも15世紀前半には関氏が野村を中心とした地域に屋形を構え、「亀山」と称する地域をその支配下においていたことが想定されており、現在の亀山市域を中心とした地域が、村落の集合体からひとつの「町」を核とした政治・経済圏を作り出し、これにより恐らく糀屋垣内遺跡の萌芽の素因となった古代からの官道などを基本とした村落構造が崩壊したとみることもできる。

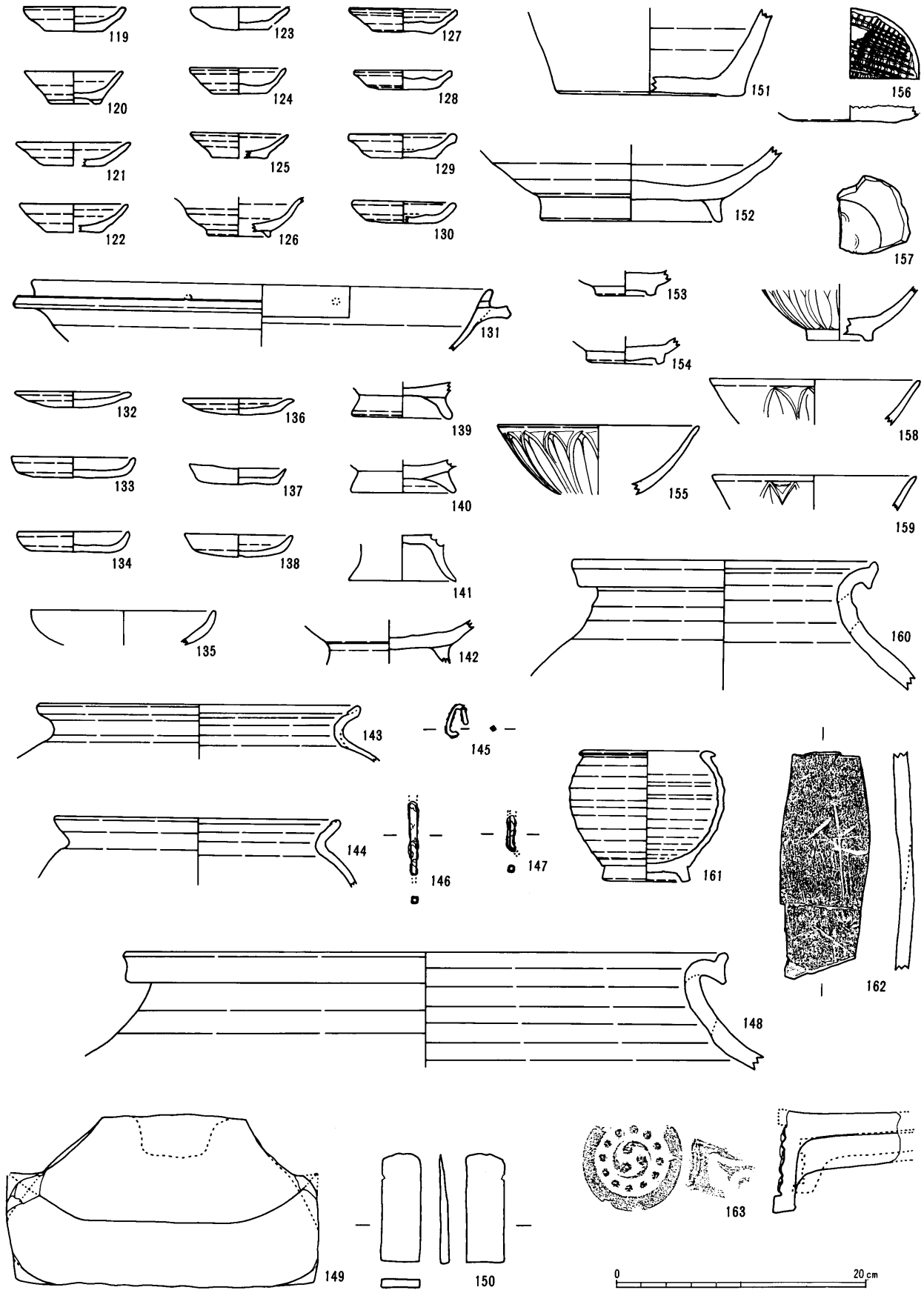
現時点では、まだ分析の至らない点が多くあり、大藪遺跡を含めて多角的な視点から探求する必要がある。いずれにしても、大藪・糀屋垣内の両遺跡は、古代から中世への過渡期集落の好例として注目できるものである。



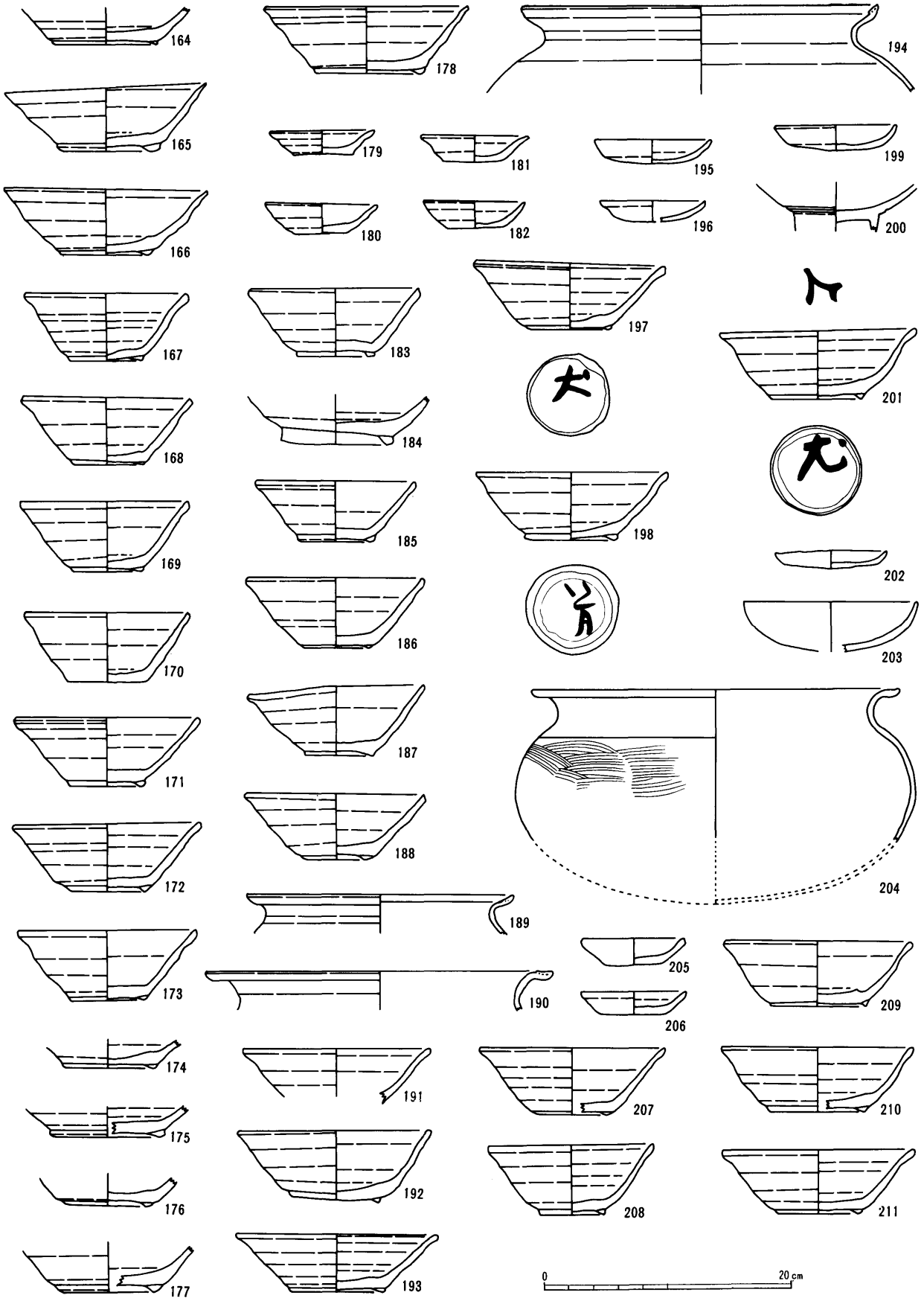
第25図　出土遺物実測図（１）



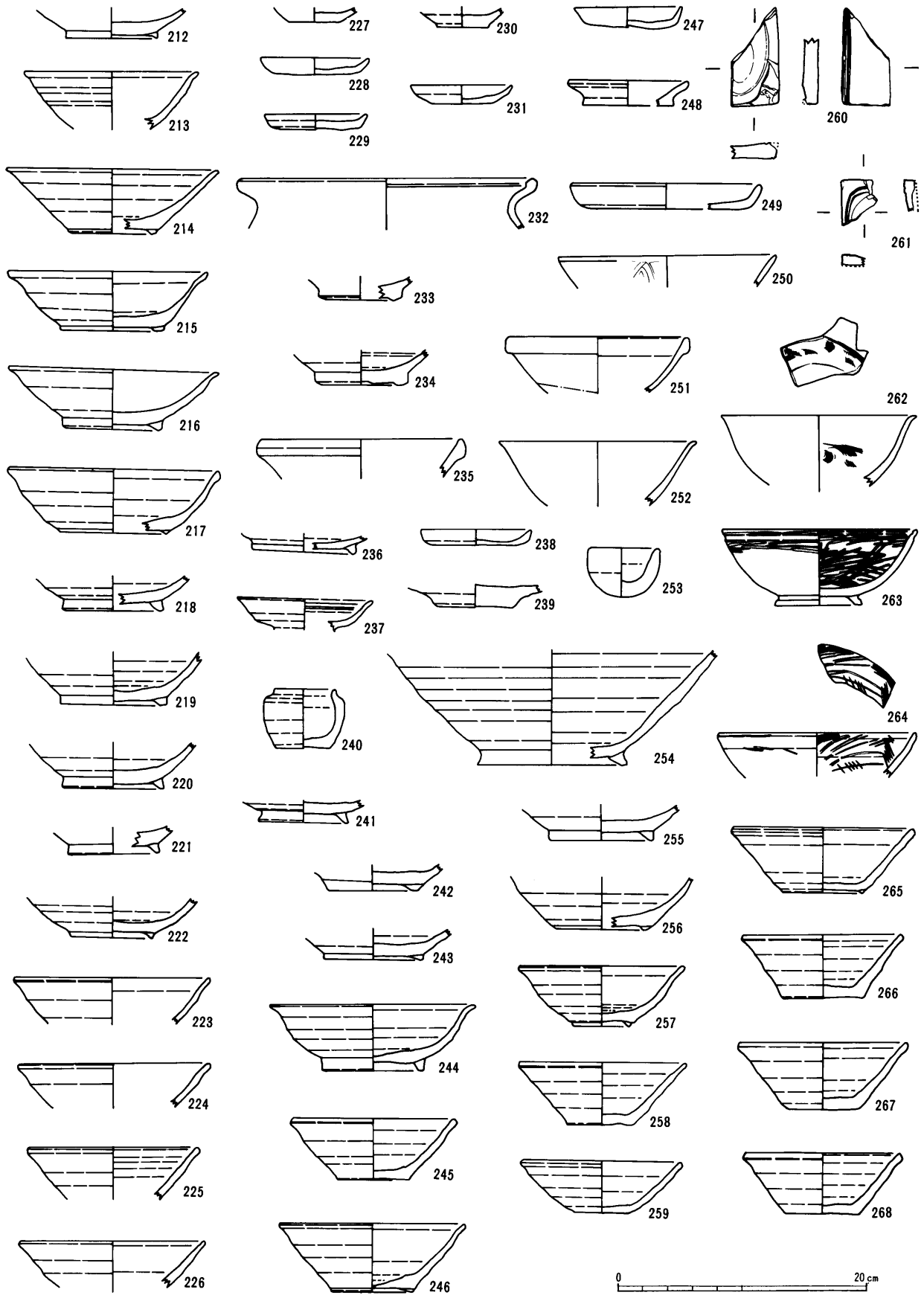
第26図　出土遺物実測図（２）



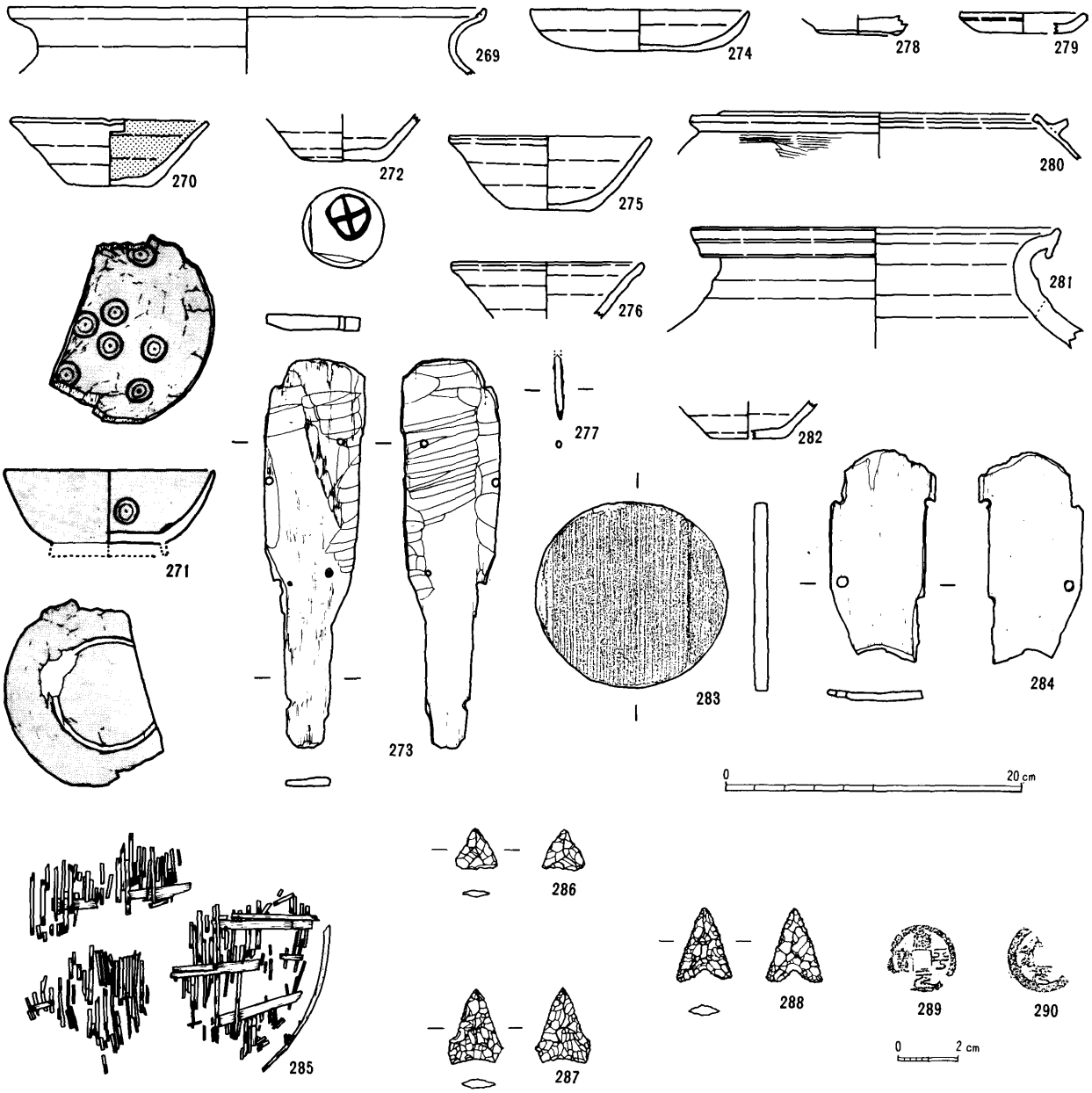
第27図　出土遺物実測図（３）



第28図　出土遺物実測図（４）



第29図　出土遺物実測図（５）



第30図　出土遺物実測図（６）

出土遺構	番号	器種	器形	法量(cm)			観察事項		胎土	備考
				口径	器高	底径	形態の特徴	成形・調整の特徴		
SH1	78	土師器	壺	13.6	(4.7)	−	口縁部は外対する	外面ナデ	砂粒混	
	79	土師器	甑	−	(9.8)	−		外面縦方向にハケ目 内面横方向に2度のハケ目	砂粒混	
	80	土師器	甕	24.8	(3.7)	−	口縁部は外反するが端部はやや内側につまみ上げる	外面ナデ	砂粒混	
	98	陶器	山皿	8.2	(1.6)	4.9	体部まっすぐ開く 底部中央にへこみ	底部イトキリ	砂粒混	
	99	須恵器	蓋坏	10.5	2.6	−	口縁端部はやや肥厚し丸くおさめる	天井部外面未調整		
SH2	105	陶器	山茶碗	−	4.2	7.6	体部は直に立ち上がる 底部中央にへこみ	底部イトキリ後高台ナデシケ	砂粒混	
SB2	1	陶器	山茶碗	14.4	3.3	−	口縁部は肥厚して外反する	外面ナデ	砂粒混	P924
	17	陶器	山茶碗	−	2.6	7.5	器壁厚い	底部イトキリ後高台ナデツケ		P935
SB5	2	陶器	山茶碗	−	(2.0)	9.0	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ	砂粒混	P771
SB7	3	陶器	山茶碗	−	(3.5)	7.2	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ	砂粒混	P811
	4	陶器	山皿	−	(2.2)	7.0	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ	小石含	P1047
	8	土師器	台付皿	−	(2.8)	6.8			砂粒混	P713
	9	陶器	山茶碗	−	(1.5)	4.4	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ	砂粒混	P713
	19	陶器	山茶碗	16.6	5.3	8.6	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ	砂粒混	P811
	20	陶器	山茶碗	−	(2.2)	7.0	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ	小石含	P1047
SB8	38	陶器	山茶碗	16.4	6.1	8.8	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ	砂粒混	P914
	53	陶器	山茶碗	−	(1.8)	9.3	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ、籾殻痕有り	砂粒混	P1860
	58	土師器	皿	10.2	1.5	−				P1860
SB10	54	土師器	皿	10.0	1.4	−			砂粒混	P828
	59	土師器	皿	9.4	1.4	−				P866
SB11	5	陶器	山茶碗	−	(2.6)	7.8	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ、籾殻痕有り	砂粒混	P859
	18	陶器	山皿	10.0	3.1	5.3	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ、籾殻痕有り	砂粒混	P791
	21	陶器	山茶碗	−	(2.3)	8.2	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ、籾殻痕有り	砂粒混	P979
	22	土師器	皿	9.3	2.0	−				P783
	23	土師器	皿	9.2	1.8	−				P843
	25	土師器	皿	5.6	2.2	−				P1031
SB14	6	陶器	山茶碗	14.0	5.0	5.0	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		P837
SB15	7	灰釉陶器	碗	15.0	(4.4)	−	体部内湾して立ち上がる			P710
	12	土師器	皿	9.4	1.2	−				P987
SB16	39	陶器	山茶碗	−	(3.4)	10.0	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ、籾殻痕有り	砂粒混	P867
	55	土師器	皿	8.6	1.4	−				P867
SB18	60	土師器	皿	10.8	1.1	9.6				P1028
SB20	71	陶器	山茶碗	−	(2.5)	7.6	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ、籾殻痕有り	砂粒混	SK70
	72	陶器	山茶碗	−	(2.9)	7.6	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ	砂粒混	SK70
	89	陶器	山茶碗	−	(4.1)	8.5	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ	砂粒混	SK70
	93	陶器	山茶碗	−	(2.3)	7.1	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ	砂粒混	SK70
	94	土師器	皿	8.5	4.1	−				SK70
SB26	10	灰釉陶器	碗	15.0	(4.4)	−	体部内湾して立ち上がる			P691
	11	土師器	皿	14.0	3.2	−				P691
	12	土師器	皿	16.0	2.7	−				P691
	13	土師器	皿	15.8	3.0	−				P691
	14	土師器	皿	9.1	1.7	−				P691
	15	土師器	皿	10.3	1.8	−				P691
	16	土師器	皿	9.1	1.5	−				P691
	27	陶器	山茶碗	15.6	(3.8)	−	体部内湾して立ち上がる			P691
	28	土師器	坏	12.3	2.2	−	体部外反する			P691
	30	土師器	長胴甕	26.4	(9.9)	−	口縁部外反し上面に擬似凹線がまわる			P691

第2－1表　出土遺物観察表

出土遺構	番号	器種	器形	法量(cm)			観察事項		胎土	備考
				口径	器高	底径	形態の特徴	成形・調整の特徴		
SB28	31	陶器	山茶碗	16.4	(2.8)	−	口縁部は肥厚して外反する	外面ナデ	砂粒混	P613
	32	陶器	山茶碗	15.8	7.1	5.4	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ	砂粒混	P563
	45	磁器	白磁碗	16.4	(3.5)	−	玉縁碗			P730
SB29	26	土師器	皿	−	(1.1)	7.3		底部イトキリ		
	29	黒色土器	碗	15.2	6.8	6.2	体部内湾して立ち上がる	外面口縁部、内面にミガキ		P1841
	33	陶器	山茶碗	17.6	5.9	8.3	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ	砂粒混	P588
	34	陶器	山茶碗	−	(1.9)	7.3	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ	砂粒混	P621
	35	土師器	皿	15.6	2.9	−				P379
	36	土師器	皿	15.2	3.4	−				P393
	37	土師器	皿	14.6	3.0	−				P596
	46	陶器	山茶碗	15.2	6.1	7.8	口縁部は強く外反する	底部イトキリ後高台ハリツケ		P393
	47	陶器	山茶碗	13.8	(1.9)	−	口縁部は強く外反する			P650
	48	陶器	山茶碗	−	(2.0)	7.8		底部イトキリ後高台ハリツケ		P622
	49	陶器	山茶碗	−	(1.4)	6.2	口縁部は強く外反する			P960
	50	土師器	皿	16.2	2.3	−				P393
	51	土師器	皿	11.0	2.0	−				P650
	52	土師器	皿	10.0	1.0	−				P960
	57	土師器	台付皿	−	(2.5)	5.8				P1014
SB35	61	土師器	台付皿	−	(2.6)	6.2				P1142
SB36	41	陶器	山茶碗	15.4	5.9	7.5	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ	砂粒混	P1814
SB38	42	陶器	山茶碗	16.2	5.6	6.8	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ	砂粒混	P1056
	43	陶器	山茶碗	15.8	4.5	7.2	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ、籾殻痕有り	砂粒混	P1056
	63	陶器	山茶碗	16.2	5.1	9.2	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ、籾殻痕有り	砂粒混	P1056
	64	陶器	山茶碗	15.6	4.9	8.6	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ナデツケ、籾殻痕有り	砂粒混	P1056
SB39	65	陶器	山皿	8.7	2.0	5.0	口縁部は強く外反する	底部イトキリ		P1121
SB45	67	陶器	山茶碗	−	(1.2)	6.0				P1299
SB46	44	土師器	碗	11.8	3.5	4.4	体部内湾して立ち上がる	底部イトキリ	砂粒混	P1223
	66	土師器	蓋	10.0	2.6	3.7		つまみ部はイトキリ		P1053
	68	土師器	蓋	−	(2.6)	3.6		つまみ部はイトキリ		P1231
SB51	62	陶器	山茶碗	−	(3.3)	6.7	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		P1354
SB66	75	陶器	山茶碗	15.1	5.2	6.9	口縁部は肥厚して外反する	底部イトキリ後高台ハリツケ		SK38
	91	陶器	山皿	8.8	5.3	1.7	口縁部は肥厚する	底部イトキリ		SK38
SB72	40	土師器	壺	19.4	(6.6)	−	口縁部折り返し			P1063
	56	土師器	皿	10.0	1.8	−				P1064
SD9	161	陶器	常滑壺	10.8	10.5	7.0	体部は内湾する			
SD13	135	土師器	皿	14.6	1.8					
	149	石製品	五輪塔火輪	−	13.4	−			花崗岩	一辺25cm
	153	磁器	青磁碗	−	(2.0)	4.7		高台ケズリダシ		
	221	陶器	山茶碗	−	(2.1)			底部イトキリ後高台ハリツケ		
	222	陶器	山茶碗	−	(5.3)	6.4	体部は内湾して立ち上る	底部イトキリ後高台ハリツケ	砂粒混	
	233	陶器	山茶碗	15.6	(3.7)	−	口縁部は肥厚して外反する	底部イトキリ後高台ハリツケ		SK38
	224	陶器	山茶碗	15.2	(3.5)	−	口縁部は肥厚して外反する	底部イトキリ後高台ハリツケ		SK38
	225	陶器	山茶碗	13.3	(4.1)	−	口縁部は肥厚して外反する			
SD14	131	陶器	焙烙	36.6	(4.9)	−	鍔の上部に穿孔			
SD15	147	鉄製品	鉄釘	−	−	−				
SD17	146	鉄製品	鉄釘	−	−	−				
	226	陶器	山茶碗	14.5	(3.6)	−	体部は直に立ち上がる			

第2－2表　出土遺物観察表

出土遺構	番号	器種	器形	法量(cm)			観察事項		胎土	備考
				口径	器高	底径	形態の特徴	成形・調整の特徴		
SD18	139	土師器	台付皿	−	(2.9)	8.0				
	140	土師器	台付皿	−	(2.6)	8.3			砂粒混	
	241	灰釉陶器	碗	−	(1.8)	7.2	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	244	陶器	山茶碗	15.6	5.3	8.0	口縁部は肥厚して外反する	底部イトキリ後高台ハリツケ		
SD20	245	陶器	山茶碗	12.6	4.9	5.8	口縁部は肥厚して外反する	底部イトキリ		
SD26	141	土師器	台付皿	−	(3.6)	8.6			小礫混	
	142	土師器	台付皿	−	(3.5)	10.0				
	220	灰釉陶器	碗	−	(1.8)	7.2	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
SD27	218	陶器	山茶碗	−	(2.9)	8.0				
	219	陶器	山茶碗	−	(4.3)	8.4				
	236	緑釉陶器	碗	−	(1.5)	8.2				
	237	陶器	山皿	10.3	(2.5)	−	口縁部は外反する	高台ハリツケ		
	253	土師器	壺	5.6	3.9	−				
	254	須恵器	こね鉢	−	(9.2)	11.8		高台ハリツケ		
	263	黒色土器	碗	15.4	6.1	7.0				
	264	黒色土器	碗	15.8	(3.5)	−		内面ヘラミガキ		
SD31	242	陶器	山茶碗	−	(2.1)	7.4	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ籾殻痕有り		
SD32	119	陶器	山皿	8.1	1.9	4.6		底部イトキリ		
SD34	151	須恵器	鉢	−	(7.0)	15.0				
	246	陶器	山茶碗	14.8	5.4	6.6	口縁部は外反する	底部イトキリ後高台ハリツケ		
SD35	132	土師器	皿	9.2	1.3	−			砂粒混	
	133	土師器	皿	9.8	1.7	−				
	143	土師器	甕	25.8	(4.4)	−	口縁部は折り返し			
	152	須恵器	鉢	−	(6.1)	14.4				
	162	陶器	常滑甕							外面に「作」の線刻
SD37	240	灰釉陶器	小型壺	4.9	4.8	4.2		底部イトキリ		
SD38	212	陶器	山茶碗	−	(2.4)	7.2	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ籾殻痕有り		
	213	陶器	山茶碗	13.8	(4.6)	−	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ籾殻痕有り		
	214	陶器	山茶碗	15.9	5.1	7.0	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ籾殻痕有り		
	215	陶器	山茶碗	15.5	4.7	7.8	口縁部は外反する	高台ハリツケ		
	216	陶器	山茶碗	16.4	4.7	7.8	口縁部は外反する	高台ハリツケ		
	217	陶器	山茶碗	16.4	5.1	8.4	口縁部は肥厚する	高台ハリツケ		
	227	陶器	山皿	−	(1.2)	4.0		底部イトキリ		
	228	土師器	皿	8.6	1.4	−				
	229	土師器	皿	8.1	1.3	−				
	230	陶器	山皿	−	(1.5)	4.0	底部イトキリ			
	231	土師器	皿	9.4	1.5	−				
	232	土師器	甕	23.0	(3.9)	−	口縁部は折り返し			
	233	磁器	青磁碗	−	(1.9)	6.6		高台ケズリダシ		
	234	磁器	白磁碗	−	(2.8)	7.2		高台ケズリダシ		
	235	磁器	白磁碗	16.5	(3.1)	−	玉縁椀			
	247	土師器	皿	8.4	1.9	−				
	248	土師器	台付皿	9.4	2.0	−				
	249	土師器	皿	14.9	2.0	−			小礫混	
	250	磁器	青磁碗	15.2	(2.5)	−		高台ケズリダシ		蓮弁文
	251	磁器	白磁碗	14.6	(4.5)	−	玉縁椀			
	252	磁器	白磁碗	15.6	(5.1)	−	口縁部は外反する			

第2－3表　出土遺物観察表

出土遺構	番号	器種	器形	法量(cm)			観察事項		胎土	備考
				口径	器高	底径	形態の特徴	成形・調整の特徴		
SD38	260	石製品	硯							砥石に転用
	261	石製品	硯							
	262	磁器	白磁碗	15.4	(5.6)	−	口縁部は外反する			
SD39	120	陶器	山皿	7.8	2.7	4.2	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ	砂粒混	
	121	陶器	山皿	8.8	1.9	4.8	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ	砂粒混	
	122	陶器	山皿	8.5	(2.3)	4.6	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ		
	134	土師器	皿	8.8	1.6	7.8				
	154	磁器	青磁碗	−	2.2	6.2	体部は内湾して立ち上がる	高台ケズリダシ		
	123	陶器	山皿	7.8	1.8	4.4	口縁部は肥厚する	底部イトキリ		
	144	土師器	壺	22.8	(5.3)	−	口縁部は外反する		砂粒混	
	243	陶器	山茶碗	−	(2.5)	7.8	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
SD43	124	陶器	山皿	6.5	2.2	4.2	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ		
	125	陶器	山皿	7.8	2.0	4.4	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ		
	126	陶器	山皿	−	(3.2)	5.0	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ		
	136	土師器	皿	8.8	1.8	−				
	137	土師器	皿	7.5	1.6	−				
	138	土師器	皿	8.6	1.8	−				
	255	陶器	山茶碗	−	(2.8)	8.2	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	256	陶器	山茶碗	−	(4.2)	7.0	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
SD60	155	磁器	青磁碗	16.0	(5.5)	−				蓮弁文
	257	陶器	山茶碗	13.2	4.8	4.7	体部は内湾して立ち上がる 口縁部は外反する	底部イトキリ後高台ハリツケ		
SD61	145	鉄製品	不明	−	−	−				輪状を呈す
	258	陶器	山茶碗	15.2	5.0	5.3	体部は直に立ち上がる 口縁部は外反する	底部イトキリ		
SD65	163	瓦	軒丸瓦				桟瓦の一種			瓦当巴文唐草文
SD67	127	陶器	山皿	8.6	1.8	5.0	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ	砂粒混	
	259	陶器	山茶碗	12.8	4.1	4.4	体部は直に立ち上がる 口縁端部は尖る	底部イトキリ		
	265	陶器	山茶碗	14.6	5.2	6.4	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ	砂粒混	
SD68	128	陶器	山皿	7.7	1.6	5.8	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ		
	129	陶器	山皿	8.3	1.9	5.0	口縁部は外反する	底部イトキリ		
	148	陶器	常滑甕	53.2	(9.3)	−	口縁部は強く外反する			
	157	磁器	青磁碗	−	(4.4)	5.2	体部は内湾して立ち上がる			蓮弁文
	158	磁器	青磁碗	16.7	(3.6)	−	口縁部はやや外反する			蓮弁文
	160	陶器	常滑甕	24.4	(10.3)	−	口縁部は強く外反する			
	266	陶器	山茶碗	12.8	5.0	6.6	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ	砂粒多	
	267	陶器	山茶碗	13.5	5.3	5.8	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ		
	268	陶器	山茶碗	12.6	5.8	4.9	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
SD69	156	陶器	おろし皿	−	(1.5)	7.4		底部イトキリ		
SD69	159	磁器	青磁	16.2	(2.7)	−	口縁部はやや外反する			蓮弁文
SD73	150	石製品	砥石							
SD76	130	陶器	山皿	8.2	1.7	6.0	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ		
SE1	164	陶器	山茶碗	−	(3.0)	8.3	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	165	陶器	山茶碗	16.0	5.0	8.1	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	166	陶器	山茶碗	16.0	5.3	6.1	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ籾殻痕有り		
	178	陶器	山茶碗	16.3	5.5	8.7	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	179	陶器	山皿	8.1	1.9	4.8	口縁部は外反する	底部イトキリ		
	180	陶器	山皿	8.7	2.6	3.6	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ		
	181	陶器	山皿	8.4	2.1	4.8	口縁部はやや外反する	底部イトキリ		

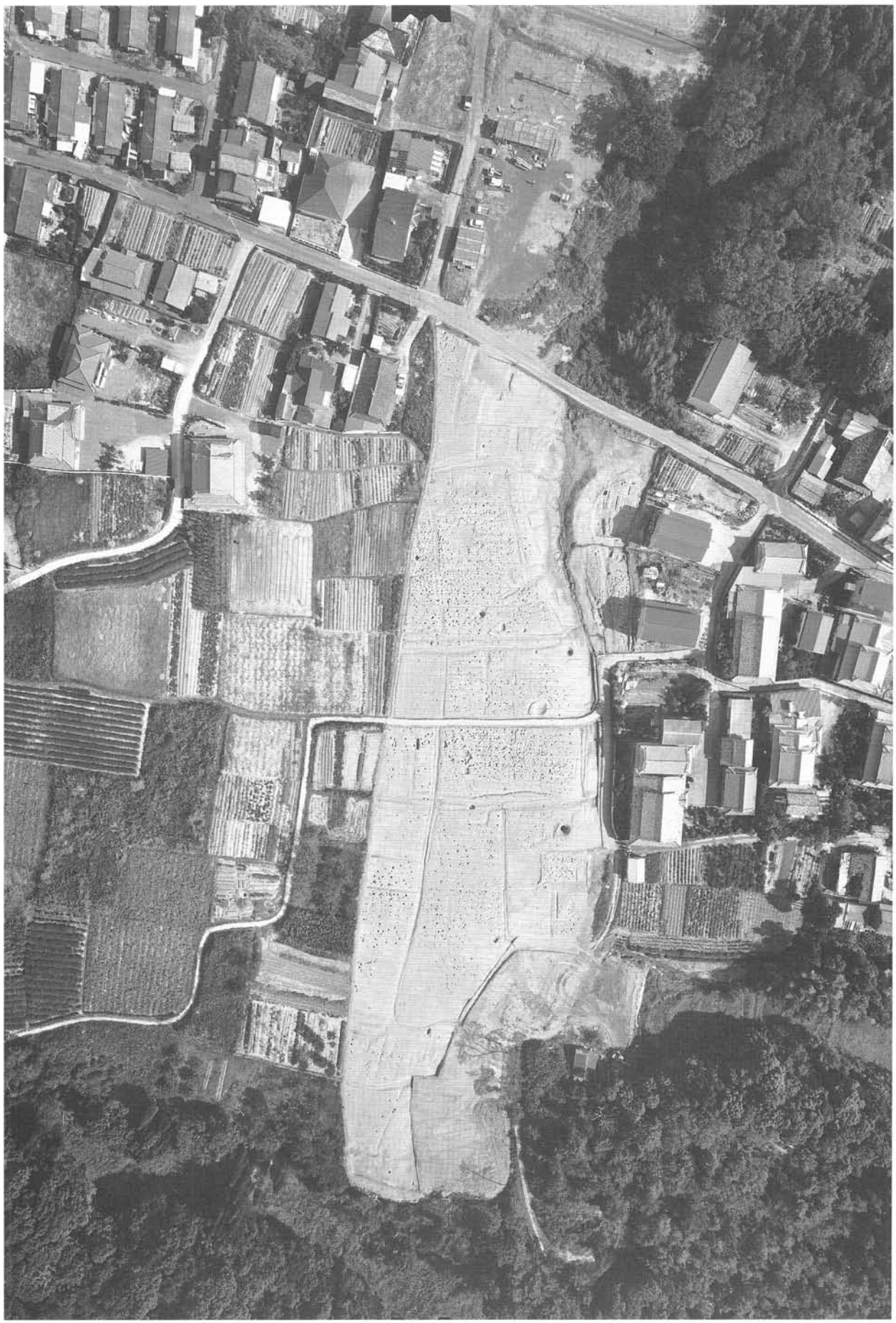
第2－4表　出土遺物観察表

出土遺構	番号	器種	器形	法量(cm)			観察事項		胎土	備考
				口径	器高	底径	形態の特徴	成形・調整の特徴		
SE1	182	陶器	山皿	8.0	2.1	4.4	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後ナデケシ		
	194	土師器	伊勢鍋	29.6	(7.0)	−	口縁部折り返し		砂粒混	
	195	土師器	皿	9.2	2.0	8.5			砂粒混	
	196	土師器	皿	8.4	1.7	−				
	199	土師器	皿	9.5	2.0	6.5			砂粒混	
	200	磁器	白磁碗	−	(3.9)	6.4		高台ケズリダシ		
SE2	167	陶器	山茶碗	13.0	5.4	5.6	体部は直に立ち上がる 口縁部はやや外反する	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	168	陶器	山茶碗	13.4	5.4	5.4	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	169	陶器	山茶碗	13.4	5.4	5.6	体部は直に立ち上がる 口縁部はやや外反する	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	170	陶器	山茶碗	12.7	5.6	6.3	体部は直に立ち上がる 口縁部はやや外反する	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	171	陶器	山茶碗	14.2	5.2	5.5	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	172	陶器	山茶碗	14.8	5.5	5.9	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	173	陶器	山茶碗	14.1	5.5	6.0	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後ナデケシ高台ハリツケ籾殻痕有り		
	183	陶器	山茶碗	13.6	5.4	6.2	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後ナデケシ高台ハリツケ	小礫混	
	184	陶器	山茶碗	−	(4.0)	8.8	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	185	陶器	山茶碗	12.3	4.9	6.0	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後ナデケシ高台ハリツケ籾殻痕有り		
	187	陶器	山茶碗	13.8	4.8	5.5	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後ナデケシ高台ハリツケ籾殻痕有り		
	188	陶器	山茶碗	14.4	5.3	6.0	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	189	土師器	伊勢鍋	21.0	(3.1)	−	口縁部は折り返し		砂粒混	
	190	土師器	伊勢鍋	27.6	(3.1)	−	口縁部は折り返し		砂粒混	
	197	陶器	山茶碗	15.1	5.3	6.6	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後ナデケシ高台ハリツケ籾殻痕有り		
	198	陶器	山茶碗	15.0	5.4	7.3	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	201	陶器	山茶碗	15.6	5.6	7.2	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	202	土師器	皿	8.8	1.5	−				
	203	土師器	坏	13.8	5.0	−	丸底			
	204	土師器	伊勢鍋	29.2	(12.0)	−	口縁部折り返し			
SE3	174	陶器	山茶碗	−	(2.3)	7.3	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ籾殻痕有り		
	175	陶器	山茶碗	−	(2.5)	9.0	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後ナデケシ高台ハリツケ		
	176	陶器	山茶碗	−	(2.3)	6.8	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	177	陶器	山茶碗	−	(3.6)	7.8	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後ナデケシ高台ハリツケ	砂粒混	
	191	陶器	山茶碗	14.8	(4.3)	−	体部は内湾して立ち上がる			
	192	陶器	山茶碗	15.4	5.1	7.0	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	193	陶器	山茶碗	16.0	4.6	7.6	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ籾殻痕有り		
	205	陶器	山皿	8.3	2.1	4.6	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ		
	206	陶器	山皿	8.2	1.8	5.1	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ		
	207	陶器	山茶碗	14.6	5.3	5.4	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	208	陶器	山茶碗	13.2	5.2	4.4	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	209	陶器	山茶碗	15.0	5.1	7.8	体部は直に立ち上がる 口縁部はやや外反する	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	210	陶器	山茶碗	15.2	5.2	7.7	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ	砂粒混	
	211	陶器	山茶碗	15.2	5.1	6.6	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ後ナデケシ高台ハリツケ籾殻痕有り		
	269	土師器	伊勢鍋	32.2	(4.6)	−	口縁部折り返し		砂粒混	
	274	土師器	皿	14.6	2.8					
SE4	275	陶器	山茶碗	13.8	5.0	5.9	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ		
	278	陶器	山茶碗	−	(1.3)	5.0		底部イトキリ後高台ハリツケ		
	279	陶器	山皿	8.4	1.3	6.0	口縁部はやや外反する	底部イトキリ		
	280	土師器	羽釜	27.0	(3.0)	−	口縁部はやや内傾する			
	−	竹製品	篦							

第2－5表　出土遺物観察表

出土遺構	番号	器種	器形	法量(cm)			観察事項		胎土	備考
				口径	器高	底径	形態の特徴	成形・調整の特徴		
SE5	173	木製品	板材							用途不明
	272	陶器	山茶碗	13.0	4.5	5.4	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ		灯明皿に転用
	271	漆製品	碗	14.2	(4.9)	8.0	内外面に黒漆	内面に赤漆で同心円の文様		
	272	陶器	山茶碗	−	(3.1)	5.4	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ		
	276	陶器	山茶碗	12.7	(4.8)	−	体部は直に立ち上がる		砂粒混	
	277	鉄製品	鉄釘							
	281	陶器	常滑甕	24.8	(8.1)	−	口縁部は外反する			
	282	陶器	山茶碗	−	(2.5)	5.2	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ		
	283	木製品	曲物底	13.7	−	−	厚さ0.9cm			竹釘有り
	284	木製品	板材				径3㎜の穿孔4カ所			用途不明
SX1	101	陶器	山皿	8.4	2.4	3.7	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ		
	102	陶器	山皿	8.3	2.2	3.8	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ		
	103	陶器	山皿	9.0	2.2	5.0	口縁部は外反する	底部イトキリ		
	104	陶器	山茶碗	−	(5.4)	7.4	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ籾殻痕有り		
	116	陶器	山皿	8.1	2.1	4.2	口縁部は外反する	底部イトキリ	小礫混	
	117	鉄製品	小刀	長26.1	巾2.3	厚0.6				
SX2	118	陶器	鉢	−	(8.4)	10.0	口縁部は外反する		小礫混	
SK4	81	陶器	山茶碗	16.0	5.5	8.0	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ籾殻痕有り		
	110	磁器	白磁碗	12.0	(4.9)	−	口縁部はやや外反する	玉縁椀		
	111	施釉陶器	坏	6.4	4.3	2.3		高台ケズリダシ		
	113	施釉陶器	碗	11.4	(3.8)	−	口縁端部は丸みをおびる			
SK6	97	硯								
SK11	73	陶器	山茶碗	13.7	4.3	5.2	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ底部に板状当具痕有り		
SK30	74	陶器	山茶碗	13.4	4.8	5.1		底部イトキリ	小礫混	
SK33	112	磁器	青磁碗	17.4	(4.9)	−	体部は内湾して立ち上がる	内面に線刻		
SK35	90	陶器	山皿	8.0	1.6	5.0		底部イトキリ		二次焼成うける
SK40	76	陶器	山茶碗	16.2	4.5	8.4	口縁部は外反する	底部イトキリ後高台ハリツケ籾殻痕有り	小礫混	
	95	土師器	皿	8.2	1.7	−	平底			
SK42	82	陶器	山茶碗	16.8	5.4	8.4	口縁部は外反する	底部イトキリ後高台ハリツケ籾殻痕有り	小礫混	
	85	土師器	皿	15.2	2.9	−				
	96	土師器	伊勢鍋	20.0	(3.2)	−			砂粒混	
SK43	77	須恵器	片口鉢	21.6	7.6	11.2	口縁部は肥厚する	底部未調整		
	83	陶器	山茶碗	13.2	4.9	5.2	体部は直に立ち上がる	底部イトキリ		
	84	陶器	山茶碗	13.6	4.6	5.6	口縁部は肥厚する	底部イトキリ	小礫混	
SK44	106	瓦	丸瓦	長28.5	幅14.8	−	玉縁付丸瓦			玉縁長3.6cm
	107	瓦	丸瓦	長24.2	幅16.0	−	玉縁付丸瓦			玉縁長3.3cm
	108	瓦	丸瓦	長28.3	幅15.0	−	玉縁付丸瓦			玉縁長3.6cm
SK46	69	陶器	山茶碗	−	(2.4)	7.8	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ籾殻痕有り		
	87	陶器	山茶碗	−	(2.6)	8.0	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
SK49	100	鉄製品	鎹							2本が融着
SK65	114	石製品	石丸	径2.2	−	−	直径1.5㎜の小穴2カ所あける			
SK68	70	陶器	山茶碗	−	(2.0)	6.4		底部イトキリ後高台ハリツケ		
	86	陶器	山茶碗	−	(2.1)	7.6	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	88	陶器	山茶碗	−	(1.3)	7.6	体部は内湾して立ち上がる	底部イトキリ後高台ハリツケ		
	109	磁器	青磁碗	−	(2.0)	6.4		高台ケズリダシ		
SK72	92	陶器	山皿	8.6	2.0	5.6	内面中央部凹む	底部イトキリ		
	115	陶器	おろし皿	18.4	4.5	14.9	体部は直に立ちあがる			

第2－6表　出土遺物観察表



調査区全景

PL 2

調査区　東から

調査区　西から

SH 1

SH 2

PL 4

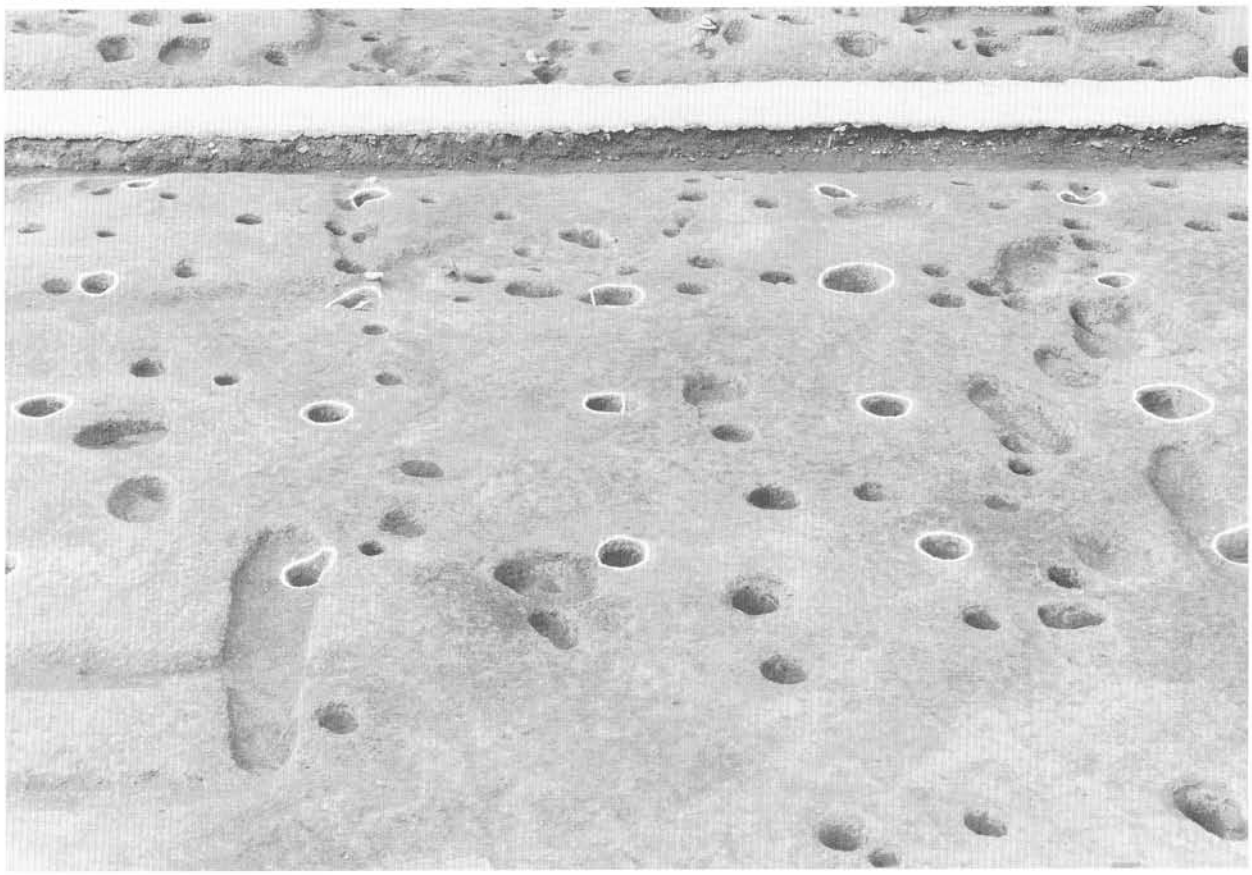
SB11

SB40

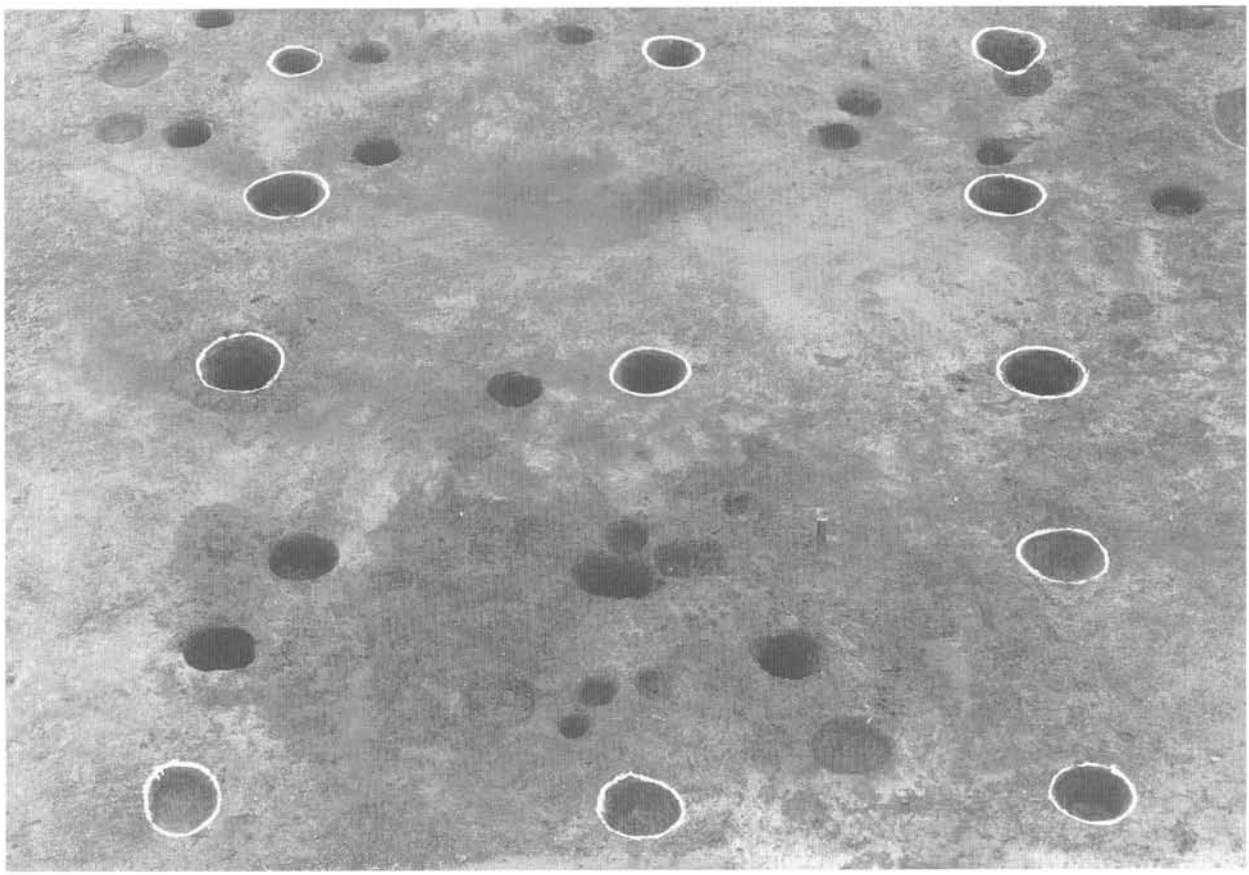
S B 18

S B 46

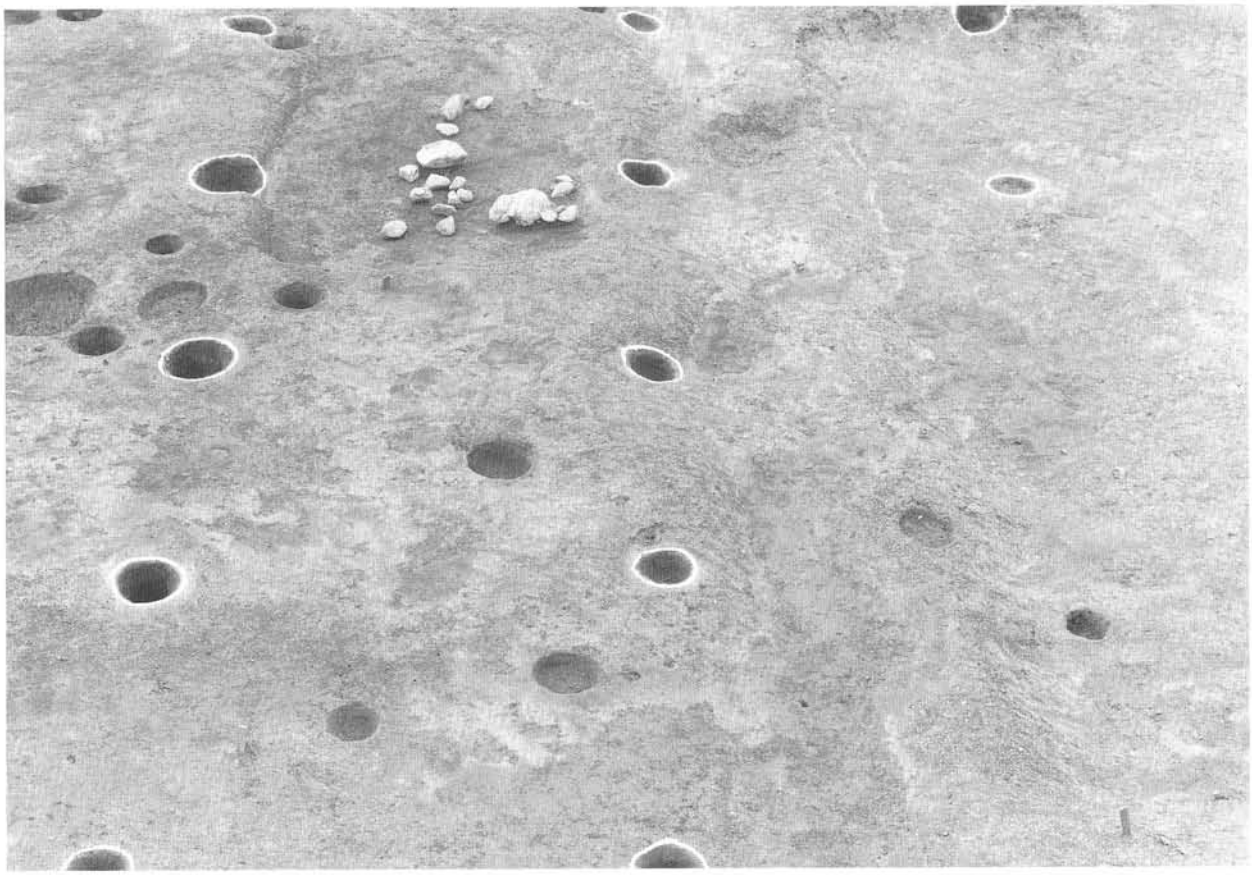
PL 6



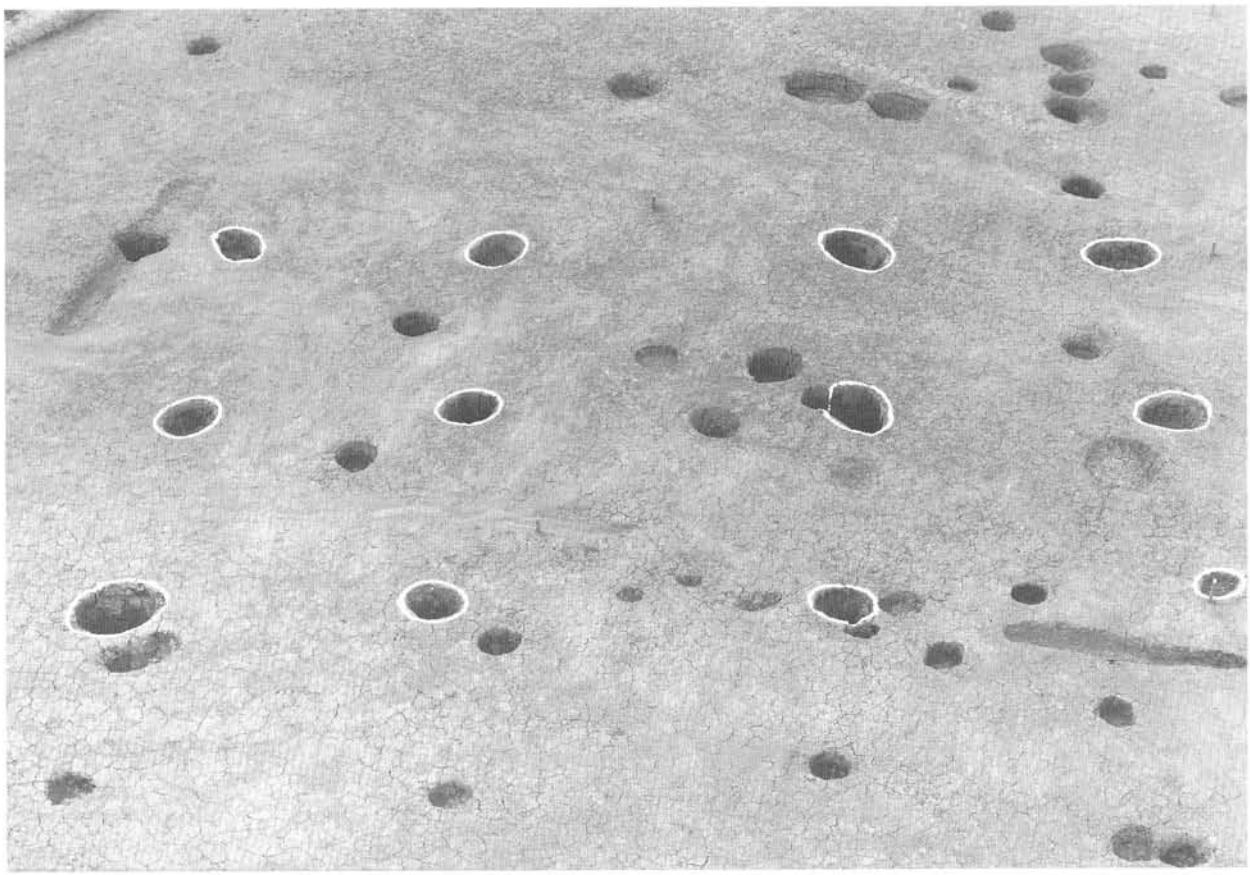
S B37



S B62

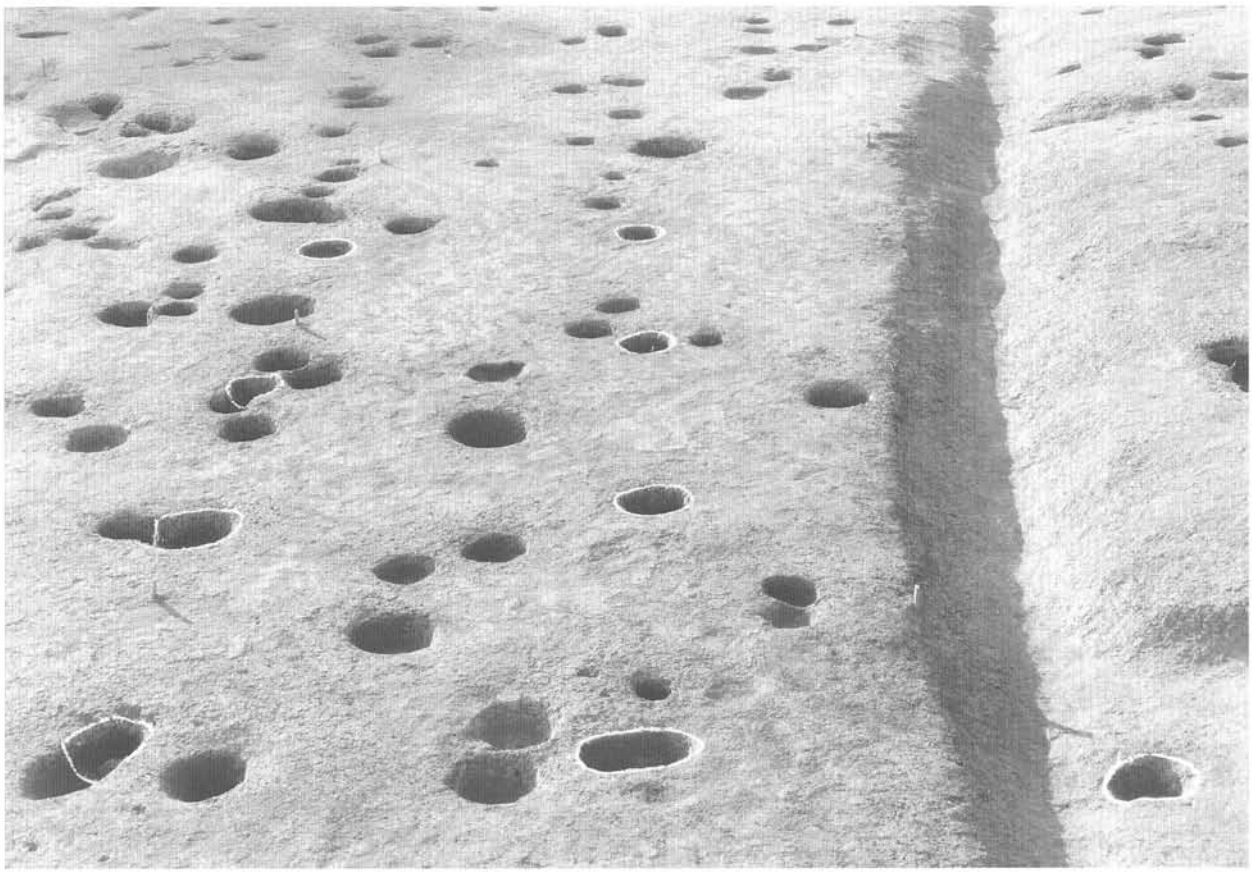


S B66

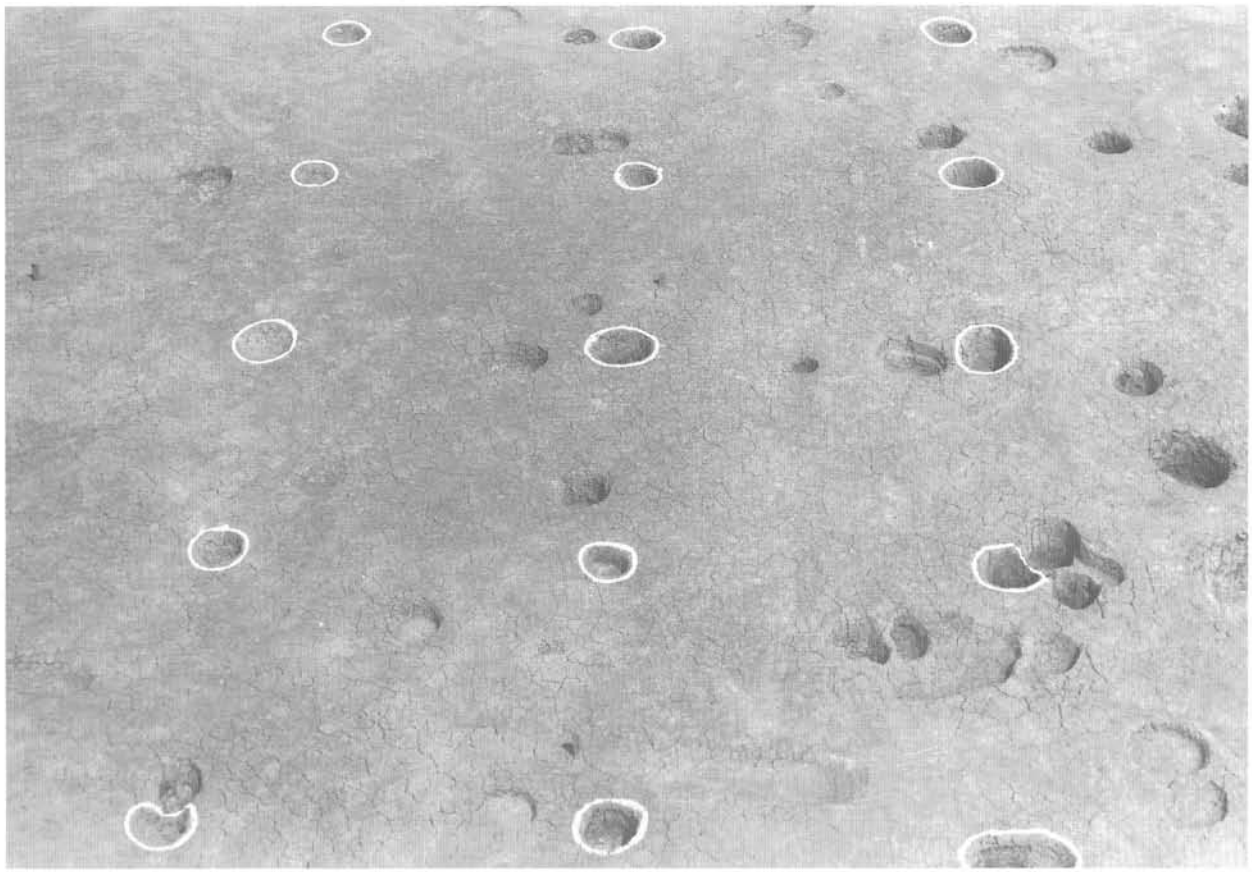


S B81

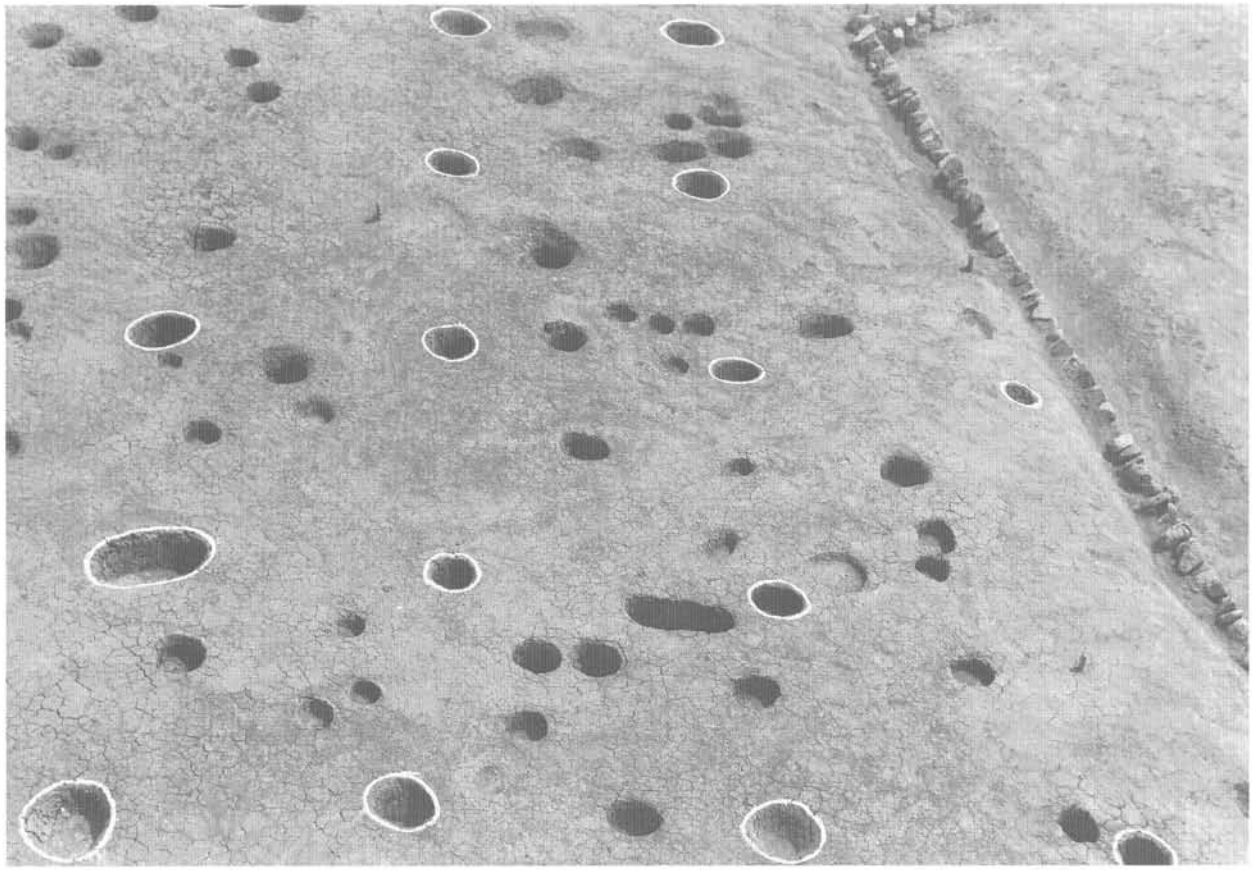
PL 8



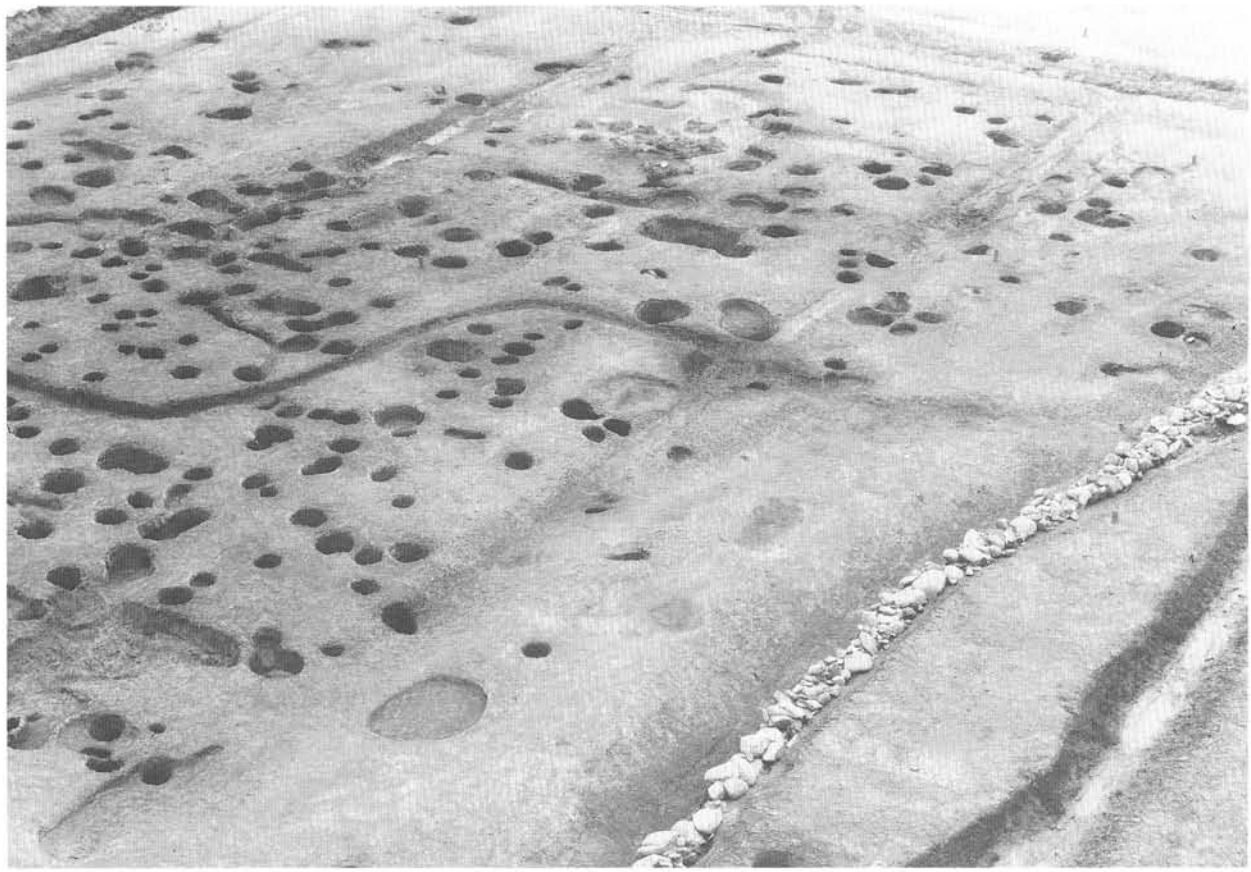
S B72



S B80

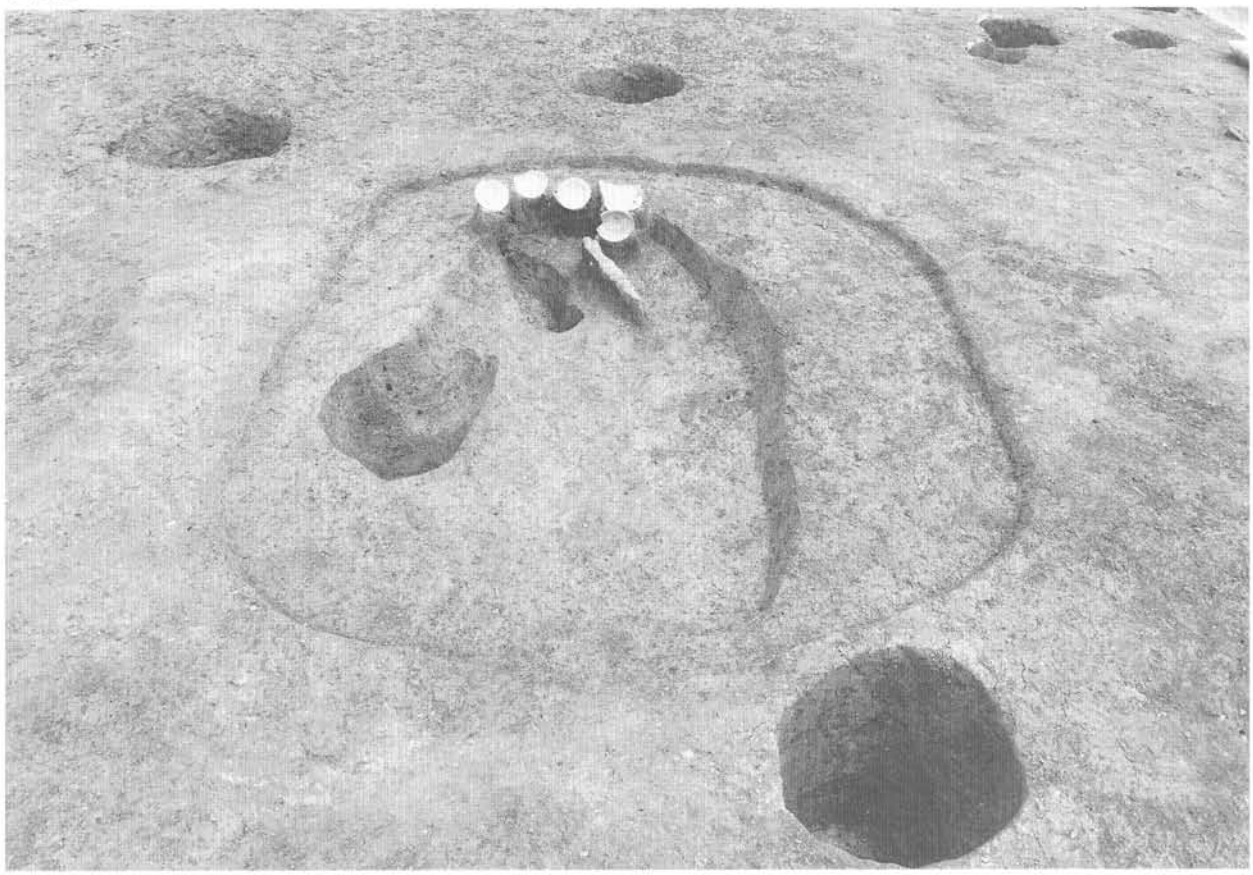


SB75

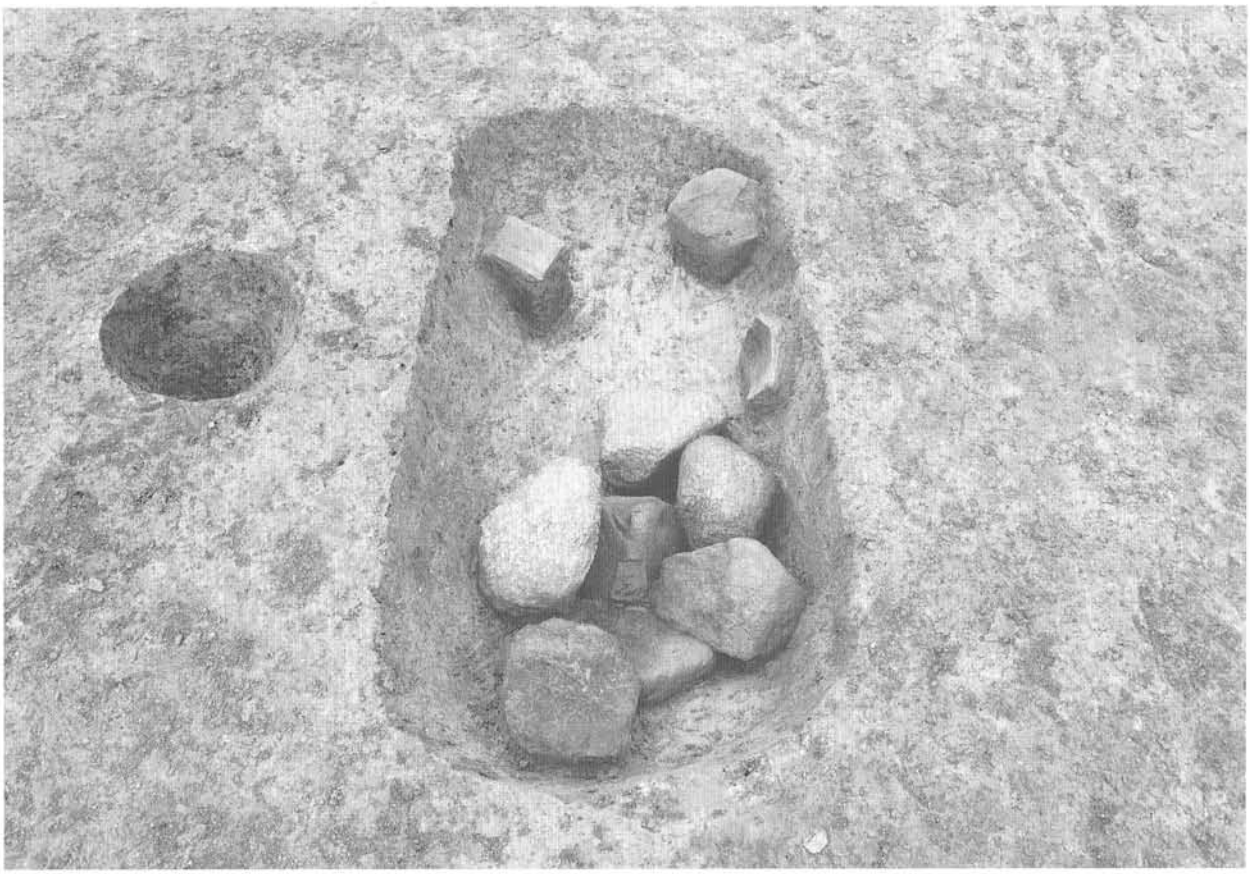


鍛鉄関連遺構群全景

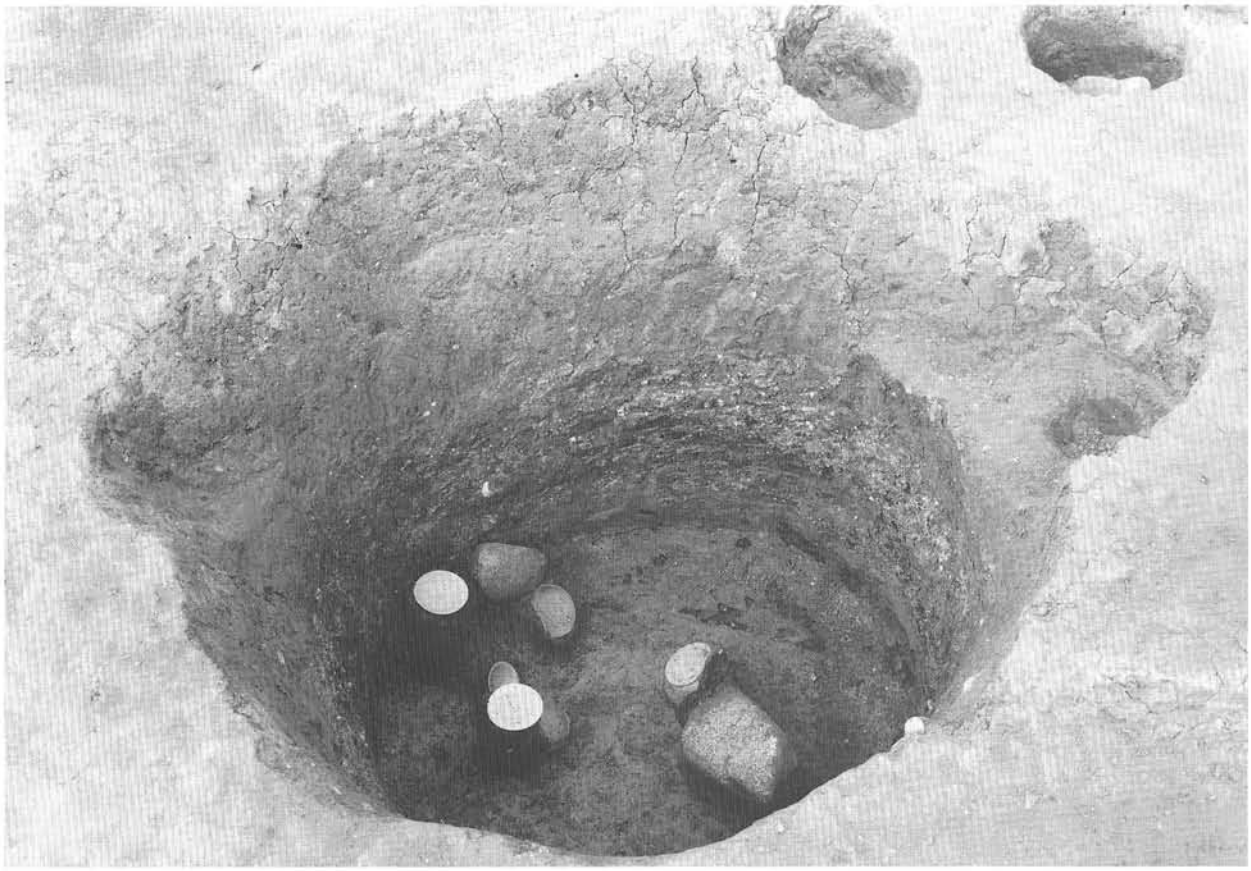
PL10



SX1



SX2

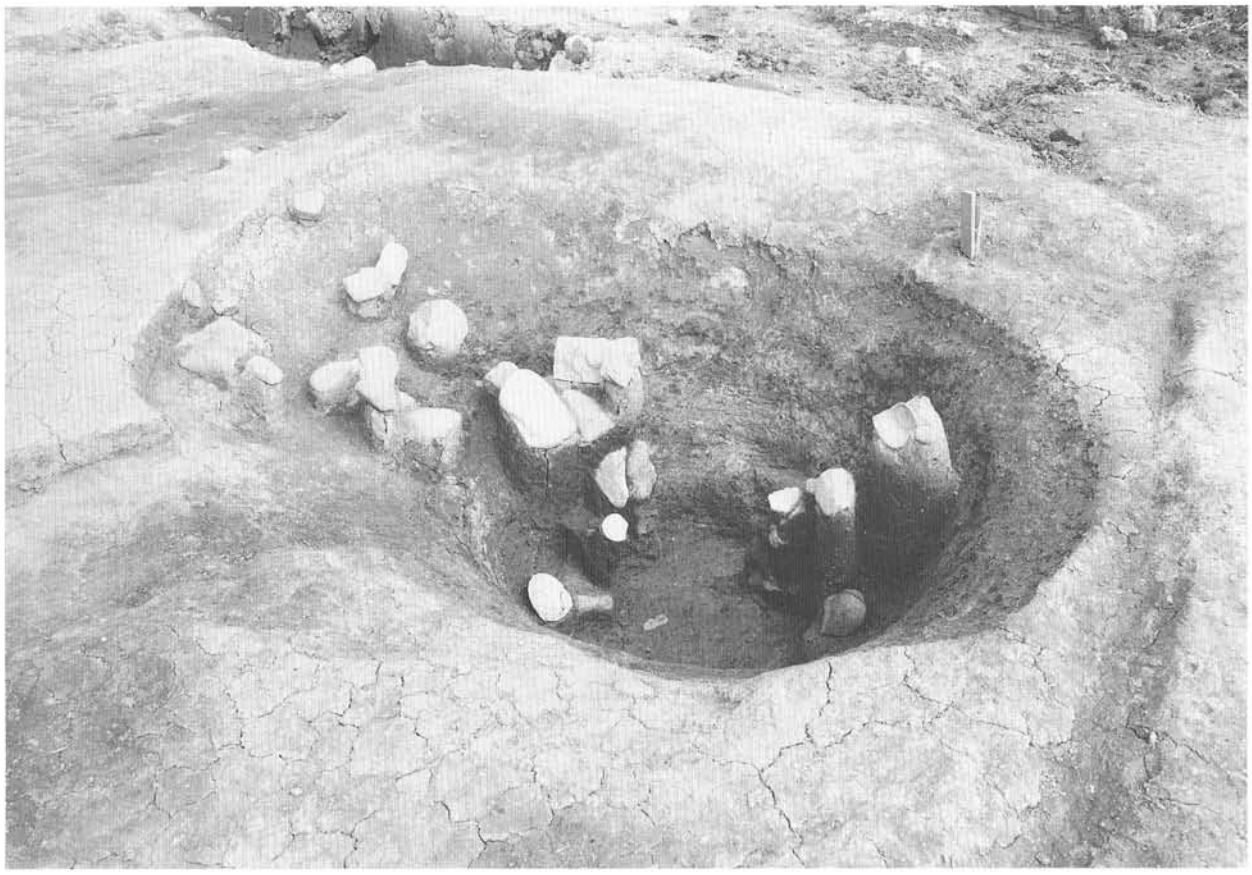


SE1

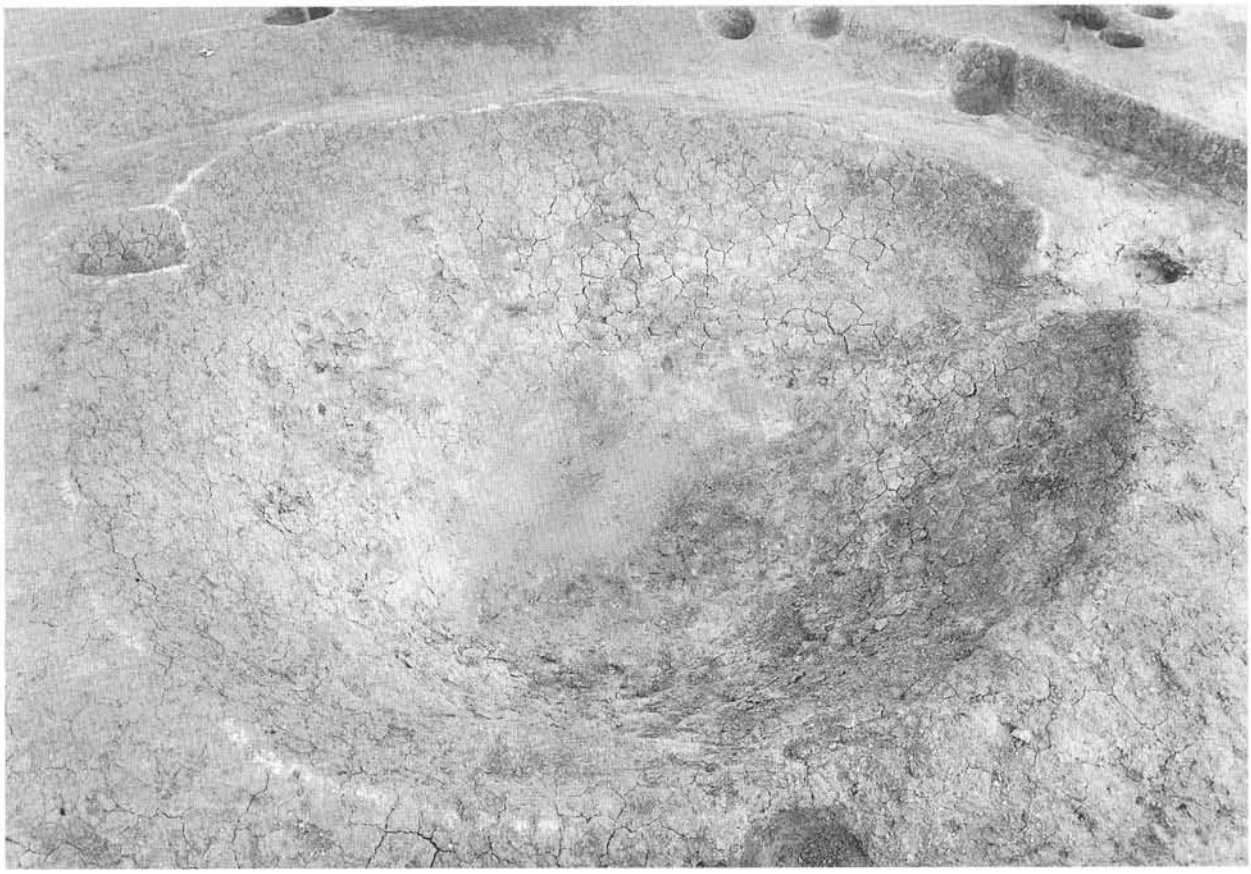
SE1　遺物出土状況

PL12

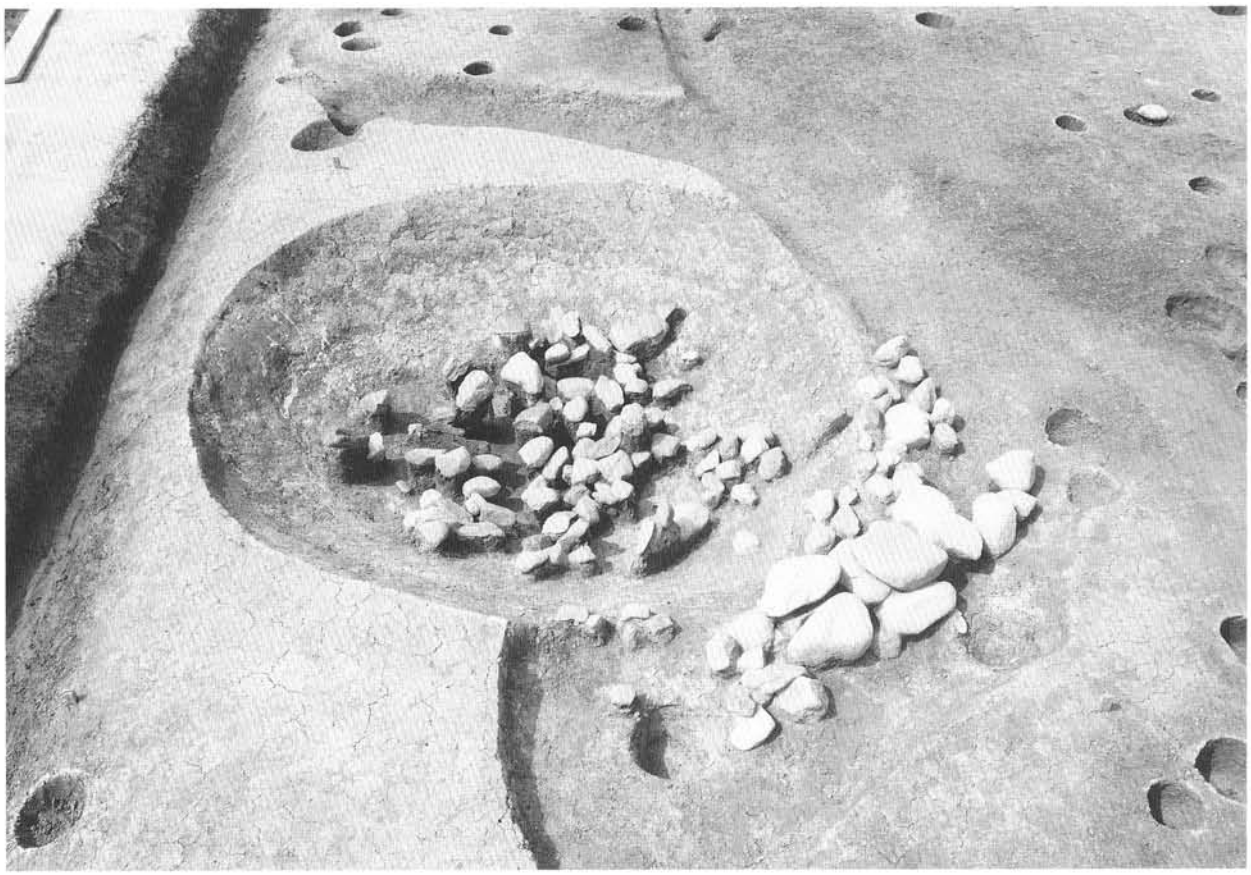
SE2



SE2　遺物出土状況

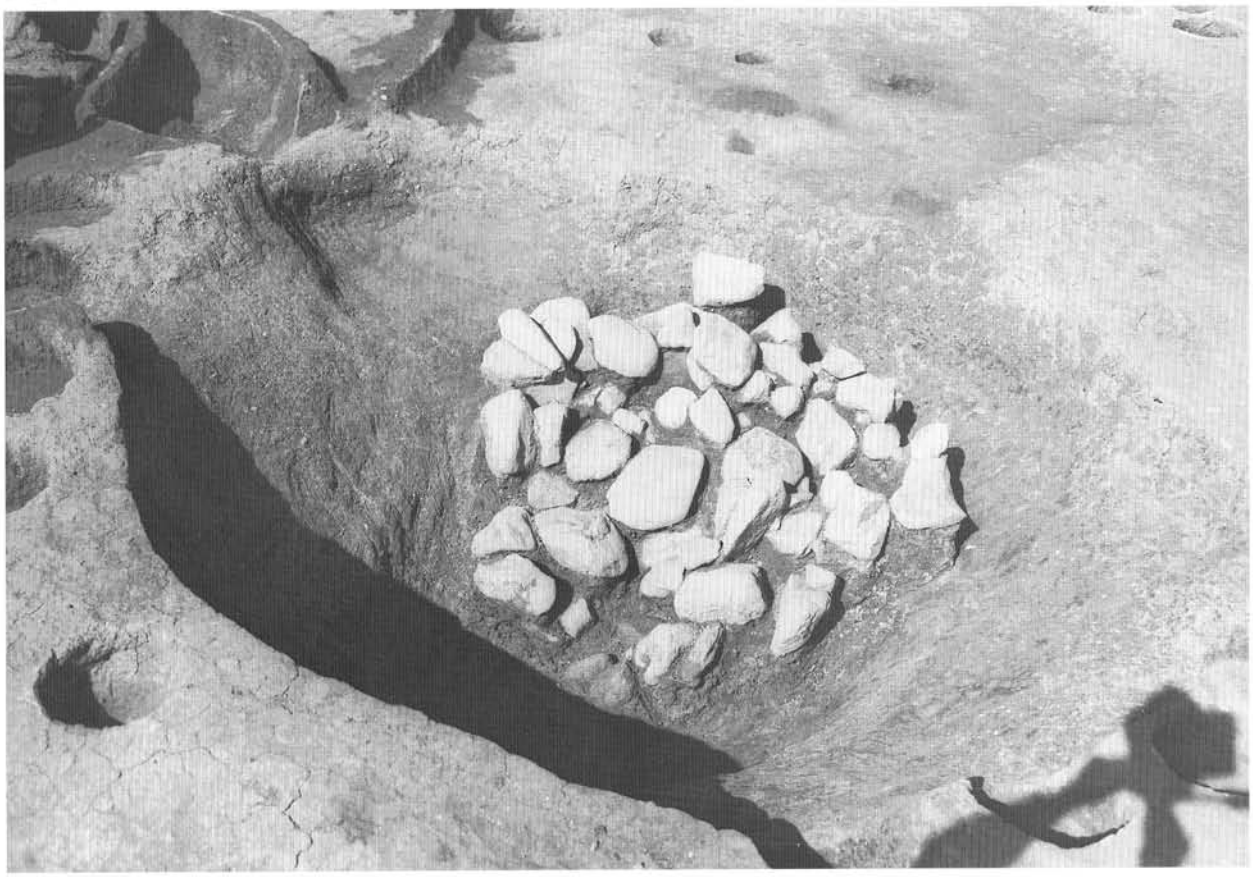


SE4



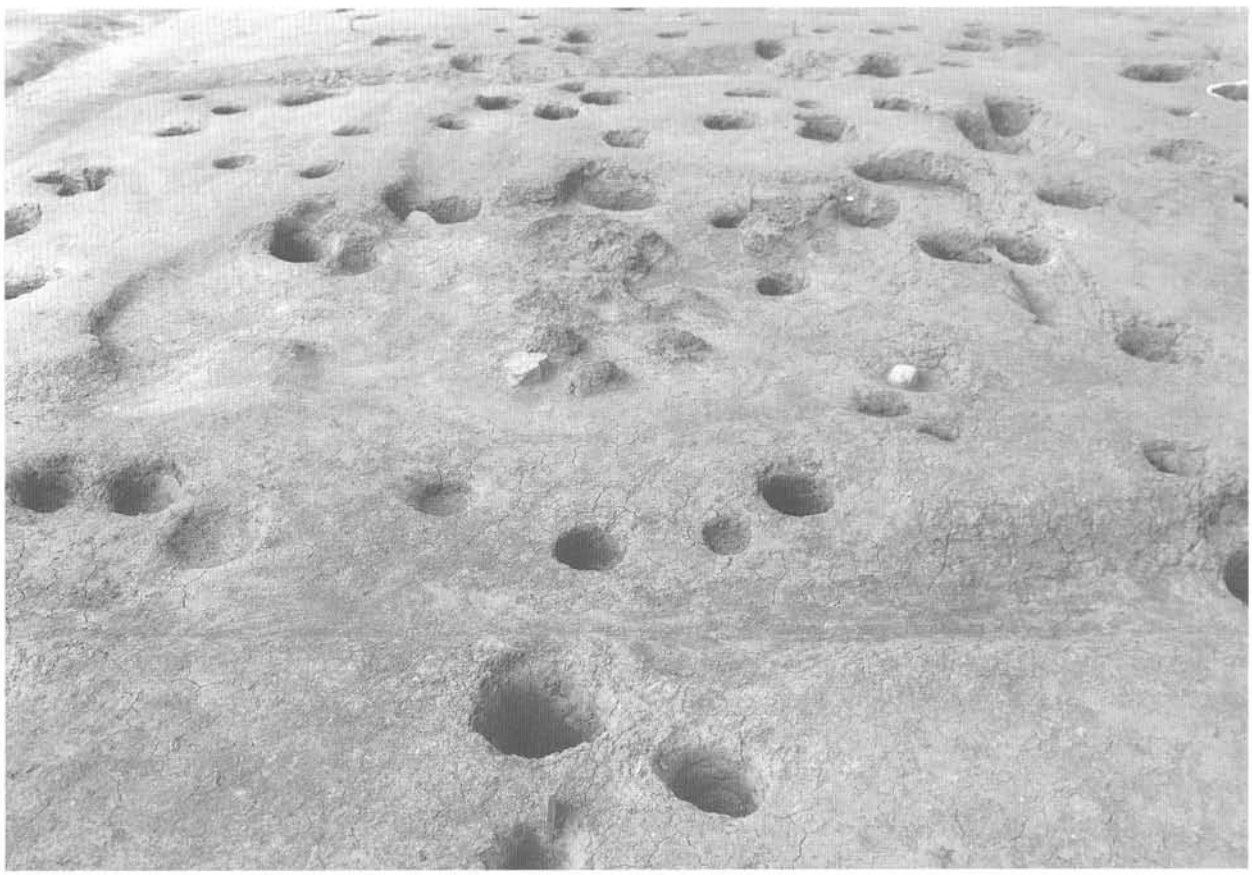
SE4　遺物出土状況

PL14



SE 3

SE 5



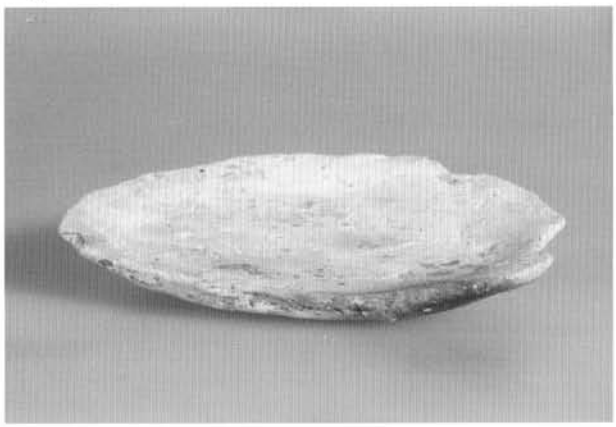
S K72

S K43 • 44

PL16

11

29



59

77

81

97

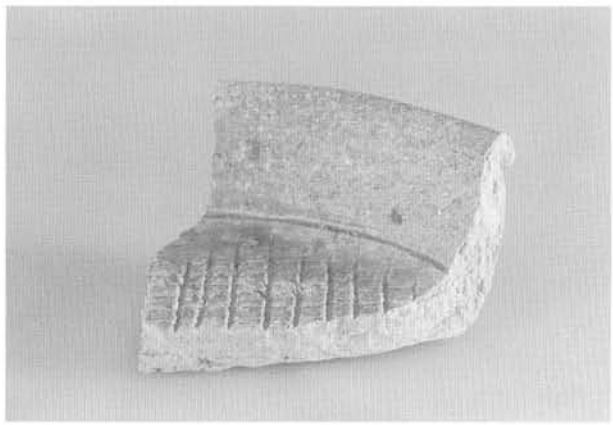
150

99

111

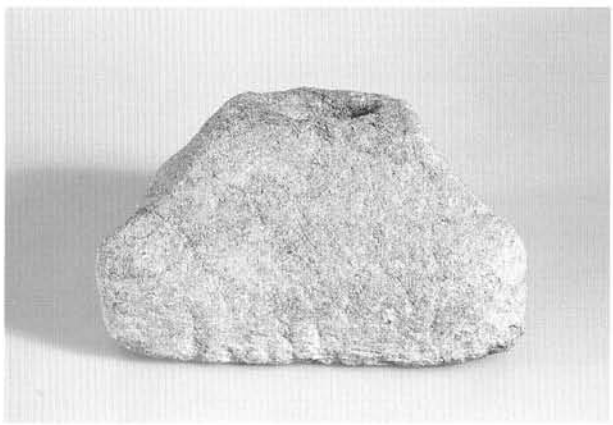
出土遺物（1）

114



115

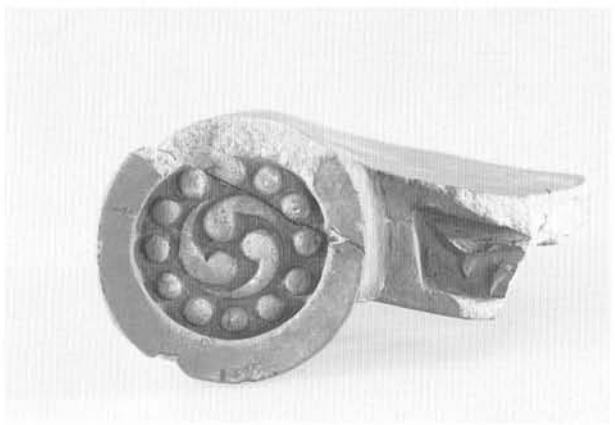
117



149

156

161



163

165

出土遺物（２）

PL18

167

172

178

179

197

198

201

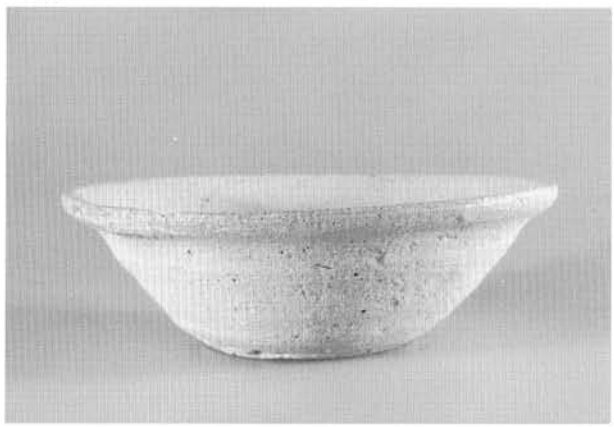
198（底）

出土遺物（３）

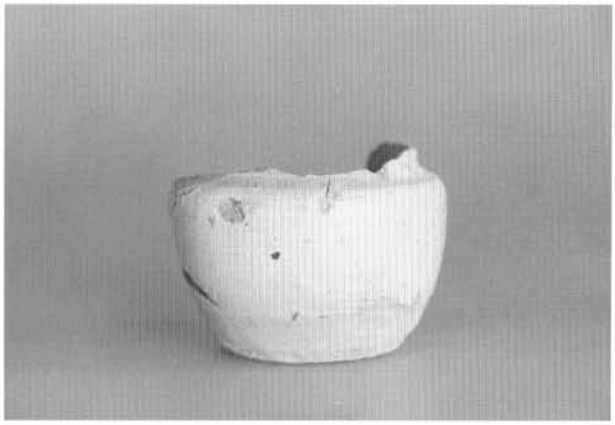
204

206

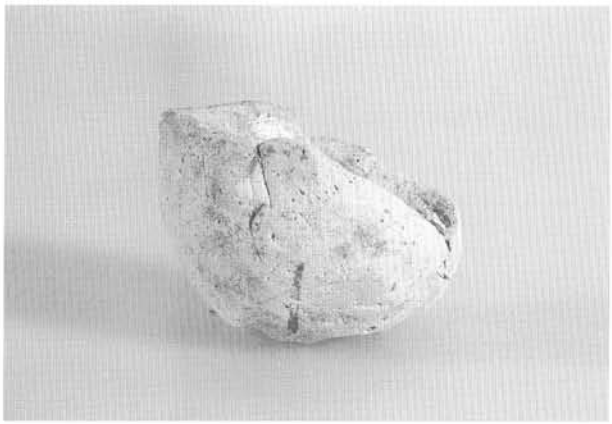
209



211



240



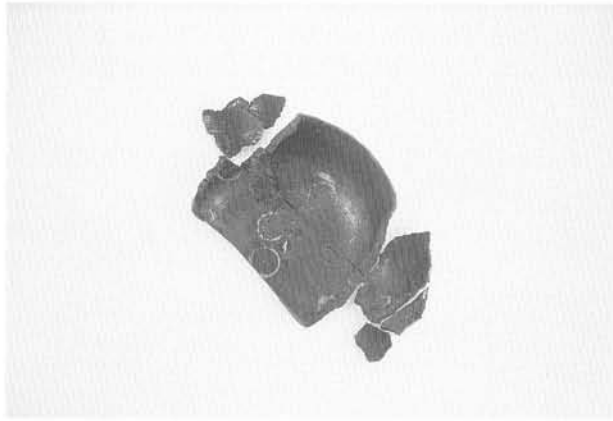
253

263

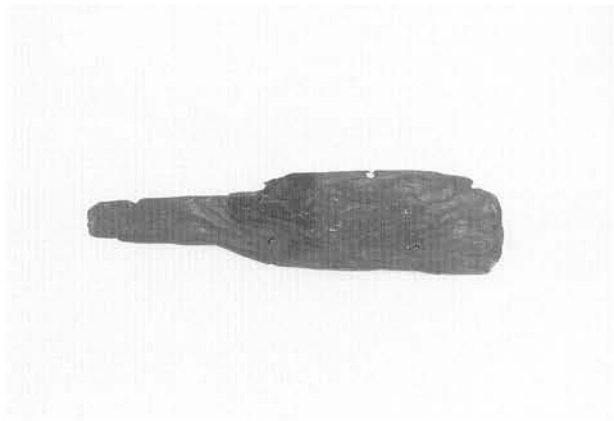
270

出土遺物（4）

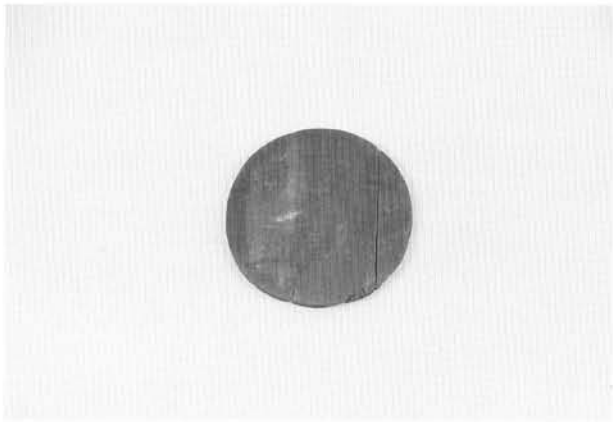
P L 20



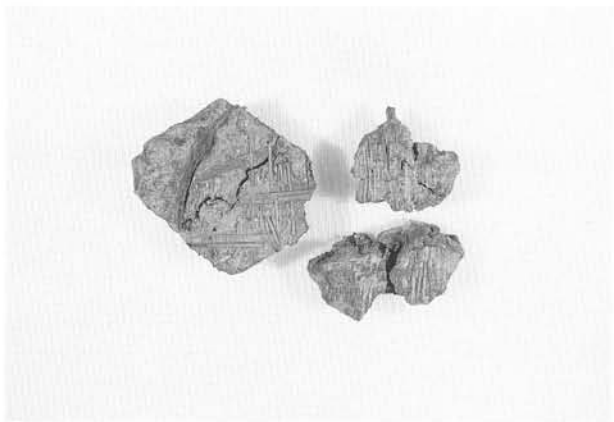
217



273

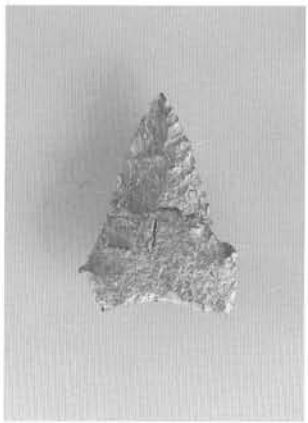


283



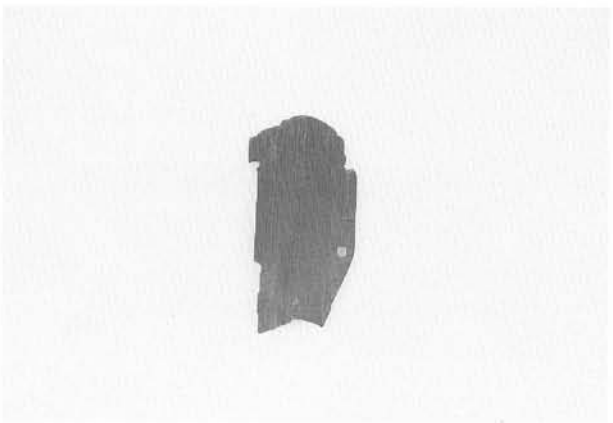
285

286



287

290　289



284

出土柱根

出土遺物（５）

平成 6(1994)年 3月に刊行されたものをもとに
平成 18(2006)年 12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 100-3

糀屋垣内遺跡

1994年3月

編集　三重県埋蔵文化財センター
発行　亀山市教育委員会

印刷者　オリエンタル印刷株式会社